Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-26

社会的つながりがもたらす高齢者の学びと発達

三浦, 知陽

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
2024-03-25

(Date of Publication)
2026-03-25

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲第8807号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490032

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

社会的つながりがもたらす高齢者の学びと発達

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

学位論文

三浦　知陽

はじめに 1
第１部　高齢者の社会的つながりに関する社会的、理論的背景 4
第１章　超高齢社会における高齢者の社会的つながりの現状と課題 6
第１節 高齢者の現状 6
第１項　高齢者をとりまく環境の変化 6
第２項　高齢者の社会参画 9
第２節　つながりをもたらす高齢者の社会活動 12
第１項　高齢者就労の現状 12
第２項　社会参加活動の現状 14
第３節　高齢者の社会活動の効果と課題 15
第１項　先行研究における社会活動の効果 16
第２項　社会活動における人とのつながりがもたらすもの 18
第３項　社会活動に関する研究の課題 18
第２章　社会活動がもたらす高齢者の学び 20
第１節 学びの分類 20
第１項　学びの場による分類 20
第２項　学びの態度による分類 21
第３項　高齢者の学び：「社会活動をとおした学び」 22
第２節 高齢者の「つながりからの学び」 23
第１項　高齢者の活動がもたらすもの 24
第２項　人とのつながりがもたらす学び 26
第３項　本論における学びの定義 27
第３節　高齢者の学びに関する研究の課題 30
第３章　社会活動をとおした高齢者の発達 32
第１節 生涯発達の分類 32
第１項 生涯発達論の３つの分類 33
第２項 高齢期の発達 34
第２節 高齢期の社会活動がもたらす発達 38
第１項 「世代性」 38
第２項 「アイデンティティ」 40

第３項 発達につながる社会活動 40
第３節 社会活動をとおした発達に関する研究の問題 42
第４節 欠けていた視点：社会への効果につながる高齢者の発達 43
第１項 「社会貢献意識」 43
第２項 「コミュニティ感覚」 44
第３項 本論における社会活動をとおした高齢者の発達 45
第４章 新しい高齢期の発達モデルの提案 46
第１節 高齢者の社会活動がもたらす学びと発達に関する研究上の課題 46
第２節 「社会活動をとおした発達のプロセス（仮説モデル）」 47
第３節 本研究の目的 47
第２部 「社会活動をとおした発達のプロセス（仮説モデル）」の検証 49
第５章 「社会活動をとおした学び」の検討 52
第１節 社会活動をとおした学びと活動の種類による違いの検討【研究１－１】 52
第１項 目的 52
第２項 方法 54
第３項 分析手続き 58
第４項 活動をとおした認識と考え方の変化：「社会活動をとおした学び」 59
第５項 社会活動の種類による学びの違い 66
第６項 「社会活動をとおした学び」からみた社会活動の効果 68
第２節 質的研究による学びの変化【研究１－２】 69
第１項 活動継続における「社会活動をとおした学び」の検討 69
第２項 方法 70
第３項 活動継続がもたらす学びの深化 70
第３節 【研究１】のまとめ 72
第６章 社会活動をとおした高齢者の発達の検討 76
第１節 ３か月のトライアル就労をとおした個人の変化：縦断調査【研究２】 76
第１項 目的 76
第２項 調査方法 76
第３項 分析方法 82

第４項　量的な調査からみた３か月の変化　82
第５項　質的な調査からみた３か月の変化　87
第６項　【研究２】の考察　89
第２節　発達につながる社会活動：社会調査による検討【研究３―１】　91
第１項　目的　91
第２項　方法　91
第３項　結果　94
第４項　【研究３－１】の考察　102
第３節　社会参加活動をとおした交流、仲間、学びの発達への影響【研究３－２】　105
第１項　目的　105
第２項　方法　105
第３項　結果　108
第４項　【研究３―２】の考察　110
第５項　【研究３】のまとめ　111
第４節　【研究２】と【研究３】のまとめ　112
第７章　社会活動をとおした発達モデルの検証　114
第１節 社会参加活動における交流と学び、発達の関係【研究４－１】　114
第１項　目的　114
第２項　方法　114
第３項　結果　117
第４項　「交流の広がり」からの発達への影響における「つながりからの学び」の媒介効果　120
第２節 社会参加活動をとおして得た仲間の学びへの影響【研究４－２】　121
第１項　目的と方法　121
第２項　結果と考察　122
第３節　社会参加活動における「つながりからの学び」の発達への影響　123
第３部　総合考察　125
第８章　知見のまとめと総合考察　125
第１節　「社会活動をとおした学び」とはどのようなものか（課題１）　126

第２節　社会活動は発達を促進するか（課題２）　128
第３節　社会活動における「つながりからの学び」は発達を促進するか（課題３）　129
第４節　「社会活動をとおした高齢者の発達モデル（理論モデル)」　131
第９章　本研究の貢献と今後の展望　135
第１節　理論的貢献　135
第２節　社会的貢献　136
第３節　本研究の限界と今後の展望　138
＜参考文献＞　140
＜初出一覧＞　151
＜謝　辞＞　152
＜APPENDICES＞　153

はじめに

65歳以上の高齢者が総人口に占める割合を示す高齢化率は、2010年に23%となり日本は超高齢社会に突入した。以降上昇を続け、2023年現在では29.1%と、約10年で5.9ポイント上昇しており（総務省統計局，2023)、高齢者が15歳から64歳までの人口の次に多いセカンドマジョリティグループとして扱われるようになって久しい（小田，2010)。しかし平日の昼間の習い事やスポーツクラブの参加者をみると、セカンドではなくマジョリティーグループという場合も多い。

筆者は絵画教室を主宰しているが、筆者の絵画教室にも高齢者が通っている。絵画教室には老若男女、バックグラウンドも多様な人が集まるが、80 歳を過ぎてもエレベーターのないビルの３階まで毎週通ってきてくれる人もいる。

健康であるからこそ通える絵画教室であるが、ご本人に聞くと元気になるために頑張って通っているとおっしゃる。「今日もしんどくてどうしようかと思ったけど、頑張って来ました」と息を荒くしながら３階まで上がって来られる日もある。また、「描いた絵がいっぱいたまるけど、死んだら子どもたちに全部捨てられるわね」と笑いながら、また次の絵に挑む。さらに、今日はしんどいからという理由で、「おしゃべりだけね。絵は描かないわ」とおしゃべりだけして帰るときにもやはり教室に来ると元気になったと言って帰られる。筆者は、このような高齢者を何人も教室で見る度に、身体がきついなら習い事なのだから休んだらよいのにと思い、全部捨てられると言いながらなぜ次の作品に意欲的取り組めるのか、絵を描かなくても絵画教室のメンバーと話すだけのために月謝を払うのかと不思議に感じた。しかし70歳の男性が、絵画教室は元気になるだけではなく、「今まで知り得なかった人たちと出会いがあって、こんな風に若いこと話したらいいんだなとかだんだんわかってきて楽しい。どんどん自分が変わってきていて楽しい」と話すのを聞いた。

新しい出会いで自分が変わって楽しいという高齢者との出会いは、これまで不思議に感じていたことを、何かあるのではないかという疑問に変えていった。さらに先の 70 歳の男性に問うと、できなくなることを遅延させたい気持ちは強いが、なんでもすぐに忘れる自分に学びも発達も期待なんかしていないと言い切る。この時、自分で変わっていることを実感しているのに、高齢者の学びも発達も信じ

ない高齢者がいるということを知った。少なくとも絵は上達しているのを、筆者はみているが、自分の変化を学びとも発達とも捉えないということだと思った。

高齢者自身も、超高齢社会も高齢者が学び、発達しつづけることを前提にして高齢期を過ごすことが、高齢者を心から元気にするのではないかと考えている。

70 歳の男性が言ったように、若い人との接し方や、絵画の上達は、教室で新しい出会いがあったことがきっかけだといえる。またどんどん変わっていくという変化は、その出会いを通して発達していっていると捉えることもできる。

社会老年学では、高齢者が人とのつながりが心身の健康をもたらすことが示されてきたが、学びと発達という側面からはあまり論じられてこなかった。

本論では、高齢者が人とつながることでどのように高齢期が豊かになるかについて、学びと発達の関係から明らかにすることを目的とする。

本論の構成は3部からなる。第1部では、超高齢社会における高齢者の社会とのつながり方に関して現状と課題について述べる。第1章では、現代の高齢者をとりまく環境と高齢者の変化について、また高齢者の社会とのつながり方の変化について述べる。つながり方の変化から、本論で扱う社会参加活動と就労の二つを合わせた社会活動という捉え方について論じ、現状と課題を述べる。第2章では、生涯学習の視点から先行研究をまとめ、本研究で扱う「社会活動をとおした学び」とその定義、また本研究で検討する人とのつながりがきっかけとなる学び、「つながりからの学び」について述べる。第3章では社会活動をとおした発達について、生涯発達論から本論で取り上げる発達について論じる。特に社会から期待される高齢者の発達という視点からの高齢者の発達について検討する。第4章では第2章と第3章で検討した高齢者の学びと発達に関する研究上の課題と、本研究で検討する「高齢者の社会活動をとおした発達プロセス（仮説モデル）」について述べ本研究の目的を提示する。

第2部では、第4章で設定した仮説モデルについて検証のために行った4つの研究結果を示し、研究結果を踏まえて理論モデルを提示する。

第5章では、社会活動のうち、高齢者大学、絵画教室、いきがい就労を取り上げ、「社会活動をとおした学び」の検討を行う【研究1】。第6章では、兵庫県宝塚市主催の生きがい就労事業の参加者を対象にして、量的調査と質的調査から3

カ月の就労体験が高齢者個人にもたらす変化について検討する【研究２】。次に、兵庫県宝塚市在住の 60 歳以上を対象にした社会調査から、発達につながる社会活動について、生きがい就労以外の就労を含めて、高齢者の社会活動と発達の関係を検討する【研究３】。第 7 章では、宝塚市で実施した社会調査データを使用し、仮説モデルで示した人とのつながり、「つながりからの学び」、発達の関係を明らかにする。まず学びと発達の関係を明らかにし、【研究１】で明らかになった仲間の存在が学びを促進するかについて検討する。

第３部では総合考察を行う。第 8 章で、本研究の知見をまとめ理論モデルの提案および、理論的、社会的貢献と今後の展望について述べる。

第 1 部　高齢者の社会的つながりに関する社会的、理論的背景

2023 年にＷＨＯが発表した健康寿命ランキングで、日本は 74.1 歳で世界トップである。世界一長い高齢期を元気に過ごせることは望ましいことであるが、同時にどのように長い高齢期を豊かに過ごすかということは高齢者個人の課題とされてきた。しかし、高齢者が豊かに高齢期を過ごせる社会を作るということは、超高齢社会における課題でもある。このように豊かな高齢期は、高齢者個人と社会両方の課題になっている。

豊かな高齢期のためには、社会や人とのつながりを持ち続けることが重要とされており（WHO, 2002)、社会参加や就労はその選択肢の一つになっている。しかしどのような過ごし方が豊かであるかという、豊かさの定義は定まっておらず、研究者がそれぞれに定義を行っているのが現状である。高齢者が社会とつながり、新しい人との出会うことは、高齢者に新しい刺激をもたらし、学びや発達につながると考えられる。さらにこのような学びと発達があることは、高齢期の豊かさにつながり得る。

これまで社会老年学では、高齢者の人とのつながりに関する研究は多く行われてきたが、人とのつながりがもたらす高齢者の学びや発達に関してはあまり注目されてこなかった。しかし高齢者が人とのつながりを持ち続け、学ぶことや発達することは、豊かな高齢期の過ごし方を検討する上で重要である。

第１部では、現代の社会や高齢者の人とのつながり方の変化について述べ、人とのつながりがもたらす高齢者の学びと発達について検討する。

まず第１章では、現代の高齢者の社会とのつながり方の変化から、本論で扱う社会活動である社会参加活動と就労について、現状と研究上の課題について述べる。

第２章では、生涯学習論から社会活動がもたらす高齢者の学びについて、特に人とのつながりがもたらす学びについて検討し、本論の学びの定義と課題を述べる。

第３章では、生涯発達論から高齢者の発達について整理し、研究上の課題を述べる。次に課題を踏まえて本論で扱う発達について、個人と社会にもたらす効果と

いう視点から検討する。第４章では、第１章、第２章、第３章で示した研究上の課題をまとめ、人とのつながりがもたらす学びと、学びがもたらす発達のつながりについて整理し、仮説モデルを提案する。

第 1 章　超高齢社会における高齢者の社会的つながりの現状と課題

現代は高齢化だけではなく、個人化の時代であると言われている。時代の流れや社会の変化に応じて、「個人化」も変化し、社会構造、自分と他者の捉えかたや価値観にも影響すると言われている（山田，2013)。

60 歳以上の高齢者を対象にしたアンケート調査を行った牧野（2009）は、2001 年と 2007 年で、高齢者の社会や人とのつながりに関する意識の変化を明らかにした。2001 年の高齢者は、社会や人間関係の中での役割を捉え、役にたつこと、恩返しをすることで自己の尊厳や楽しみを見出すという傾向が見られた。一方で 2007 年の調査では、活動は自分のためというような、好奇心や自己中心性の高まりという変化を捉えた。牧野は高齢者が社会や人とのつながりの中で、自己の尊厳や楽しみを求めるという点では、2001 年も 2007 年も同じであるが、その目標が社会や他者からの承認であったのが、自己の向上や積極性へと変化したことを指摘した。

本章では、超高齢社会における高齢者の社会や人とのつながりに関する現状と課題について、第 1 節で高齢者の環境について社会的なつながりにおける変化について、第 2 節では、本論で注目する高齢者の社会的なつながりをうむ活動について論じたうえで、第 3 節で活動の効果と研究上の課題について先行研究から指摘する。

第1節　高齢者の現状

2017 年、日本老年学会・日本老年医学会は現代の高齢者に合わせた新しい「高齢者の定義と区分」を発表した。その背景には現代の高齢者の身体機能低下の遅延、つまり高齢者の「若返り」がある。若返っている高齢者をとりまく環境や社会とのつながり方に変化はあるだろうか。本節では、高齢者のつながりという視点から、高齢者と高齢者の社会とのつながりに関する変化についてまとめる。

第 1 項　高齢者をとりまく環境の変化

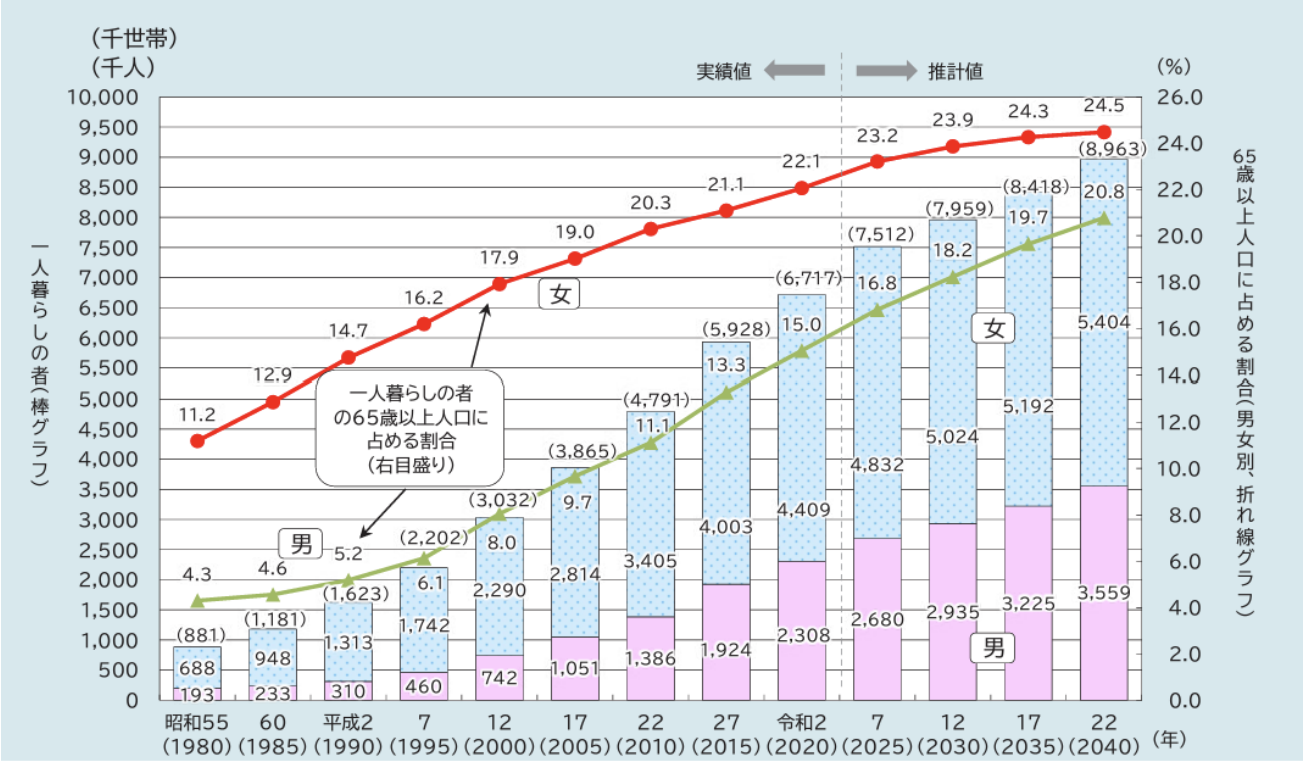
超高齢社会に突入した我が国では、長らく平均寿命と健康寿命の差、つまり「不健康な期間（佐藤，2022)」の縮小が課題であった。しかし 2010 年から 2019

年の期間の健康寿命の延びは男性で 2.26 歳、女性で 1.76 歳、同期間の平均寿命の延びは男性で 1.86 歳、女性で 1.15 歳と、男女とも健康寿命の延びが平均寿命の延びを上回った（内閣府，2022）。

また健康でいられる期間が延びただけではなく、高齢者の体力の向上も報告されている。内閣府のスポーツ庁が実施した握力や片足立ち、歩行能力等を測る「新体力テスト」の結果において、テストの合計点が 2002 年から 2022 年の 20 年で、60 歳代、70 歳代で男女ともに上昇した（スポーツ庁，2023）。

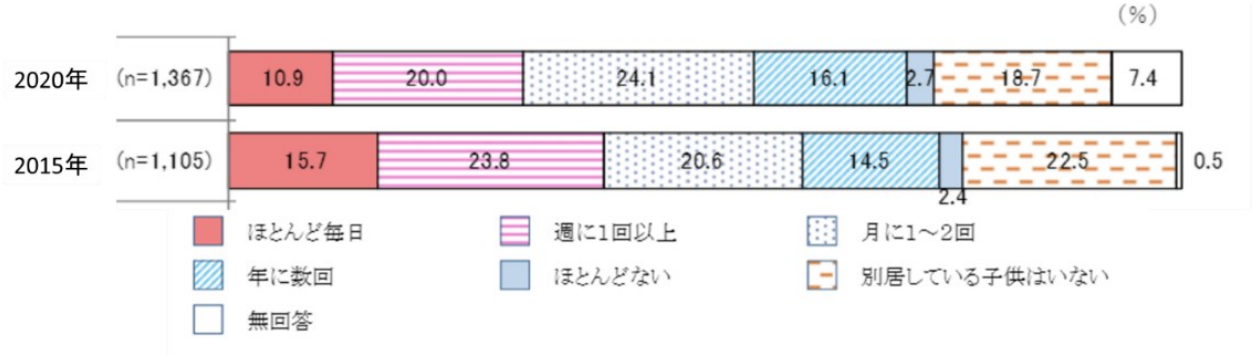
このように健康長寿で体力も向上している高齢者が増加する一方で、現代の高齢者は核家族化や家族関係の希薄化等による孤独や孤立という社会的な問題が懸念されている。

図１－１　一人暮らし高齢者率の推移（内閣府，2022）



内閣府（2022）の調査では、一人暮らし高齢者率の上昇が示されており、2000 年から 2020 年の 20 年間で、男性は８％から 15％と 7 ポイント、女性で 17.9％から 22.1％と 4.2 ポイント増加し、今後も増加することが予測されている（図１－１）。

図１－２　別居している子どもとの接触頻度（内閣府，2020 より作成）



また、離れて暮らす子どもとの接触頻度は、2015 年から 2020 年の 5 年間で、「ほとんど毎日」会う人が 15.7%から 10.9%と 4.8 ポイント、「週に 1 回以上」会う人は 23.8%から 20.0%と 3.8 ポイント減少したのに対し、「月 1～2 回」会う人が 20.5%から 24.1%と 3.6 ポイント、「年に数回」は 14.5%から 16.1%と 1.6 ポイント増加した（図１－２）。この調査結果からは、5 年間で週に 1 回以上の高い頻度の接触が減少し、月 1～2 回以下の接触頻度が低い割合が増加していることから、家族関係が希薄化している様子を物語る。

このような独居高齢者の増加や家族関係の希薄化は、孤独死や社会的な接触が乏しくサポートをほとんど得られないという社会的孤立につながる可能性があることから、特に独居高齢者の社会的つながりの機会創出を国や自治体が支援している（内閣府，2022）。しかし近年家族等と同居する高齢者においても孤独死や社会的孤立状態の人がいることが注目されるようになり、むしろ独居よりも同居における高齢者の孤立の発現率が高いことも報告されている（斎藤ら，2010）。また一人暮らしでなくても老夫婦のみの世帯における老々介護や、いわゆる「8050 問題」といわれる子世代の同居家族の引きこもり等、家族関係の問題も高齢者の社会的孤立につながり、孤独死の要因の一つになっていることが指摘されている（新井，2020）。同居者の有無にかかわらず、このような孤独死を防ぐ方法の一つとして、社会的なつながりを持つことは重要である。

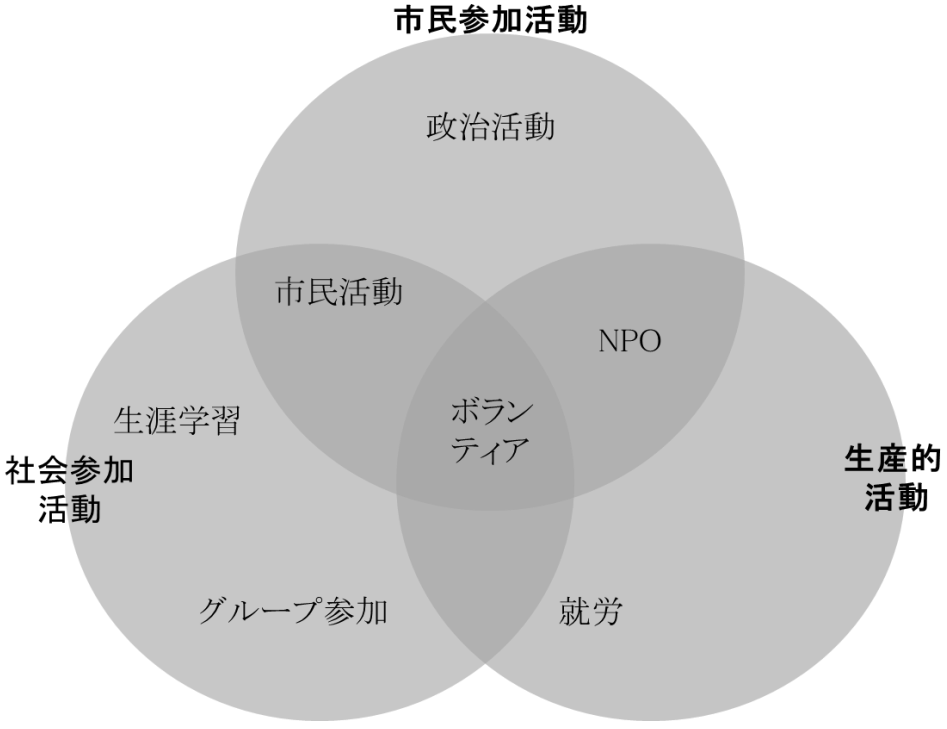
しかし孤独や孤立の状態にない高齢者にとっても社会とつながりを持ち続けることは重要である。高齢者が地域活動や仕事等を継続することは、高齢者個人の高齢期を充実させたり地域を活性化したりするなど、個人と社会の両方に対してポジティブな側面がある。つまり独居や同居、孤独か孤独でないか等に関わらず、

高齢者が高齢期にも社会とつながりを持ち続けることは、高齢者にとっても超高齢社会にとっても重要であり、今後もさらに重要性が増すと考えられる。

第２項　高齢者の社会参画

高齢者が社会とつながりを持ち続ける方法として、近年までは生涯学習や地域の老人会、あるいはボランティア活動といった地域における社会参加活動が選択肢の主であった。しかし近年は、高齢者の年金受給年齢の引き上げや定年制度の廃止等から、65 歳を過ぎても同じ職場で就業を継続する高齢者や起業する高齢者が増えている（中小企業庁，2014)。自治体が主催する高齢者大学などの生涯学習施設や老人クラブ、地域活動、また民間が主催する高齢者を対象にしたイベント等、高齢者の社会とのつながり方の選択肢も多様に提供されるようになってきている。

図１－３　社会参加とその類似概念（片桐，2017）



片桐（2017）は、このような現代の高齢者の社会とのつながり方の変化を捉え「社会参画」という視点から、社会参加とその類似概念について３つの活動に分

類した（図１－３）。１つはこれまで主な選択肢であった趣味や学習等のグループ活動への参加である社会参加活動、2 つ目は就労等の生産的活動、これは「有償か無償かに関わらず社会に役立つ財を作り出す」活動である。３つ目は政治参加等の「市民が果たすべき活動」である市民参加活動である。これら３つの分類は、これまで老年学においてそれぞれ個別に検討されてきた。しかしこれら３つの分類を個別に扱うことは難しいことも片桐は指摘している。例えばボランティア活動は「社会に役立つ財やサービスを作り出す活動」である生産的活動であり、同時に地域のグループ活動である社会参加活動である。さらに地域の課題解決にむけた活動内容であれば「市民が果たすべき活動」である市民参加活動でもある。つまりボランティア活動というのは、３つの活動すべてに分類される活動だといえる。

また活動の分類における重複だけではなく、高齢者個人が複数の分類の活動を同時に行う場合も考えられる。例えば仕事をしながら趣味の活動に参加する場合、一人の人が生産的活動と社会参加活動の両方を同時に行うことになる。このように現代は、高齢者の活動範囲や種類等の選択肢が広がっており、これまでのように活動領域を個別に扱うのではなく、高齢者が社会とつながるための選択肢の一つとしてまとめて扱うという視点も必要になってきている。

市民参加活動

片桐（2017）の社会参画において、「市民がはたすべき活動」である市民活動の範囲ではこれまで社会老年学では特にボランティア活動が多く取り上げられてきた。内閣府の調査においてもボランティア活動は趣味の活動等と同じ地域のグループ活動の一つとして扱われることも多く、「市民がはたすべき活動」という大きな社会的役割というより、高齢者の経験や知識、体力等を社会貢献に生かすという捉え方からの方が多い。ボランティア活動以外では、選挙の投票なども含まれる領域である。

社会参加活動

ボランティア活動を含めて捉えた社会参加活動は、これまで老年学の分野において注目されてきた。社会参加活動は地域における世代間交流の機会につながる

ことが期待できることから、地域における多世代の相互扶助を育み、高齢者の多様なつながり形成の促進も期待できる等（内閣府，2022)、高齢化が進む日本において重要な活動である。

特に社会参加活動の一つである学習活動は、心の豊かさや余暇時間の充実等だけではなく、IT 化やデジタル化等の急速な現代社会の変化への対応や、就業に向けた知識や技術習得の機会として国や自治体も支援の対象としている。また高齢者の就業等に向けた知識や技術の習得のための学習活動だけではなく、楽しみを目的とした絵画や音楽等、趣味の範囲における学習活動についても、国や自治体が機会創出を推進している（内閣府，2022)。趣味の学習活動は、長らく居住地域を離れて就業してきた高齢者にとって、定年退職後の地域活動への参加のきっかけとしてより身近であり、学習活動への参加からさらに地域のボランティア活動への参加につながることが指摘されている（片桐，2012)。近年、高齢者の学習活動は、まちづくりや地域における人材育成という視点からも期待が高まっている（文部科学省，2012)。

このようにボランティアや生涯学習等、高齢者の社会参加活動は社会的意義が高まっており、地域を担う人材育成と輩出の場としても期待されている（内閣府，2023)。

生産的活動

超高齢社会において生産的活動も社会からの期待が高まってきている。「社会に役立つ財やサービスを作り出す活動」である生産的活動は、少子高齢化の現代において特に注目されている活動である。中でも就労は、年金受給年齢の引き上げ等を背景に、社会とのつながりのためだけではなく経済的目的のために選択する高齢者が増加している。

少子化による生産年齢人口の減少から、人材不足は問題視されており、今後も深刻化が懸念されているが、高齢者就労はこのような人材不足解消の一助として期待されている（内閣府，2022)。

高齢者就労は高齢者がつながりや役割を持ち続けることや、長い高齢期の経済不安の解消につながるというだけではなく、社会における人材不足解消にもつながる。つまり高齢者の社会的つながりにおける選択肢の一つとして、高齢者就労

は高齢者個人にとっても超高齢社会にとっても重要であり、今後も重要性は増すと考えられる。

第２節　つながりをもたらす高齢者の社会活動

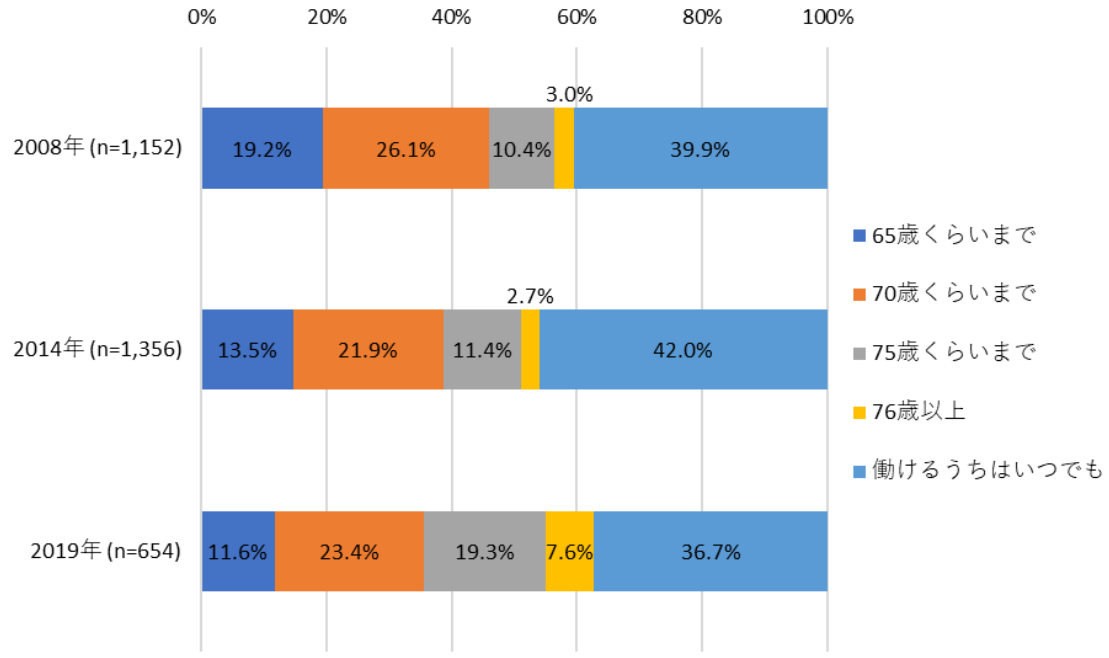
本論では、高齢者が人とのつながりを広げる高齢期の選択肢として、高齢者の参加に期待がかかる社会参加活動と就労を取り上げる。社会参加活動と就労は、社会老年学ではこれまで個別で扱われることが多かった。しかし 60 歳代も働き続ける高齢者が増加している現在、就労しながら趣味活動をするというようなケースは少なくない。本論では、社会参加活動と就労を高齢期に行う活動として、まとめて社会活動と呼ぶこととする。

本節では、高齢者の社会活動の現状について説明する

第１項　高齢者就労の現状

高齢者の就労意欲の変化を見てみよう。現代の高齢者の就労意欲は高まっている。2019 年現在、就労している人のうち「働けるうちはいつまでも」働きたいという人が 36.7%、「75 歳くらいまで」働きたい人を加えると約 6 割が就労意欲を持っていることになる（内閣府，2022）。

図１－４　有職高齢者の就労意欲（内閣府，2011；2017；2022 より作成）

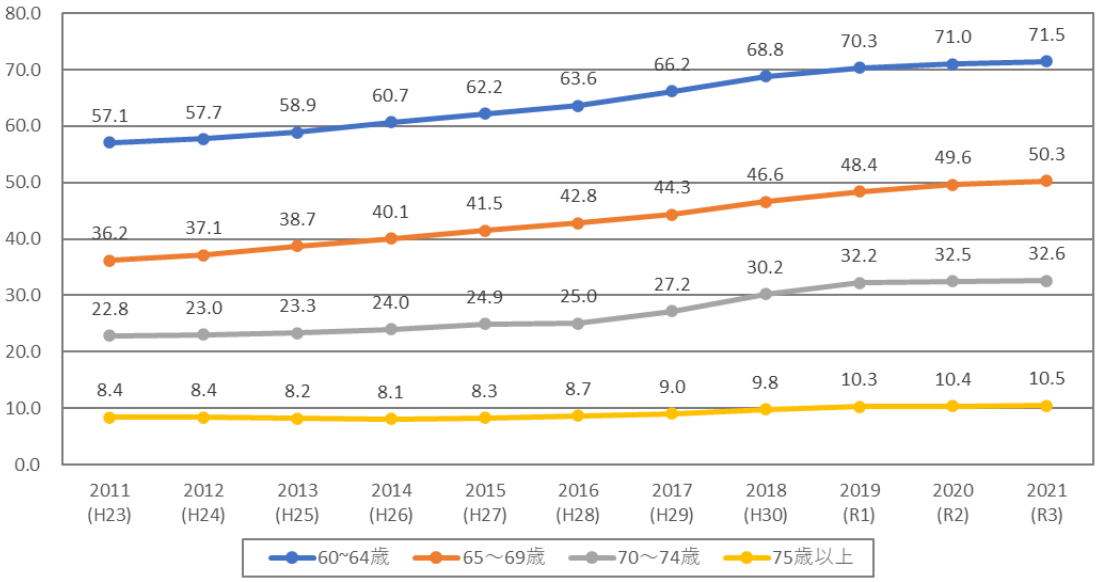


2008 年から 2019 年で、「65 歳くらいまで」働きたい人の割合が 19.2%から 11.6%と 7.6 ポイント減ったが、これは、65 歳までの継続雇用制度によって実際に 65 歳まで働いている人が増えていることが影響していると考えられる。継続雇用制度以降で、70 歳以降も引き続き働きたい人の割合は 39.5%から 50.3%へ、10.8 ポイント増加しており、就労を希望する年齢が上がっていることがうかがえる（図１－４）。

就業率の増加

ではこのような高齢者の就労意欲を反映して、実際の就労も増加しているのだろうか。就業率の推移をみると、2016 年から 2021 年の 5 年間で高齢者全体で、60 歳から 64 歳で 63.6%から 71.5%と 7.9 ポイント、65 歳から 69 歳は 42.8%から 50.3%と 7.5 ポイント、70 歳から 74 歳は 25.0%から 32.6%で 7.6 ポイント、75 歳以上では 8.7%から 10.5%と 1.8 ポイント上昇した（図１－５）。就業

図１－５　就業率の推移（内閣府，2022 より作成）



率は 5 年間ですべての年代で上昇したことがわかる（内閣府，2021a）。

男女別で見ると、60 歳から 64 歳で男性は 76.8%から 82.7%と 5.9 ポイント、女性は 50.8%から 60.6%と 9.8 ポイント、65 歳から 69 歳で男性が 53.0%から 60.4%と 7.4 ポイント、女性が 33.3%から 40.9%と 7.6 ポイント上昇した。男女とも 60 歳代では 6 割の人が就労しており、特に女性の就労が進んだことがわかる。70 歳以上では男性は 19.9%から 25.6%で 5.7 ポイント、女性は

9.2%から12.6%で3.4ポイントと60歳代とは違い70歳以上では、他の年代に比べて就業率は下がるが70歳以上の階層でも就労は進んだことが分かる。(総務省，2021)

生きがい就労

高齢者の就労には生計維持を目的とした働き方の他に，生きがい就労という働き方がある。生きがい就労とは，生計維持というより，「ゆとりや心の豊かさを目的」とした，小遣い程度の有償活動を意味する（瀬沼，2014)。これは，「無理せず働きたい」という高齢者の就労ニーズに対応する，経済活動と非経済活動との間にある働き方だと言える（瀬沼，2014；山口ら，2014)。

生きがい就労は、これまでシルバー人材センターを中心に広がってきたが、近年は自治体や公益法人等も生きがい就労の機会創出のための事業を行うようになった。

現在人材不足が続く分野のトップ３に入っている介護分野では（日本商工会議所，2018)、人材不足の解消に就業意欲の高い高齢者の活用可能性が期待されている。その理由として、介護分野は施設利用者との年齢が近いことによる利点があることや，専業主婦層もこれまでの経験をいかせる生活介助等の仕事が多いことを挙げている（経済産業省，2018)。

生きがい就労は、政府の分類では社会参加活動に含まれており、経済活動中心の就労とは別に扱われている。しかし生きがい就労であっても経済目的として働いている人もいる（焦，2018）等、働く高齢者にとっては、生きがい就労か就労かではなく、どちらも就労という選択肢の一つである。よって、本論では、生きがい就労は社会参加活動ではなく就労の一つとして扱うこととする。

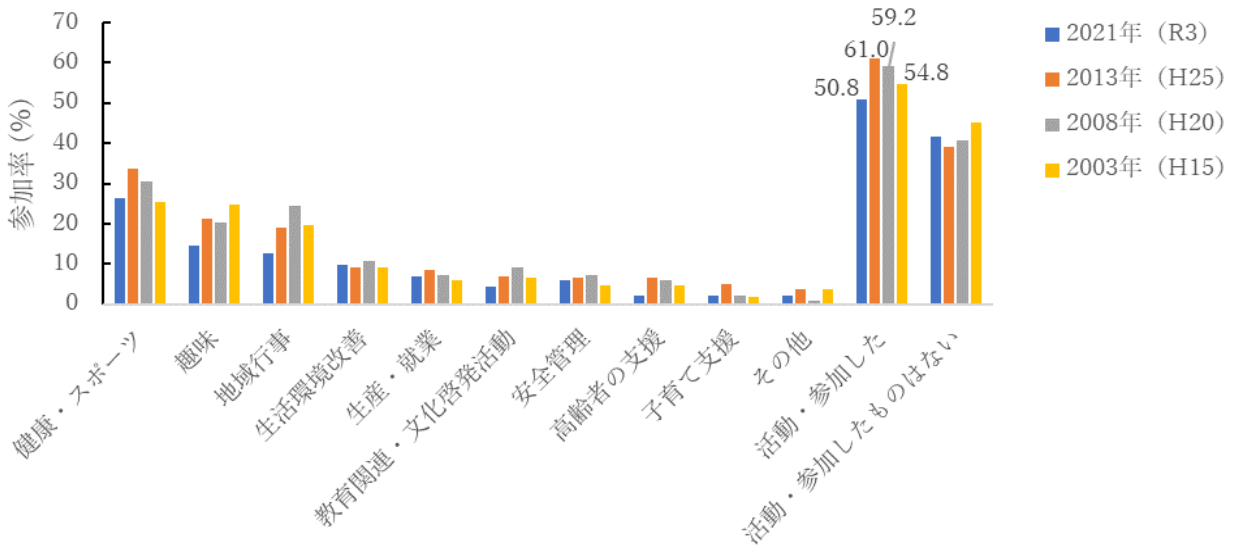
第２項　社会参加活動の現状

社会参加活動については、内閣府の調査では2013年まで参加率は上昇傾向にあり、その後2021年の調査では低下している（図１－６)。2013年から2021年の社会参加活動参加率の低下について、この期間の就業率の延び幅は大きくなっている（図１－５)。2013年から2021年の間の社会参加活動に関するデータがないため明らかにすることはできないが、社会参加活動から就労へと移行した可能性が考

えられる。

また図１―６のグラフにある「生産・就業」は、2013 年より 2022 年の参加率の方が少ないが、この「生産・就業」とは、前述した生きがい就労をさしている。このことから高齢者の就業率は上がっているが生きがい就労への参加は減少したことが分かる。これは 65 歳までの継続雇用などで就業する高齢者が増えたことが影響していることが考えられる。

図　１－６　高齢者のグループ活動への参加状況（内閣府，2013，2021 より筆者作成）



社会参加活動で参加率が高いのは、健康維持のための活動やスポーツ、次いで趣味の活動である。2021 年に参加率が低下したとはいえ、高齢者の半数がなんらかの社会参加活動へ参加している（内閣府，2013；内閣府，2021b）。

第３節　高齢者の社会活動の効果と課題

就労と社会参加活動への参加率の高さからもわかるように、現代の高齢者は活発に何らかの活動へ参加している人が多い。高齢者が積極的に社会活動を行うことはどのような効果をもたらすのだろうか。本節では、高齢者の社会活動の効果について先行研究の知見から論じる。

第１項　先行研究における社会活動の効果

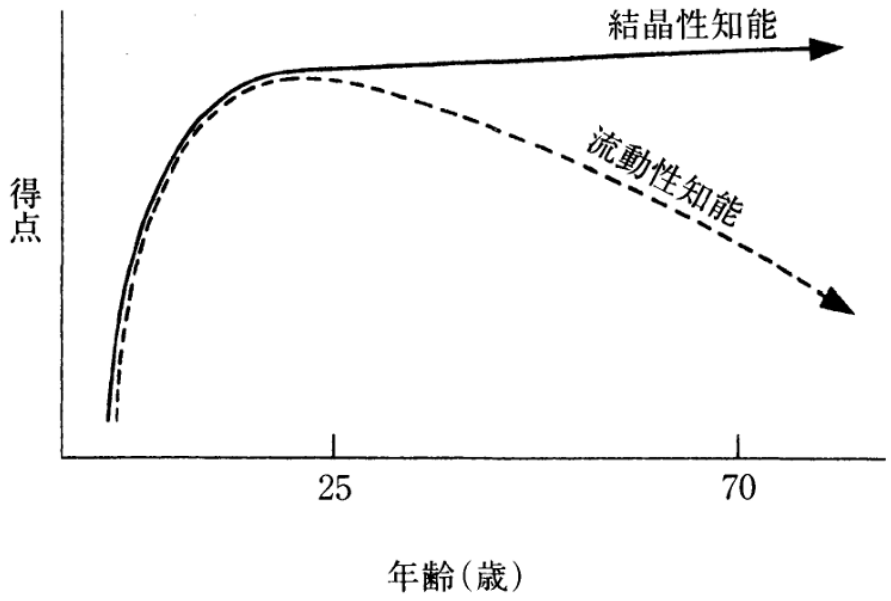
これまで社会参加活動の効果については健康維持向上のほかに、孤独感の減少や自尊心の向上、人間関係の広がりが報告されている（片桐，2012)。また生きがい就労参加者を対象にした辻（2016）の研究では，生活の充実、友人関係の広がりという効果を実感したことが示された。

就労については、非就労の高齢者より就労している高齢者の累積生存率が高く、疾病がある高齢者でも就労によって、身体機能の低下や疾病による生存率の低下の抑制に影響する可能性が示される等（高ら，2008)、心身の健康と生活における充実、友人の増加等に効果があることが報告されている。

このようにこれまでの社会活動の効果の検討では、心身の健康や生活の充実等、主に高齢者個人への効果に視点がおかれたものが多かった。しかし社会参加活動に関する研究において片桐（2012）は、高齢者個人だけではなく社会に対する効果にも着目する必要を指摘し、「社会的効益性」として論じた。消費活動や健康になることによる医療費の削減という経済的な効果と、社会貢献活動では行政や他のグループ、組織へのリソースの提供という効果をもたらすことを示した。さらに社会貢献活動は、他の趣味等のグループ活動への参加より社会にもたらす効果が高いことを示した。片桐の研究を除き、社会老年学では社会にもたらす効果に注目し、実証的に検討した研究はまだ少ないが、社会活動の効果としては重要な視点である。

また、これらの研究は高齢者を対象にした研究であるが、若い世代について大浦（1996）は教育学の立場から、活動への参加がもたらすものとして、学びと発達を指摘している。しかし若い世代を対象にした指摘であり、高齢者に関しても学びや発達があるのかということは言及していない。

図　１－７　バルテスの結晶性/流動性能力の加齢パターン（井上，2002）



しかしBaltes（1980）によると、高齢期に伸びる能力があることが分かっており、計算力や暗記力、思考力や集中力などの流動性知能は、18歳から25歳をピークとして以降は低下するものの、洞察力や理解力、批判力や想像力といった結晶性知能は、70歳以上でも伸び続けることが明らかにされている（図１－７）。年をとっても若いころに身に着けた能力を維持発達させている専門職の高齢者もいる。たとえば、日本の有力な国会議員の多くは高齢者である。また、科学や芸術の仕事に必要な創造性（creativity）も高齢期にも伸び続ける能力とされており（Lindauer, 2003)、美術鑑賞に必要な美的感受能力も加齢とともに向上するとされている（Perssons, 1987)。

生涯発達論では、できなかったことができるようになるというような能力の発達だけではなく、心理面の発達から高齢期を含めて生涯にわたり発達し続けるという捉え方が近年注目を集めている（岡本，1997)。つまり、高齢期にも若い世代と同様に、教育的アプローチがない社会活動をとおして、経験からの学びがあり発達する可能性が示唆される。

社会老年学の視点からも学びや発達という視点は、高齢者が社会的なつながりをもち続けることの意義の拡大につながると考えられる。

第２項　社会活動における人とのつながりがもたらすもの

牧野（2009）は、生涯学習へ参加する高齢者が、活動をとおした人とつながりを求めていることを明らかにしており、内閣府（2022）の調査では、高齢者が社会活動を行ってよかったことで、「友人ができたこと」を挙げた人が、「生活の充実」の次に多かったという結果を報告している。これらのことから、高齢者が社会活動をとおして人とつながることは、高齢者の満足につながるといえる。

これまで社会老年学では、高齢者のつながりについては高齢者の社会関係に着目して検討されてきた（古谷野ら，2016）が、藤原ら（2005）は、高齢者の活動をとおして得た社会関係がもたらす効果についても、検討が必要であることを指摘している。例えば片桐（2012）は、社会貢献活動への参加は高齢者にとってハードルが高いことを明らかにし、参加へのハードルが低い趣味の活動をとおして得た友人等、人とのつながりが社会貢献活動への参加のハードルを下げる効果につながる可能性について指摘した。

他に生涯学習の分野では、人とのつながりがもたらす学びが注目されており、地域住民が集まるコミュニティスペースやワークショップ等の実践研究も行われている（森，2017；上田・中原，2013）。人とのつながりの効果として生じる学びとして、活発なコミュニケーションが重要な学びの要素になることが指摘されている（上田・中原，2013）。

生涯発達からの視点では、人格の発達において人とのつながりが重要とされている。発達において人とのつながりは、親密性、関与度等、つながり方が重要な視点だとされている（岡本，1997）。

生涯学習や発達という視点からは、人とのつながりは重要なトピックであるが、社会老年学ではコンボイモデルのように高齢者を取り巻き守る社会関係という視点の研究がほとんどで、学びや発達に関する研究はほとんどされていない。

第３項　社会活動に関する研究の課題

本節第１項、第２項でみてきた先行研究から、高齢者の社会活動に関する研究の課題が二つ見いだされた。一つ目は社会にもたらす効果という視点の不足、もう一つは人とのつながりがもたらすものに関する検討の不足である。

一つ目の社会にもたらす効果について、これまでの社会活動の効果に関する研究は、心身の健康や生活の充実、生きがい等、高齢者個人というマイクロな視点における効果が中心であり、社会へもたらす効果というマクロな視点からの検討は多くない。人材不足や地域の担い手としての役割を求められる高齢者という観点からは、個人の効果だけではなく社会にもたらす効果という視点は重要である。これまで片桐（2012）が、社会参加活動に関して社会へもたらす効果を検討したが、社会参加活動のみを対象にしたものであり、就労に関して指摘はしているものの、実証的な検討はおこなっていない。社会にもたらす効果については、就労に関する検討も必要である。

二つ目の人とのつながりがもたらすものについては、生涯学習論や生涯発達論からは人とつながりがもたらす学びや発達が指摘されている。しかし、抽象的な理論や指摘が中心であり、高齢者の社会活動をとおした学びや発達を実証的に検討した研究は多くはない。また社会老年学からは、学びや発達の検討はされていない。

第１章の冒頭で触れた牧野（2009）の研究が捉えたように、現代の高齢者が自己の向上を目標として活動へ参加するのであれば、心身の健康や生活の充実、生きがいだけではなく、活動をとおして学びや発達が促進されるかという点についても検討する必要がある。高齢者の学びや発達が社会活動に参加することで促進されるのであれば、高齢者の社会活動の意義の拡大につながることが考えられる。

第２章　社会活動がもたらす高齢者の学び

第１章では現代の高齢者をとりまく環境の変化と高齢期の過ごし方の選択肢としての社会活動の現状と研究上の課題について指摘した。高齢者の社会活動の効果の１つである人とのつながりの効果として学びと発達が先行研究から示唆された。本論ではこれら学びと発達を、社会活動をとおして人とのつながりがもたらすものとして捉え、社会老年学の立場から考察する。

本章ではまず、学びについて先行研究から人とのつながりとの観点から検討する。第１節で学びの分類について、生涯学習論の視点から、社会活動に関連する学びについて検討する。第２節では、高齢者が活動に参加することによってもたらされる学びについて先行研究をまとめる。第３節で、本論における学びの定義について述べ、研究上の課題について指摘する。

第１節　学びの分類

これまで高齢者の学びは、生涯学習の分野において検討された研究が多い。生涯学習における学びの概念は広く、対象も乳児から成人までと幅広い。しかし学びについては幼児から壮年期までの検討が多く、高齢者のみを対象とした研究は少なくなる。研究は多くはないが、生涯学習の分野では高齢者の学びをどのように捉えられてきたのだろうか。本節ではこれまで検討されてきた学びの分類から、高齢者の社会活動に関連する学びについて検討する。

第１項　学びの場による分類

生涯学習における学びには、定まった分類というのは特にないが、岡本（2004）が海外で紹介された学びの分類から以下のようにまとめている。

１．　フォーマル・エデュケーション：大学などの公教育における学び
２．　ノン・フォーマル・エデュケーション：生涯学習施設やカルチャースクール等の民間における学び
３．　インフォーマル・エデュケーション：学習サークルやオン・

ザ・ジョブトレーニング等における学び

４．　インシデンタル・ラーニング：第三者の助けを借りずに行う学び

① 学習する意思をもって本などを用いて自ら学ぶ自己学習活動

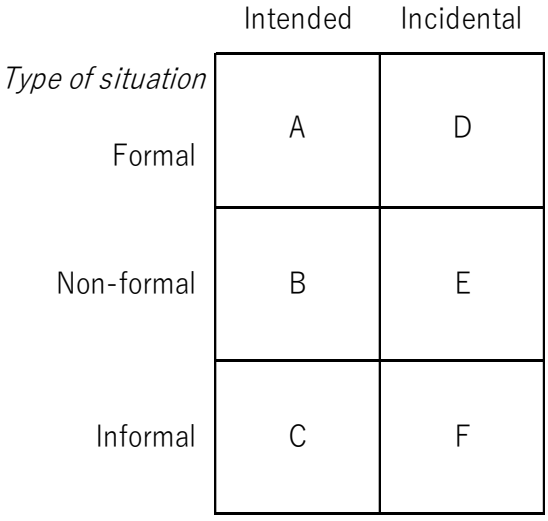
② 学習する意思がなく学ぶ偶発的学び

岡本（2004）の分類をまとめると、１．から３．は「教える人」がいる状況において、何かを習得することを目的とした学びであるが、４．は「教える人」が存在しない状況における学びである。この分類は、学びが生じる状況を基準とした分類といえる。

第２項　学びの態度による分類

学びの分類においては、他に Jarvis(2010)の分類がある。Jarvis は、岡本の分類にある学びが生じる状況と、学びに対する態度という軸から分類を行った（図２－１）。

図 2－1　Possible learning situation（Jarvis, 2010,　p.42）



学びへの態度とは、Intended（意図的）と Incidental（偶発的）の２種に分類される。Intended は、例えば学校や職場などで講義を聞いたりセミナーに参加したりするような、学びを得ようという態度、つまり意図した状況で生じる学び

である。逆にIncidentalは、学びを得ようと特に思っていない状況において偶発的に生じる学びである。また、学びが生じる状況については、岡本（2004）の分類は４種類であったのに対して、Jarvis は３種類で分類した。Jarvis の３種類とは、Formal、Non-formal、Informal である。Jarvis の分類の Formal と Informalは、岡本（2004）の１．フォーマル・エデュケーションと２．ノン・フォーマル・エデュケーションと同じであるが、Jarvis の Informal は、岡本の分類にある３．インフォーマル・エデュケーションと４．インシデンタル・ラーニングを合わせたものと解釈できる。 Jarvis は、Formal、Non-formal、Informal の３種類それぞれおいて、Intended と Incidental の２種が存在するとした分類である。

岡本の４．インシデンタル・ラーニングには、①学習する意思をもって本などを用いて自ら学ぶ自己学習活動と②「偶発的な学び」の２種類あるが、Jarvis の Incidental は、岡本の②「偶発的な学び」と同じ概念だと解釈できる。さらにJarvisは、Formal や Non-Formal、Informal の学びが生じるすべての状況においてIncidentalがあるとしている。

第３項　高齢者の学び：「社会活動をとおした学び」

Jarvis（1955）によれば、学びとは経験が知識や態度、価値などへ変換される変化のプロセスであり、学びが生じるにはこれまでの経験であたりまえだと思っていたことが、新しい経験ではあたりまえではなくなったことがきっかけになるという。つまり、新しい経験に出会い、これまでの経験が土台になることで学びが生じる。逆に土台となる経験が多ければ、学びが生じるきっかけも多いということになる。人生経験が長い高齢者は、学びの土台となる経験が多く、経験を通した学びについては若い人より学びの効果が高い可能性があり、高齢者の強みがいかせる学びであるといえる。Moody（1986）は、高齢者は情報を得るような学びよりも、むしろこれまでの経験が強みとなる経験をとおして得られる学び、つまり Incidental Learning の推進が必要であることを指摘している。

しかしこれまで高齢者の学びについては、特に学習活動への参加等による Intended Learning に関する検討が中心に行われてきた。Incidental Learningについては、学校などの Forma や仕事などでの Informal な場における

若い世代を対象とした研究が多く、高齢者を対象とした Incidental Learning に焦点をあてた検討はまだ多くない。

特に高齢者の社会活動における学びという視点においては、ボランティアや就労等は、意図して学ぶよりも活動や仕事の経験をとおして学ぶことの方が多いと考えられる。つまり Incidental Learning が学びの中心になると考えられる。また Jarvis の分類にあるように、学習活動に参加することで、たとえ Intended Learning であっても、同時に Incidental Learning も生じることが考えられる。例えば、語学講座を受講して、目的である語学の習得だけではなく、国の習慣や考え方の違いを学ぶこともあるだろう。このように高齢者の社会活動によって生じる学びについては、Incidental Learning の検討が重要である。

本論では、高齢者の社会活動をとおした Incidental Learning に注目し、社会活動をとおした Incidental Learning を「社会活動をとおした学び」と呼ぶこととする。

第２節　高齢者の「つながりからの学び」

「社会活動をとおした学び」には、どのような学びがあるだろうか。「社会活動における学び」について、高齢者を対象とした研究は多くはないが、Chen（2016）が高齢者のボランティア活動について検討している。

第１項　高齢者の活動がもたらすもの

Chen（2016）は、60 歳以上のボランティア活動へ参加する高齢者を対象に、以下の５つの学びの側面を見出した（図２－２）。

図２－２　The five dimensions of learning through volunteering interactively benefit the individual's self-defined successful aging. (Chen, 2016)



（１）これまでの人生の目的の代わりとなる目的の確立や生活の拡充

（２）人間関係の構築や改善

（３）ポジティブな変化と自己評価の促進

（４）心身の健康の促進

（５）人生における大切なものの発見や残された人生への準備の動機付け

さらに図３－２で示されているように、Chen はこれら５つの学びの側面における学びの循環を想定している。Chen の説明によれば、ボランティア活動において活動の目標を達成できた経験を得た人は、「（１）これまでの人生の目的の代わりになる目的の確立や生活の拡充」につながり、目標に向けて活動を継続すると人との関係も深まり、「（２）人間関係の構築や改善」につながる。「（１）これまでの人生の目的の代わりになる目的の確立や生活の拡充」と「（２）人間関係の構築」

は、活動をとおして得られる学びに影響し、その学びはさらに「（３）ポジティブな変化と自己評価の促進」につながる。「（３）ポジティブな変化と自己評価の促進」が得られるとそれが新たな学びをもたらし、「（４）心身の健康の促進」につながる。「（４）心身の健康の促進」が得られると、また新たに「（１）これまでの人生の目的の代わりになる目的の確立や生活の拡充」を得る。このように、一つの側面が得られることによって学びが生じ、その学びがさらに別の側面を促進する。さらに、促進された側面が新たな学びに影響する。このように、５つの側面が学びに影響し、学びが５つの側面に影響する。つまり学びを介した循環と捉えられる。（１）から（４）は必ずしも順番に進むわけではなく、学びを介して（１）から（３）へ、または（２）から（４）へと影響し合う。これは、活動を継続することによって、学び続け、学びによって個人が変化し続けるという可能性を示している。Chen の研究からは、「社会活動をとおした学び」における活動継続による効果が示唆されており、学びの検討において重要な視点といえよう。

しかし、Chen が見出した５つの学びの側面は、学びが生じた際に得られる個人の変化を捉えたものである。例えば「（２）人間関係の構築や改善」という学びの側面は、ボランティアをとおして学びが生じたことによる人間関係に関する態度や行動の変化を捉えたものだと解釈できる。前節第３項で述べたように、Jarvis の学びの定義では、経験が価値観や態度へ変化するプロセスであるとしているが、この定義において Chen が見出した５つの側面は、経験による学びのプロセスの最終段階にある態度の変化を捉えたものである。しかし Jarvis は、これまであたりまえであったことが、そうでなくなった時に学びが生じるとも指摘しているが、Chen の研究では、「あたりまえでなくなった」時に生じたものが何かについては検討していない。

これまでの成人学習に関する研究は、職場での研修や生涯学習施設等の実践という教育の枠組みからの検討が多く、何を学ぶか（What）、どのように学ぶか（How）、なぜ学ぶか（Why）ということが検討されることが多かった（Cranton, 1992/1999；Gillian, 2010；ノールズ, 2002）。「何を学ぶか」は、歴史やコンピュータ、仕事の知識等の科目としての学習内容のことである。「どのように学ぶか」は、１つは独学や学習施設等の学習環境について、もう１つは学びのプロセスという２つの視点を意味している。学びのプロセスにはいくつか理論があるが、

例えば経験による省察をとおして概念の形成をする（Kolb，2014）というように、人が経験からの情報をどのように内的に処理しているかを検討したものである。３つ目の「なぜ学ぶか」ということは、例えば健康のためや、生活リズム等、学習活動への参加動機である。

教育という視点からは、「何を」、「どのように」、「なぜ学ぶか」を知ることは、教授や指導、学習支援の観点から重要である。また「なぜ学ぶか」、「何を学ぶか」ということは学習者のニーズとしてカリキュラムやプログラムを検討する際に有益な情報になる。つまり、これまでの高齢者の学びの研究は、高齢者を学習者として客観的に捉えて検討したものであった。しかし、社会活動へ参加する高齢者は、多くの場合学習者というより活動者である。「社会活動をとおした学び」については、活動者としての高齢者の学びの検討も必要である。

活動経験がもたらす学びに関する検討は、看護の分野における実習経験において看護学生を対象にした検討が国内では多い（堀越ら，2009；三森，2019；清水2012）。これらの研究における学びの内容は多岐にわたるが、主に看護する対象に関する知識や情報、病院等の施設に関する情報、チームワークやグループワークなど、自分と他者との関係性に関する新たな価値観等である。

Chenの研究が示した「（２）人間関係の構築や改善」は、看護分野の研究における自分と他者との関係性に関する新たな価値観という学びによってもたらされたものと解釈できる。しかしChenは「Learning through volunteering（図２－２）」と学びをひとくくりに捉えており、「Learning」の具体的な意味内容については明らかにしていない。

高齢者の「社会活動をとおした学び」は、これまであまり検討されてこなかったが、高齢者についても活動をとおしてどのような学びが得られたかを検討することは、高齢期の学びに関する理解を広げることにつながり、さらに高齢者の社会活動の意義の拡大につながると考えられる。

第２項　人とのつながりがもたらす学び

田中（2011）は、ボランティア活動における活動をとおして出会った人との関係から、つながりの大切さという学びがあったことをインタビュー調査から確認している。高齢者が活動をとおして人とつながりをもつことは、学びをもたらす

可能性を示唆している。さらに Chen は、５つの学びの側面のうち、「（２）人間関係の構築や改善」、「（４）心身の健康の促進」、「（５）人生における大切なものの発見や残された人生への準備の動機付け」については、人とのコミュニケーションがきっかけとなっていたことも見出した。つまり Chen の調査対象者は、人とのコミュニケーションをとおして得た学びによって、人間関係を良くし、より健康になり、人生の充足を得ていたことが示唆される。

学びをもたらすコミュニケーションについては、対面のコミュニケーションを行うことは高齢者の生きがいを高める（橋本ら，2021）ことが指摘されているが、中程度以上認知症高齢者を対象にした研究においても、コミュニケーションが記憶や思考等、認知機能を活発にすることも明らかにされた（鈴木ら，2021）。鈴木らの研究は、認知症高齢者を対象にした研究ではあるが、コミュニケーションが脳を活性化するのであれば、健常の高齢者についてもコミュニケーションの機会を多くもつことによって、認知機能の低下を遅延させる可能性があると考えられる。

このように、コミュニケーションは高齢者の学びを促進する可能性があるが、それにとどまらず、認知機能そのものも活性化させる可能性もある。このことから活動がもたらす人とのつながりとコミュニケーションが高齢者の学びを高めるかという点についても検討する必要が浮かび上がる。

また前項で取り上げた看護学生を対象とした研究では、実習におけるコミュニケーションや観察、また実際に仕事を担うという仕事の経験が学びのきっかけになっていたことが指摘されている（清水，2012）。この指摘からは、人とのつながりはコミュニケーションを持つ関係、また人を観察すること、そして仕事を行うという行動による経験も学びをもたらす可能性があることを示唆している。

第３項　本論における学びの定義

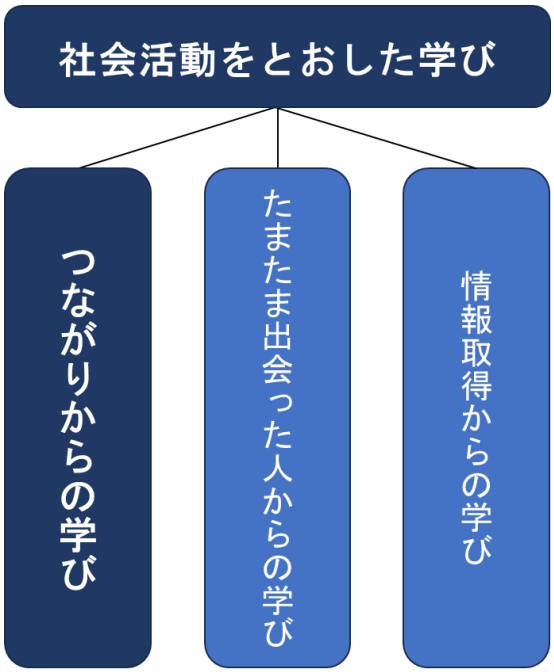
Jarvis（1992）は、学びのきっかけになる経験について、「１．行動による直接的な経験」と、「２．人とのコミュニケーションによる経験」の２種類から捉えている。

Jarvis の「経験」の分類は成人全体を対象にしたものであり、高齢者のみを対象にしたものではない。高齢者は成人であるが、高齢者の学びについては成人学

習の理論にあてはまらないという議論もある（Lebel, 1978）。このため、経験についても高齢者のみを対象として検討する必要がある。しかし、これまで高齢者の社会活動の経験から高齢者の学びを分類した研究は少ない。

本論では、高齢者の「社会活動をとおした学び」について、学びをもたらす経験の種類から分類を行うこととする（図２－３）。

図　２－３　「社会活動をとおした学び」の概念



それは「つながりからの学び」、「たまたま出会った人からの学び」、「情報取得からの学び」の３種類である。Jarvis の分類は、「１．行動による直接的な経験」と、「２．人とのコミュニケーションによる経験」の２種類であったが、清水（2019）のまとめた学びには、コミュニケーション、観察、仕事の経験からの学びの３つの経験が捉えられた。これらを Jarvis の２種類にあてはめると、コミュニケーションは「２．人とのコミュニケーションによる経験」であり、観察と仕事の経験は「１．行動による直接的な経験」としてまとめられる。しかし、看護学生が実習において観察する場面を考えてみると、看護対象である人に注目して観察する場合と、仕事の手順や情報に注目して仕事を覚えるために観察する場合との２種類あることが考えられる。観察において人に注目する場合には、コミュニケーションはないが、人との出会いによる学びである。一方仕事を覚えるため

に観察する場合は、仕事をしている人を見ることはあるが、学びの中心は仕事に関する情報である。仕事の経験というのも実地訓練による情報の取得による学びである。このような観察という経験は、高齢者の社会活動においても生じることが考えられる。したがって「社会活動をとおした学び」における観察については、人がきっかけになる学びと情報を得ることによる学びは別に分類する必要がある。よって、本論では、人がきっかけとなる学びを、コミュニケーションがある場合とない場合の２つの種類に分け、人を対象としない情報取得による学びについて観察と直接的な経験をまとめて１つの分類にした。３種類の学びについて、以下で説明する。

「つながりからの学び」と「たまたま出会った人からの学び」は、どちらも人がきっかけとして生じる学びである。「つながりからの学び」とは、挨拶したりコミュニケーションしたり等、インタラクションがある関係がきっかけとなって生じる学びである。例えば、同じチームで大変な仕事等に取組み、共に苦しみを分かち合いながら互いに助け合い励まし合っているうちに、仲間というものがどういうものだったかに改めて気づき、仲間の尊さを学ぶというようなことがあるだろう。あるいは、退職後自分より若い人から指示を受けるという人間関係や、年齢は違うが上下関係のない仲間との関係等から、コミュニケーションをとることで徐々に接し方や、関係性を保つための暗黙のルール等を会話から手探りで学ぶということもあるだろう。このように、これまで知っていたと思っていた友人の大切さの再確認や、新しい人間関係の中で学ぶ暗黙のルールなどは、インタラクションがある関係がもたらす学びである。

「たまたま出会った人からの学び」とは、インタラクションがない関係における人からの学びである。例えば、老人ホームの見学に行った際、食べさせられて寝かされ、車いすでテレビの前に連れていかれる高齢者の姿を見て、人の持つ尊厳について学ぶきっかけを得るということもあるだろう。このような学びは、インタラクションがなくても、人を客観的に見ることがきっかけで生じる学びである。

「情報取得からの学び」は、活動の経験をとおして出会った事象や事柄から生じた学びである。例えばスーパーやコンビニでの仕事を通して、現代人の食文化の変化を知ったり、今まで知らなかった万引きの実態や深刻さ等を知ったりする

ことがあるだろう。あるいは、高齢者支援のボランティアで、車いすの清掃という作業を担当した場合には車いすの操作や仕組みに詳しくなることもあるだろう。これらは、活動をとおして情報を取得することによって生じる学びである。

「社会活動をとおした学び」の３つのうち、「たまたま出会った人からの学び」は、その時は学びであっても長く留まるような学びではない可能性が高く、恒常的な学びとして検討することは難しい。また「情報取得からの学び」は、知識と情報だけの学習であり高齢期の豊かさを高めるために重要な学びとは考えにくい。しかし、インタラクションのある「つながりからの学び」は高齢期に重要なコミュニケーションの広がりにもつながるため重要である。そこで「つながりからの学び」を、インタラクティブがある人との関係がきっかけとして生じる学びと定義とする。

また「つながりからの学び」については、発達との関係についても検討が必要である。第 1 章、第３節、第１項で触れた大浦（1996）は、活動経験から生じる学びが発達に影響すると指摘している。大浦の指摘は、若い世代のみを対象にしたものである。しかし高齢者についても、本節、第２項で取り上げた Chen（2016）の研究と田中（2011）の研究では、高齢者についても学びが発達をもたらす可能性が示唆されている。Chen は、ボランティアをとおした学びによって、自己のポジティブな評価という自己認識という発達、田中（2011）の研究もボランティアによる学びがアイデンティティにつながる可能性を示唆した。大浦の指摘や、Chen、田中の研究はいずれも抽象的な指摘にとどまっており、その後の実証的な検討は行っていないため、学びが発達につながるかという点については実証的な検討が必要である。

第３節　高齢者の学びに関する研究の課題

これらの先行研究からは高齢者の学びの研究に関する課題が指摘できる。

１．「社会活動をとおした学び」の具体的な学びの内容に関する検討

２．「社会活動をとおした学び」の活動の種類による違いの検討

３．「つながりからの学び」がもたらす発達に関する検討

１つ目は、「社会活動をとおした学び」の具体的な内容に関する検討の不足である。Chen の研究は、学びが生じたことによる個人の態度や価値の変化を捉えたも

のであり、どのような学びが生じたかということ自体については検討されていない。

２つ目は、検討する活動の種類に関する問題である。本論で取り上げた Chen と田中の研究はどちらも高齢者を対象とした研究ではあるが、ボランティアという一つの活動に限定した研究であり、他の活動でも同様の結果が得られるかはわからない。しかし高齢者の学びについて、活動の種類による比較検討した研究はまだ少ない。

Morrow-Howell, Kinnevy & Mann (1999)は、学習活動とボランティア活動の２種類の活動を同時期に行うというプログラムに参加した高齢者を対象にし、それぞれの活動効果の違いについて検討した。その結果、学習活動では友人ができたことと学習意欲が増したこと、ボランティア活動では、社会の役に立ったことやりがいを得たという心理的満足感を得たことを報告し、それぞれにおいて違う効果が生じていた。つまり活動効果は、活動の内容や種類によって違いがある可能性がある。Morrow-Howell, Kinnevy & Mann の研究は学びに関する研究ではないが、満足した内容に違いがみられたことの理由として、活動における経験の違いが影響している可能性が考えられる。したがって経験が影響する学びにおいても、活動によって違いがある可能性が考えられる。よって、社会活動における学びの検討は、活動による違いの検討も重要である。

３つ目は、「つながりからの学び」が発達を促進するかに関する検討の必要性である。大浦（1996）は若い世代について、活動をとおした経験によって生じた学びが発達へつながると指摘しているが、他者の存在は指摘していない。しかし田中は、高齢者がボランティア活動をとおして出会った人との交流から学びを得ていたこと、その学びが活動を継続することによって発達に影響する可能性を示唆した。本論の「つながりからの学び」についても、高齢者の発達につながる可能性が考えられるため、ボランティア活動以外における学びの発達への影響についても検討が必要である。

これら３点の課題に関して検討することにより、高齢者の社会活動の効果について、これまで社会老年学で明らかにされてきた心身の健康維持向上や生きがいの創出等以外の効果が明らかになる可能があり、高齢者の社会活動の意義の拡大につながる。

第３章　社会活動をとおした高齢者の発達

第１章では、高齢者の「社会活動をとおした学び」において、「つながりからの学び」が重要であることを論じた。さらに大浦（1996）が若い世代に対して指摘している学びが発達をもたらすことについて、Chen（2016）と田中（2011）の研究は、高齢者においてもが学びから発達につながる可能性があることを示唆した。

しかし、生涯発達の視点からは学びに注目した研究は少ない（南・やまだ，1995）。第２章、第２節、第３項で触れた田中（2011）が示唆した学びがもたらすアイデンティティについても、学びに注目した理論はあまりない（岡本，1997）。生涯発達からの視点において、学びは影響要因としてあまり検討されていないが、人とのつながりについては発達への影響要因として捉えている論がある。しかし、社会老年学では人とのつながりの検討において、発達との関連を検討した研究は少ない。

このように社会活動をとおした人とのつながり、学び、発達は、いずれも高齢者にとっては社会活動への参加によってもたらされるものであるが、個別の学問領域においてそれぞれ違う視点から検討されている。

本章では、まず生涯発達論における高齢者の発達をとりあげ、次に社会老年学の視点から社会活動をとおした高齢者の発達を検討する。第１節で生涯発達論の分類から高齢者の発達について整理し、第２節で社会活動というコンテクストでの発達について考察を進め、第３節でこれらの議論をふまえ、高齢者の発達研究の課題を指摘する。最後に第４節において、社会老年学の視点から社会活動をとおした高齢者の発達について検討する。

第１節　生涯発達の分類

長くなった平均寿命の中で、どのように生きどのように変化していくかという関心から、発達において高齢期に至るまでを捉える生涯発達心理学という学問領域が広がったのは 1970 年以降のことである（岡本，1994）。本節では生涯発達論の分類から、高齢期の社会活動に関連する発達について検討する。

第１項　生涯発達論の３つの分類

堀（2010）はこれまで提唱された生涯発達論を、発達の捉え方から３つに分類した（図３－１）。一つは成長から、社会化という発達、２つ目は生涯をとおしたプロセスと捉えた発達、３つ目は自己実現の観点からの発達である。これら３つの分類について、それぞれ年齢の役割の重要性と重要な次元を指摘している。

図　３－１　堀の生涯発達論の３つの分類（堀，2010）

モデル	成人期以降の発達	年齢の役割	重要な次元
成長―社会化としての発達	考えにくい	きわめて重要	身　体
生涯のプロセスとしての発達	考える	重　要	役　割
自己実現としての発達	考える	あまり重要ではない	精　神

１つ目の「成長－社会化としての発達」は、乳児が幼児、児童、青年へと成長する「生物的、生理的条件」を重視した視点における発達である。この発達観からは、成人以降の発達は考えにくい。

２つ目の「生涯のプロセスとしての発達」は、社会的な役割が重要な次元であり、年代に応じた社会とのつながりの中で、発達上の課題に適応していくプロセスの中で発達していくとした発達観である。発達課題は生涯をとおして捉えられており、成人期以降にも発達があると捉える発達論である。

３つ目の「自己実現としての発達」は、精神が重要な視点となる。この視点では、自己の実現、つまり完成体に向かう発達観である。完成体に向かうという視点では、1 つ目の「成長―社会化としての発達」と同じであるが、異なる点は生物学的な完成体ではなく精神的な完成体からみた発達である。したがって、成人期以降の発達が想定されている。

これら３つのうち、高齢期の発達が考えられる発達観は、「生涯のプロセスとしての発達」と「自己実現としての発達」ということになる。次に、高齢期の発達が考えられる生涯発達理論について詳しく述べる。

第２項　高齢期の発達

「生涯のプロセスとしての発達」

まず一つ目に、「生涯のプロセスとしての発達」についてはライフサイクル論が代表的である。ライフサイクル論とは、人が生まれてから死ぬまでの過程を、年齢だけではなく社会における役割や社会とのかかわり方などから区分し、一連の時期または段階として捉えた理論である。

Erik H.Erikson の発達理論が有名であり、ライフサイクル論の基盤として後のライフサイクル論に影響を与えた。

図３－２　「心理社会的人生段階」(Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990). 老年期: 生き生きしたかかわりあい (朝長正徳, 朝長梨枝子, 訳).みすず書房. p.35 より、筆者が一部変更)

老年期								統合 対 絶望 英知
成年期							世代性 対 停滞 世話	
成年前期						親密性 対 孤独 愛		
思春期					アイデンティティ 対 混乱 忠誠			
学童期				勤勉性 対 劣等感 才能				
遊戯期			自発性 対 罪悪感 決意					
児童初期		自律 対 恥と疑惑 意志						
幼児期	基本的信頼 対 基本的不信 希望							

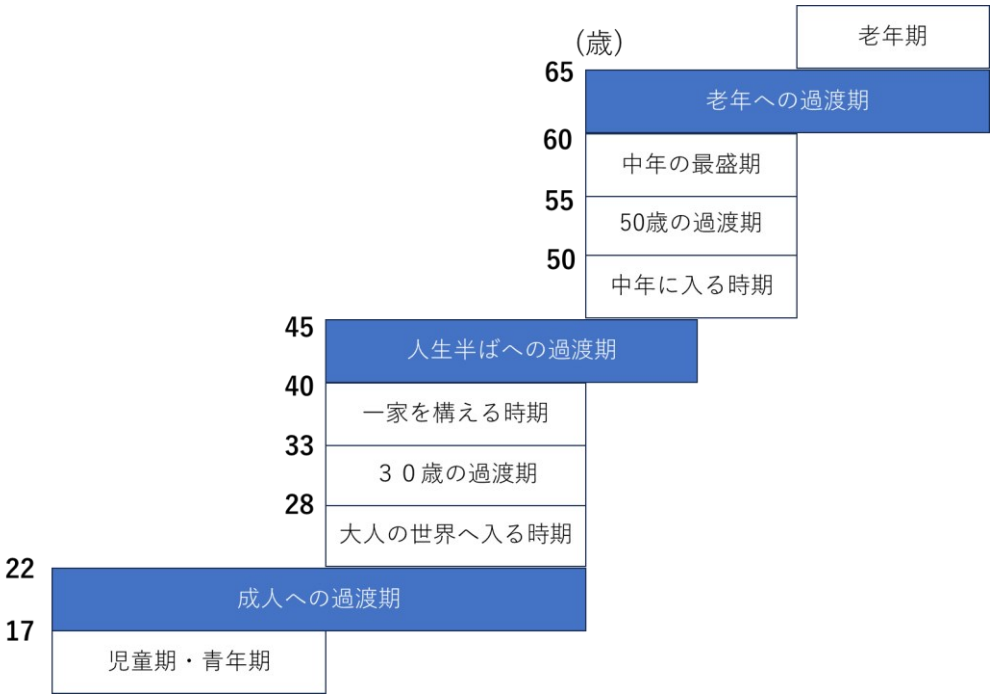
Erikson(1963/1977)の発達理論は、人生を８つの段階に分け、それぞれの段階で社会や人とのつながりの中で生じる葛藤を発達課題として示した（図３－２）。各段階における葛藤はポジティブとネガティブの両側面で捉えられており、ネガティブな側面がポジティブな側面を上回るバランスで対応することにより、よりスムーズに次の段階に進む力を得るとされている。例えば、第７段階の「成人期」

の「世代性対停滞」では、子育て世代の成人期に経験する次世代の育成という役割から、次世代への関心という「世代性」がポジティブな側面であり、次世代への関心が薄いか関わりがない場合に陥る自己満足や自己陶酔である「停滞」をネガティブな側面として捉えられている。「世代性」が高まることで、「世話」という力を獲得するとされている。Erikson は、人はこのような発達課題を達成していくプロセスをどのように経験したかが人格形成に影響するとしている。

他に、Levinson も、Erikson のライフサイクル論を基盤に理論を発展させ今日の発達研究に貢献している。Levinson（1978/1992）の理論では、年齢が重要な次元とされており、年齢によって区分された時期の段階ごとに心理的な転換期を迎えるとしている。Levinson は、各段階で経験する葛藤を過渡期と捉え、過渡期と発達期という基本パターンを繰り返していくという発達理論である（図３－３）。

これらライフサイクル論は、特に人や社会とのつながりにおける関係性や役割が、発達課題に影響するとされている。

図３－３　Levinson の成人期から老年期の発達課題（Levinson, D.J.（1978/1992）. 南　博訳. ライフサイクルの心理学（上）, p.111 ）

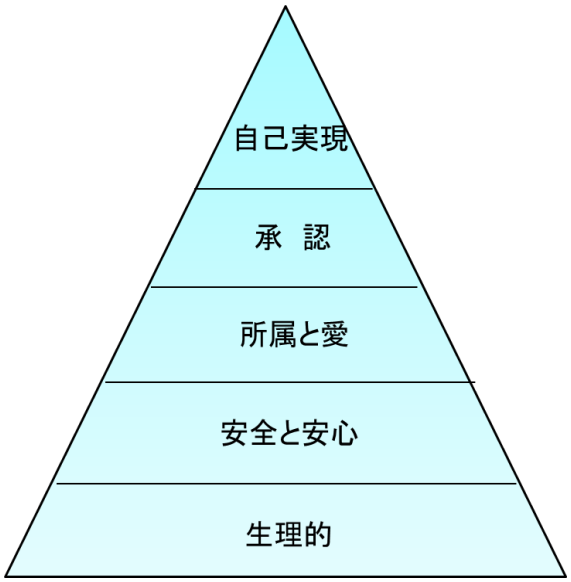


「自己実現としての発達」

高齢期の発達が考えられるもう一つの発達論は、「自己実現としての発達」である。「自己実現としての発達」は、Maslow（1954）の人間的欲求の階層説が代表

的である（図３－４）。この発達論は、自己実現に向かう人間の欲求を捉えた理論であり、低次の欲求からよりより高い次元の欲求を目指していくことで自己実現を達成するとした理論である。飲食といった「生理的」欲求から、不安や危険などからの「安全と安心」の欲求、さらに所属集団内の愛情やつながりという「所属と愛」という欲求、自己と他者の２側面からの「承認」欲求、これは自尊心につながる欲求とされている。これらの欲求の充足を経て最後に自己の能力を充分に発揮できる「自己実現」の欲求があるとされている。

図３－４　Maslow の人間的欲求の階層



アメリカの高齢者教育の広がりに貢献した McClusky（1971）は、高齢者特有の教育的欲求（ニーズ）を捉えた教育的欲求論を提唱した。McClusky は、Maslow の欲求論を発展させ（Lowy & O’Connor, 1986/1995)、高齢者の教育的欲求を以下５つに分類した。

1.「対処的欲求」

McClusky が低次の欲求として説明している読み書き算数に関する欲求である。読み書き算数が 1971 年当時アメリカで若い年代の人より、高齢者の識字率が低いことを McClusky は指摘しており、高齢者の教育的欲求の基礎であるとしている。「対処的欲求」には段階があり、基礎となる読み書き算数の欲求が満たされると、次に健康に関する教育、ついで経済に関する教育へと欲求が上がっていく。さらに上には、良い家や施設の選択を可能にする教育への欲求がある。これ

は余暇をもっとも効果的に過ごす方法を知ることへの欲求である。

２.「表現的欲求」

「表現的欲求」では、活動へ参加する目的を特に持たなくても、ただ楽しみのための活動参加や、自分の興味にしたがった自発的な活動参加等、自分を自由に解放することへの欲求である。

３.「貢献的欲求」

「貢献的欲求」は、自己の知識や経験を個人や社会のために使いたいという欲求である。McClusky は、「貢献的欲求」を満たすために、必ずしも無償で自分のもっている時間や経験等のリソースを提供する必要がないことを指摘している。

４.「影響的欲求」

「影響的欲求」は、現在自分が持っている生活や環境への影響力を引き続き期待したい欲求である。McClusky は高齢者が政治的、経済的に力が減少してくることが影響していることを指摘している。

５.「超越的欲求(Mclusky, 2006, p.336)」

「超越的欲求」は、McClusky が 2006 年になって追加した欲求である。「超越的欲求」は、肉体的老化や、社会的な役割の減少があってもそれを乗り越えて伸びていきたいという欲求である。

McClusky は、５つの欲求のうち「対処的欲求」を一番低次の欲求として、主要なものから順に示しているとしているが、Lowy & O’Connor (1986/1995) は５つの欲求について順序づけるというより、成熟度などによって個人の欲求が異なることを指摘している。

「生涯のプロセスとしての発達」と「自己実現としての発達」の２種類の発達論は、ともに高齢期における発達を想定している。これらのうち社会活動に関連する発達という視点では、「生涯のプロセスとしての発達」である Erikson や Levinson のライフサイクル論が重要と考えられる。

Maslow の「所属と愛」、「自己実現」等の欲求、また McClusky の「表現的欲求」、「貢献的欲求」や「超越的欲求」等は、高齢者が社会活動を行う目的や目標になる可能性はある。しかし高齢者は、社会活動をとおして新しい人間関係や社会的役割をもつことになり、これらをとおして楽しみや逆に葛藤等を経験することが

考えらえる。高齢者の社会活動をとおした発達という視点においては、人間関係や役割の中で経験する葛藤を発達課題として捉えたライフサイクル論が重要である。

第２節　高齢期の社会活動がもたらす発達

第１章で触れたように、現代の高齢者と高齢期の過ごし方は変化してきており、高齢者の社会活動へ積極的な参加は、高齢者が高齢期にも組織やグループでの役割を持ち続けることにつながり、社会からは地域や社会における人材としての役割を担うことにつながる。このような高齢者の社会とのつながりにおける役割の変化は、前節でみてきたライフサイクル論の捉え方にも影響がある（小田，2019）。

本論ではこのような現代の高齢者の役割の変化として、「世代性」と「アイデンティティ」に注目する。「世代性」は社会からの役割要請という視点で、また「アイデンティティ」は社会における役割の獲得という視点において、社会活動との関連が指摘されているためである（片桐，2017；中原，2013）。

第１項と第２項で「世代性」と「アイデンティティ」について詳述し、第３項で社会活動との関連を検討した先行研究から研究上の課題を検討する。

第１項　「世代性」

「世代性」は、「次の世代を確立させ，導くことへの関心」や「世話」という概念を含む中年期の発達課題である(Erikson，1963/1977)。子育てや仕事など社会的責任が増え、下の世代を導くことが増える世代の発達課題である。近年の元気な高齢者の増加や社会参加活動へ参加する高齢者の増加、子ども世代の共働世帯の増加による孫育て等、高齢者の役割の変化から、現在は中年期に引き続き高齢期にも重要な発達課題として注目されてきている。

その理由は、現代の高齢者が社会活動をとおして地域貢献や世代継承が求められるようになったためである。「世代性」には、社会貢献に関連する「貢献」や、世代継承に関する「知識伝達」という下位概念があるため、社会活動へ求められる人材としての「世代性」の高まりは重要である。

「世代性」が注目されているもう一つの理由に、「利他的行動への意欲」がある。「利他的行動への意欲」は「世代性」を高めることで高まる可能性が指摘されて

おり（田淵・権藤，2011)、「世代性」が高まった人が社会活動等への関わりを持つことで、利他的な行動、つまり貢献的な行動へつながることが指摘されている（McAdams ＆ de St.Aubin，1992)。このことから、「利他的行動への意欲」が高まれば、社会貢献を行う高齢者の増加も見込めることから、高齢期にも重要な発達課題と捉えられるようになった。

このように、社会貢献という側面から「世代性」が注目されるようになったが、エリクソンの発達理論は、個人のライフサイクルにおける葛藤を発達課題として捉えている。個人が発達課題を達成することにより、個人の人格形成に影響し、人生をよりよく生きる力を得ると想定している。このため「世代性」の発達課題においても、主題は個人の発達であると考えられる。

「世代性」に関する研究は国内外で行われており、尺度もいくつか開発されている。欧米の研究で多く使用されている尺度の一つに，McAdams & de St. Aubin (1992)が開発した「Loyola Generativity Scale （ＬＧＳ)」がある。国内では，ＬＧＳをもとに作成された日本語版（丸島，2005）が国内の研究で使用されている。しかしＬＧＳは，高齢者を対象とした調査に用いるには，20 項目と項目数の多さ等の課題があったことから，田渕・中川・権藤・小森（2012）は，高齢者にも回答しやすいように少ない質問項目で構成した「短縮版 Generativity 尺度」を作成した。「短縮版 Generativity 尺度」は，田渕らが独自に翻訳した McAdams & de St. Aubin の LGS の日本語版 20 項目から，LGS が示した５つの因子「遺産（長く記憶に残る貢献・遺産)」,「知識伝達（次世代のための知識や技能の伝達)」「世話（次世代の世話と責任)」「貢献（コミュニティや隣人への貢献)」「創造性」からそれぞれ１項目ずつを取り出した５つの設問で構成されている。

田渕・権藤（2011）は、「短縮版 Generativity 尺度」の信頼性と妥当性について検討し、使用した調査のデータにおいて 5 項目の平均値に偏りは見られず、信頼係数のαは .68 という結果から中程度の信頼性を確認した。またボランティア等の地域活動への参加と「短縮版 Generativity 尺度」の尺度得点との間で正の相関が示され妥当性も確認した。「短縮版 Generativity 尺度」は、近年国内の高齢者を対象とした研究で使用されている(原田ほか，2019；田渕・三浦，2014)。

第２項　「アイデンティティ」

「アイデンティティ」は、「自分とはなにか（南・やまだ，1995)」という自己に関する発達課題であるが、Erikson の理論を土台にアイデンティティ研究として心理学、哲学、社会学、教育学などに研究範囲が広がっている（丸井，2012)。

高齢期に経験する定年退職等、自分の意思とは無関係に経験する社会的役割の喪失が、アイデンティティにネガティブに影響する（アイデンティティの危機）とされている（西田，2011)。岡本（1997）によるとアイデンティティの危機に直面し、「一時的な混乱・不安定期を経て、再び安定したアイデンティティが獲得されていくというプロセス」が、成人期のアイデンティティの達成であると説明している。岡本はこのプロセスを、「危機⇒再体制化⇒再生」という生涯にわたる発達課題とし、「アイデンティティの再体制化」と呼んでいる。アイデンティティの発達は自分の中にある連続性のある自分という「個のアイデンティティ」と、人との関係や社会、組織等における役割からの「関係性にもとづくアイデンティティ」が相互に影響し合いながら（アイデンティティの統合）達成していくと説明されている。

第３項　発達につながる社会活動

高齢者の社会とのつながり方の変化から注目されてきている「世代性」と「アイデンティティ」であるが、先行研究で指摘されているように社会活動をとおして高まるのだろうか。本項では、高齢者の社会活動と「世代性」と「アイデンティティ」との関連を検討した先行研究から、「世代性」と「アイデンティティ」が社会活動によってどう影響されるかについて検討する。

「世代性」を高める社会活動

片桐（2017）は，高齢者就労は世代間の交流，文化や経験の継承等の次世代に関わる役割も期待されていることから、「世代性」を高める可能性があることを指摘している。「世代性」は若い世代へ自分の経験を話すなどの継承行動によって促進されることが確認されている（Cheng，2009；田渕・三浦，2014)。また下の世代への継承だけではなく、上の世代との関係についても「世代性」が関連していることが示されている。

「世代性」の下位概念に「世話」がある（Erikson，Erikson，& Kivnick，

1986/1990)。「世話」が仕事の中心である高齢者施設のケアワーカーを対象にした研究によると，ケアワーカーの「世代性」の高さは、職務に対する有能感の高さに関連することが示された（Kim, Park, & Lee, 2020; 新木, 2011)。介護職員の職務に対する有能感は、施設利用者との良い人間関係が関連していることが示されている（蘇ら，2007)。介護職員は施設利用者の世話が仕事であるため、施設利用者との良好な関係が築けているということは、仕事の中心である「世話」に関する能力の高さによるものである可能性がある。このことから、「世話」の能力の高さが「世代性」の高さと関連している可能性も考えられる。言い換えると「世話」の能力を高める介護職員の仕事は、「世代性」も高める可能性が示唆される。

またGrossman & Gruenewald (2017)は，仕事ではない日常生活における介護経験と「世代性」の関連について，生活で介護経験がある人と経験がない人とでは，介護経験がある人の「世代性」の方が高かったという結果を報告している。これらの結果からは,「世代性」は次世代に対する関心や世話だけではなく，上の世代に対する介護経験についても「世代性」が促進される可能性が示唆される。しかし，介護施設における研究は，調査対象者の平均年齢が 50 歳代という高齢期より前の世代の対象者が多い研究であったため，高齢者を対象とした検討が必要である。

「アイデンティティ」を高める社会活動

「アイデンティティ」と社会活動との関連について、岡本（1996）の研究では社会活動との関連は示されなかった。しかし中原（2014）の研究では、シルバー人材センターの活動が社会的アイデンティティを高めるという結果を報告し、田中（2011）もボランティア活動をとおして「アイデンティティ」の達成が可能であることを指摘している。このことから「アイデンティティ」は、社会活動によって「関係性にもとづくアイデンティティ」が高まり、それが最後に「個のアイデンティティ」につながると考えられる。

自己認識について、社会心理学では「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」という２つの自己観があるとされている（Markus & Kitayama, 1991)。前者は、自己と他者やまわりの事物とを切り離して捉える自己観で、欧米の文化で優性だといわれている。後者は依存的自己観で、自分と他者の関係性の中で自己

を捉える、日本を含むアジアの文化で優性とされている自己観である。したがって、日本人にとって人との関係を持つということが、自己認識に影響すると考えられる。つまり「アイデンティティ」の発達においても、人との関係が重要であると想定される。

以上、先行研究からは「世代性」は活動をとおして下の世代と上の世代の両方との交流によって高まる可能性が示唆され、「アイデンティティ」は人との関係をとおして高まる可能性が示唆された。しかし、これまで生涯発達に関する研究では、学びは発達の要因として検討されていない。

第３節　社会活動をとおした発達に関する研究の問題

前節で取り上げた先行研究から、研究上の課題が２つ見いだされた。１つは、発達につながる学びの視点の不足である。もう一つは社会にもたらす効果、つまり社会から期待される発達という視点の不足である。

１つ目の発達につながる学びの視点の不足については、生涯学習では学びが発達に影響することが指摘されているが、生涯発達からの視点において、学びを検討した研究がほとんどない。一方で、第２章、第２節、第２項で指摘したように、学びは人とのつながりがきっかけとなる。本章、第２節、第３項でとりあげた発達もまた、人とのつながりが影響する。つまり人とのつながりは、学びにも発達にも影響するが、人とのつながりが学びを生じさせることで発達するのか、あるいは学びがなくても人とのつながりからのみで発達するのかについてはほとんど検討されていない。

もう一つは、高齢者の発達における社会にもたらす効果、つまり社会貢献につながる発達の視点の不足である。現代の高齢者には、地域づくりや社会貢献につながる活動の担い手として期待されている。前節、第 1 項で述べたように、「世代性」の発達は社会貢献行動へつながる可能性はある。しかし Erikson の「世代性」は個人のライフサイクルにおける経験による葛藤を発達課題としており、発達課題の達成は人生をより良く生きる力の獲得という個人が主題の発達に限られており、社会への効果というマクロな視点からの発達の検討が必要な時代になってきた。しかしこれまでマクロな視点からの発達については、あまり検討されていない。

第４節　欠けていた視点：社会への効果につながる高齢者の発達

前節では、社会活動をとおした発達の研究に関する課題として、学びと発達の関係という視点の不足と、社会にもたらす効果からみた発達という視点の不足という２つの視点の不足を指摘した。本節では後者の高齢者の社会にもたらす効果という視点からの発達について検討する。

本論では社会にもたらす効果として、「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」の２つを取り上げる。ここでいう「社会貢献意識」は、片桐（2012）のいう「社会貢献志向」と同様の概念である。片桐の「社会貢献志向」とは、「地域や社会に役立ちたい（片桐，2017)」という意識や意欲である。片桐によると、「社会貢献志向」の高さは社会貢献活動への参加と関連しており、社会貢献活動は趣味や学習活動などのグループ活動に比べて社会への効果が高いとされていることから、社会への効果という視点では重要である。

「コミュニティ感覚」は、池田（2006）が、「コミュニティ感覚」の高まりは、地域の問題解決や問題の予防等、よりよい地域づくりに寄与する可能性を指摘しているように、社会にもたらす効果として重要である。

発達心理学は個人の変化が関心の中心である学問領域である。ここでは「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」は、どちらも個人の心理の変化と捉えられ、発達と捉えることが可能である。「社会貢献意識」の高まりは社会の役に立ちたいという意欲の高まりであり、「コミュニティ感覚」の向上はより良い地域づくりへの貢献が期待できる。つまり社会にもたらす効果をとらえた発達と捉えることが可能である。社会老年学において、発達を扱った研究は少なく、「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」を発達として捉えた視点も本研究の新しい視点である。

第１項　「社会貢献意識」

「社会貢献意識」という言葉は、これまで定まった定義はなく、特に定義を定めず使用されることも多い。片桐の「社会貢献志向」は、「人の役にたちたいという愛他性と自分も社会の世話になったのでそのお返しをしたいという返報性から、自分たちの住む地域や社会をよくしたいという志向」とされている。本論における「社会貢献意識」とは、前述のとおり、片桐（2012）の「社会貢献志向」と同

じことを意味している。

牧野（2009）は、高齢者大学におけるボランティアに関する情報や社会的課題等を学ぶ講座の受講によって、「社会貢献意識」が高まることを指摘している。牧野の研究における学びは、学習活動における Intended Learning（第２章、第１節、第２項）であるが、片桐（2012）は、社会貢献活動における経験からも「社会貢献意識」が高まることを指摘している。つまり「社会貢献意識」は、「社会活動をとおした学び」によって促進される可能性が示唆される。

第２項　「コミュニティ感覚」

「コミュニティ感覚」は、コミュニティ心理学の分野において検討されてきた。コミュニティとは地域のことを指すが、ただ地理的な枠組みとして捉えるだけではなく、住民同士のつながりによってもたらされる情緒的な集団として捉えるようになってきている。

このようなコミュニティに対する意識は、1974 年に Sarason（Sarason, 1974）が「コミュニティ感覚」として、以下の４つの軸からその定義を説いた。

１．　他者との類似性の知覚
２．　他者との相互依存関係の承認
３．　他者との相互依存の関係を維持しようとする感覚
４．　安定した大きい構造の一部であるという感覚

その後、McMillan & Chavis（Chavis et al., 1986）が「メンバーシップ」「影響」「統合とニーズの充足」「共有された情緒的結合」の４因子からなる尺度として Sense of Community Index（SCI）を開発した。Long & Perkins(2003)は、SCI について４因子構造の妥当性を確認したが、Sugawara et al.(2009)は、日本のデータが４因子構造にあてはまらず、「地域への愛着」「価値観の共有」「近隣との関わり」の３つの因子構造であると指摘している。

コミュニティ心理学では、「コミュニティ感覚」の高さは、主観的幸福感の高さや孤独感の低さと関連していることが報告されているが、地域への投票率や地域政策への参加との関連があることも示されている（笹尾, 2007）。社会参加活動への参加が「コミュニティ感覚」を高める可能性も示されている（片桐, 2012）。

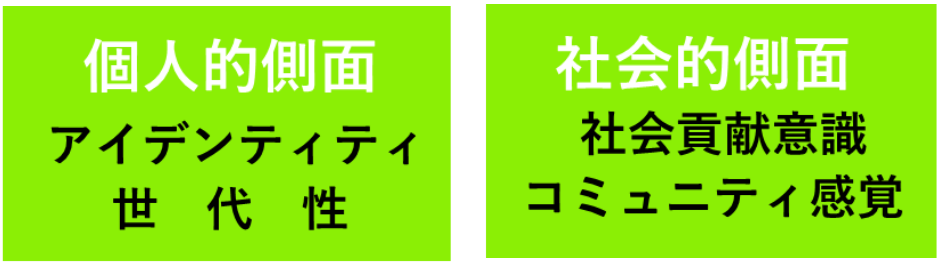
このように、「社会貢献意識」や「コミュニティ感覚」は、社会活動への参加に

よって高まる可能性が示唆され、社会活動をとおした発達と捉えることも可能である。これらは社会への効果が期待でき、現代の高齢者の社会活動の効果として検討の必要性があると考えられる。

第３項　本論における社会活動をとおした高齢者の発達

ここまでの議論を踏まえ、本論では社会活動をとおした高齢者の発達として、これまで発達研究で注目されてきた個人の発達に加え、社会から求められる発達という２つの側面から捉えた発達を提案する（図３－５）。このモデルでは、「世代性」と「アイデンティティ」を個人の発達、「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」を社会への効果をもたらす発達として扱う。また個人の発達を「個人的側面」の発達、社会への効果をもたらす発達を「社会的側面」の発達と呼ぶこととする。

図３－５　本論の社会活動における高齢者の発達



第４章　新しい高齢期の発達モデルの提案

ここまで、高齢者の社会活動がもたらすものとして、人とのつながりについては社会老年学から（第１章)、学びは生涯学習論から（第２章)、発達は生涯発達論から（第３章）先行研究を整理し、研究における課題について検討した。

本章では、以上の議論を統合した仮説モデルを提示する。第１節で、第２章、第３章で指摘した学びと発達に関する研究課題をまとめ、第２節で、人とのつながり、学び、発達を包摂した仮説モデルを提示する。最後に第３節で、研究の目的を明らかにする。

第１節　高齢者の社会活動がもたらす学びと発達に関する研究上の課題

第２章と第３章において、高齢者の社会活動がもたらす学びと発達について、高齢者の「社会活動をとおした学び」の検討の不足、高齢者の社会活動をとおした発達に関する社会にもたらす効果という視点の不足、「つながりからの学び」の発達への影響の検討という３つの研究課題が見いだされた。

１つ目に、高齢者の「社会活動をとおした学び」の検討について、第２章で「社会活動をとおした学び」の概念について分類を行ったが、高齢者の「社会活動をとおした学び」にどのような学びがあるかについては十分に明らかにされてこなかった。また「社会活動をとおした学び」については、活動経験も影響することから活動内容によって、生じる学びに違いがある可能性があるが、活動の種類による比較を行った研究は少ない。

２つ目の社会にもたらす効果については、これまで高齢者の社会活動と発達の検討は行われてきたが、個人の発達に関心があった。本研究では第３章、第４節で「個人的側面」の発達と「社会的側面」の発達を合わせた、社会にもたらす効果という視点からみた発達を提案した。このような発達の捉え方は新しい視点であり、検討が必要である。

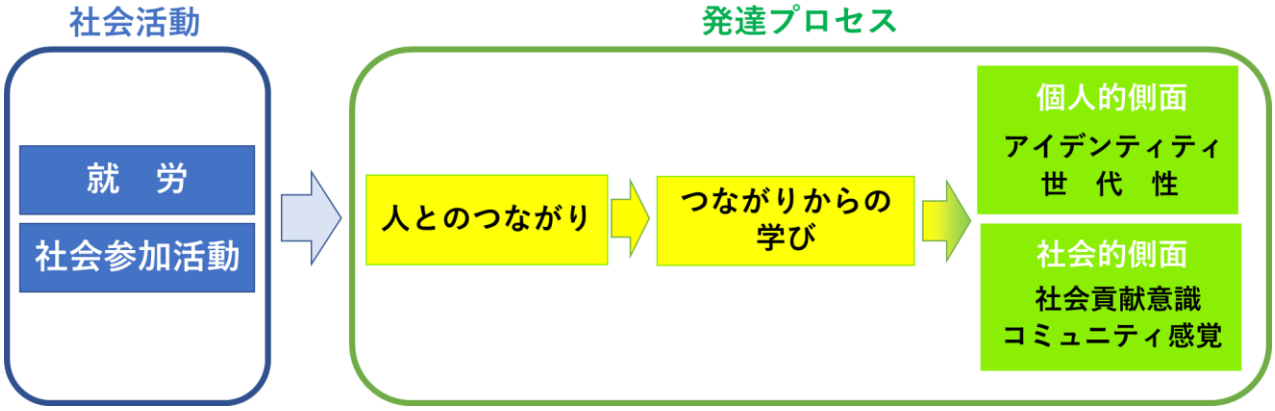
３つ目の「つながりからの学び」から発達への影響について、第２章で生涯学習の分野において「社会活動をとおした学び」は発達につながるという指摘がされていることを述べたが、第３章で取り上げた生涯発達に関する先行研究では、発達から学びを検討した研究や、発達における学びの必要性を指摘した論は少な

いことを指摘した。また、学びも発達も人とのつながりが影響する要因になることが指摘されていることから、「つながりからの学び」が発達に影響する可能性が考えられる。また、生涯学習で指摘されている学びと発達の関係は、質的な検討からや抽象的な指摘が多く、実証的な検討を欠いている。

第２節　「社会活動をとおした発達のプロセス（仮説モデル）」

本研究では、社会活動をとおした人とのつながり、その「つながりからの学び」、と発達について、先行研究を踏まえたうえで、３つの関係から仮説モデルを設定した（図４－１）。図４－１で示した「社会活動をとおした高齢期の発達プロセス（仮説モデル）」は、社会老年学、生涯学習、生涯発達、それぞれの視点から指摘されてきた社会活動がもたらす「人とのつながり」、「つながりからの学び」、発達の３つを一連のプロセスとして捉えたものである。これは高齢者が社会活動へ参加し、活動の中で人とのつながりが生まれ、人とのつながりがきっかけとなり「つながりからの学び」が生じ、さらに「つながりからの学び」が発達をもたらすという、社会活動をとおした発達へのプロセスである。

図４－１　社会活動をとおした高齢期の発達プロセス（仮説モデル）



第３節　本研究の目的

本研究では、これまで個別の学問領域で検討されてきた、社会活動をとおした「人とのつながり（社会老年学）」、「つながりからの学び（生涯学習）」、発達（生涯発達）の３つの関係を明らかにし、前節で提示した高齢者の「社会活動をとおした発達プロセスモデル（仮説モデル）」の検証を行うことを目的とする。

なお、本論における社会活動とは、社会参加活動と就労を合わせた概念であるが、社会参加活動と就労は参加目的や関連要因に違いがあるため（片桐，2012）、社会参加活動と就労は分けて検討を行うこととする。

第 2 部　「社会活動をとおした発達のプロセス（仮説モデル）」の検証

本研究では、第 1 部で示した「社会活動をとおした発達プロセス（仮説モデル）」を検証するために、以下３つの課題を設定した。

１.「社会活動をとおした学び」とはどのようなものか

２. 社会活動は発達を促進するか

３.「つながりからの学び」は発達に影響するか

表 1 本研究の概要

研究	研究目的	使用した調査データ			
課題１	**「社会活動をとおした学び」とはどのようなものか**	《調査１》兵庫県内の高齢者大学に参加する60歳以上の男女を対象にしたインタビュー調査	《調査２》兵庫県内の絵画教室参加する60歳以上の男女を対象にしたインタビュー調査	《調査３》兵庫県宝塚市主催の「健康生きがい就労トライアル」事業の参加する60歳以上の男女を対象にしたインタビュー調査と3か月の追跡質問紙調査	
【研究１】	**インタビュー調査による学びの検討**				
【研究１－１】	どのような学びが社会活動をとおして得られるか、また得られる学びの活動種類による違いの検討				
【研究１－２】	活動継続による「社会活動をとおした学び」を検討				
課題２	**社会活動は発達を促進するか**				
【研究２】	**3か月のトライアル就労をとおした個人の変化**				
【研究３】	**社会調査による発達を促進する社会活動の検討**				**《調査４》兵庫県宝塚市在住の無作為に選出された60歳以上の男女1,022人を対象にした質問紙調査**
【研究３－１】	個人的側面と社会的側面の発達を高める社会活動の検討				
【研究３－２】	活動をとおした交流の広がり、仲間の獲得、学びの発達との関連の検討				
課題３	**「つながりからの学び」は発達に影響するか**				
【研究４】	**「つながりからの学び」の間接効果の検討**				
【研究４－１】	「つながりからの学び」の発達を促進するかの検討				
【研究４－２】	社会参加活動で得た仲間は「つながりからの学び」を促進するかを検討				

本研究では４つの調査データを用いて、研究１から研究４を実施した（表１）。各研究の課題と使用する調査データは以下の通りである。

■課題１：「社会活動をとおした学び」とはどのようなものか

【研究１】インタビュー調査による学びの検討

【研究１－１】《調査１》《調査２》《調査３》　「社会活動をとおした学

び」はどのようなものか、また得られる学びは活動の種類によって違いがあるかを検討する。

【研究１－２】《調査１》《調査２》《調査３》　活動をとおした学びは、活動を続けることによって新たな学びをもたらすものなど、活動継続における学びについて検討する。

■課題２：社会活動は発達を促進するか

【研究２】《調査３》　高齢者就労は、個人の発達に影響するかを検討する。

【研究３】社会調査による発達を促進する社会活動の検討

【研究３―１】《調査４》　高齢者の発達における個人的側面及び社会的側面を高める社会活動を検討する。

【研究３－２】《調査４》　活動をとおした交流のひろがり、仲間の獲得、学びの発達への影響を検討する。

■課題３：「つながりからの学び」は発達に影響するか

【研究４】社会参加活動における学びの媒介効果の検討

【研究４－１】《調査４》　社会参加活動をとおした学びが個人面と社会面の発達に影響するかを明らかにする。

【研究４－２】《調査４》　社会活動をとおして得た仲間を獲得することが、学びを促進するか明らかにする。

本研究において実施した４つの調査（《調査１》～《調査４》）ごとの協力者、調査方法および期間は以下のとおりである。

《調査１》

高齢者大学の活動をとおした変化に関するインタビュー調査

・**協力者と方法**　兵庫県内の高齢者大学に通う 60 歳以上の男女 6 人を対象に、1 対 1、1 対 2 のインタビュー調査

・**期間**　2017 年 7 月～9 月

《調査２》

絵画教室の活動をとおした変化に関するインタビュー調査

・**協力者と方法**　兵庫県内の絵画教室に通う 60 歳以上の男女 6 人を対象に、1 対１のインタビュー調査

・**期間**　2016 年 8 月～11 月

《調査３》

Mixed Method による生きがい就労の効果の検討

・**協力者と方法**　兵庫県宝塚市主催の「健康生きがい就労トライアル」事業に参加した 60 歳以上の男女 52 人を対象に、1 対 1～４のインタビュー調査及び、「健康生きがい就労トライアル」事業開始時と終了後（3 か月後）に縦断調査を実施

・**期間**　2019 年 7 月～2020 年 1 月

《調査４》

兵庫県宝塚市で実施した社会調査

・**協力者と方法**　選挙人名簿より無作為に抽出した兵庫県宝塚市在住の 60 歳以上の男女 1022 人（回答数 456 件、回収率 45％）を対象にした、郵送による質問紙調査

・**期間**　2019 年 10 月～11 月

第５章　「社会活動をとおした学び」の検討

本章では、第２章で述べたように、高齢者の学びとしてこれまであまり検討されてこなかった「社会活動をとおした学び」について検討する。学びは知識や態度、価値等の変化を生じさせるが、学びが生じていても本人がそれに気付かないことがあることが指摘されている（Merriam, et al., 2007)。つまり「社会活動をとおした学び」についても同様に、本人が学んだことに気づかないことが考えられる。末元（2016）はこのような本人が気づかずに日常に埋もれてしまう事柄の検討は、「自己の経験した出来事を振り返ることを通じて明らかになる」と主張し、インタビューで経験を振り返ってもらう等することで本人の自覚を促すことが必要であると指摘している。

末元の指摘を受け本研究では、第１節で高齢者の社会活動をとおした学びについてインタビュー調査から検討する。学びの検討については、第２章、第３節で述べたように活動経験によって学びが影響されるため、活動内容による違いの比較も行う【研究１－１】。

また、第２章、第２節、第１項で示したChen(2016)の研究は、学びによってもたらされた学びの側面は、他の学びの側面に影響することを示し、影響された学びはまた他の学びに影響するという、学びの側面間の影響関係を捉えた。しかし、Chen は活動の継続における学びについては検討していない。本研究では、第２節で活動を継続することによって、あらたな学びをもたらすかについて検討する【研究１－２】。

第１節　社会活動をとおした学びと活動の種類による違いの検討【研究１－１】

【研究１－１】は、「社会活動をとおした学び」の内容と種類による違いについて、質的な検討を行った。

第１項　目的

【研究１－１】では、高齢者大学、絵画教室、生きがい就労の３種類の活動から以下の２点について検討することを目的とした。

１）社会活動を通してどのようなつながりからの学びがあるか

２）活動の種類によってつながりからの学びに違いがあるか

本研究で対象とした高齢者大学、絵画教室、生きがい就労の３種類の活動の特徴は以下のとおりである。

１．　高齢者大学

本研究で取り上げる高齢者大学は自治体が主催する、主に 56 歳以上を対象とした学習施設であった。高齢者大学は、学習活動だけを目的としておらず、高齢者の居場所や社会とのつながりづくりという目的も掲げていた。そのため、学生は仲間づくりやグループで協力して課題を行うなど人とのつながりができる仕組みがカリキュラムに組み込まれていた。また、近年は高齢者の学習活動は、社会貢献の担い手育成という目標も自治体から期待されていることから、学生は在学期間中に何らかの地域貢献活動へ参加することがカリキュラムの一部に位置付けられていた。

２．　絵画教室

絵画教室は、カルチャーセンターなどの民間の教室の他、公民館や高齢者大学でもコースが設けられていることが多く、高齢者が参加してみたい活動のトップになっている（内閣府，2017)。本研究では、高齢者大学や公民館ではなく、民間の絵画教室を取り上げた。民間の絵画教室の多くは、大人全般を対象にしていることから子育て世代等の若い世代との交流の場になる場合もある。民間の絵画教室はあくまで個人の趣味を追求する場を提供するものであるため、授業をとおして人とつながるためには主体的な行動が求められることが考えられる。

３．　生きがい就労

本研究で取り上げた生きがい就労は、人材不足という地域の課題解消を目的に掲げた自治体主催の高齢者就労促進プログラムにおける就労であった。勤務先は人手不足の問題を抱える高齢者施設での仕事で、募集は自治体が行うが、雇用は各高齢者施設が行った。募集の説明会では、高齢者施設は人手不足が深刻であり、高齢者の力が必要であるという社会的課題に関する内容を含んでいた。勤務先の施設には一人で配属されることが多かったが、若い職員や年上の入所者と仕事をとおしたコミュニケーションがあることから多世代交流があり得る環境であった。

これら３種類の活動を取り上げた理由を以下に述べる。

一つ目は、活動における人とのつながり方の違いである。高齢者大学は社会参加のきっかけになることが多く（堀，2010)、高齢期における新しい人間関係につながる可能性が高い。また生きがい就労も新しくスタートした事業であり、新しい人間関係が生じやすいと考えた。絵画教室はあたらしい人間関係というより、異世代交流などが生じやすい環境と考えられる。高齢期に新たに社会活動へ参加する場合は、これまでとは違う人間関係の広がりが期待されるため、「活動をとおした学び」において、人間関係の多様な広がりは重要な視点である。

２つ目は、活動をとおした社会貢献に関する経験の違いである。高齢者の社会活動に対する社会への効果という視点からは、本研究でとりあげる高齢者大学や生きがい就労の取り組みが、「社会活動をとおした学び」に影響するかという点も重要である。高齢者大学は貢献活動への参加が義務付けられており、学生は貢献意識の高低に関係なく活動へ参加する。生きがい就労は、目的が経済的な理由であっても、説明会によって社会貢献や地域の課題に対する意識が高まっている可能性が考えられる。一方で、絵画教室は高齢者が行いたい生涯学習として人気ではあるが、社会貢献への意識に働きかけない活動である。これらの地域の課題や社会貢献に対する経験の違いが、学びにも影響する可能性がある。

３つ目は、継続年数の違いである。高齢者大学は２年、３年と在籍期間が決まっており、在籍期間終了後は大学への再応募は基本的にできないため、活動を共にした仲間との大学内での関係は終了することになる。また生きがい就労は３か月のみのトライアルで、希望者のみ継続を申し出ることは可能であるが、スタート時には３か月の期間限定の雇用であった。一方で絵画教室は 10 年以上の在籍者がいるため、活動継続における学びへの影響について比較の対象になると考えたためである。

対象となった施設については、すべて兵庫県の阪神地区にあり、地域文化や住民の経済状況等に偏りが少ないことを考慮したうえで施設を選出した。調査の協力へ承諾が得られた施設を対象施設とした。

第 2 項　方法

本研究では、インタビュー調査を３つ行った。１つは高齢者大学の参加者を対象にした《調査１》、２つ目は生きがい就労参加者を対象にした《調査２》、３つ

目は、絵画教室の参加者を対象として《調査３》である。

調査協力者

調査協力者の条件は、全施設共通で現役世代の役割を終えて高齢期の社会参加を行う人が対象となるように、60 歳以上で定年退職や子育てが終了した男女としたが、調査協力者の選出方法については、施設ごとに異なった。高齢者大学と生きがい就労は、募集対象年齢が 57 歳以上やおおむね 60 歳として、実際には 50 歳代の参加者も存在した。しかし本研究では、調査時の 2016 年から 2020 年の期間において、「高年齢者等の雇用の安定等に関する法律」の第８条で 60 歳が定年と定められているため、調査対象者を 60 歳以上とした。

また施設という言葉の使用について、絵画教室は、通常は施設というより教室と呼ぶことが多い。しかし、本研究で扱う高齢者大学は自治体が主催する学習施設であり、生きがい就労の配属は高齢者の介護施設であることから施設と呼ぶため、便宜上絵画教室も同様に施設と呼ぶこととした。

調査内容

調査内容については、活動中に感じたことや活動中に変化した行動、また活動を始めてからの日常生活における行動や考え方等の変化について質問した（Appendix １, Appendix ２）。

調査実施方法

調査実施方法はすべて、１人のインタビュアーによって行われた。調査形態は、協力者１人の個別インタビューか、協力者２人または４人でのグループインタビューであった。半構造化インタビューを行い、インタビュー時間は 35 分から２時間（平均 52 分）であった。調査協力者の活動終了後に、施設の一部屋を借りて行った。インタビュー開始前に調査の目的等を口頭で説明し、IC レコーダーによる録音の許可を得た。また録音されたインタビュー内容を逐語し分析することを説明した。その際、個人が特定される内容は公開しないこと等、調査における倫理に関する説明を行い、インタビューの承諾を書面で得た。なお、本調査は神戸大学大学院人間発達環境学研究科の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

《調査１》《調査２》《調査３》に関する、各施設の概要と調査協力者、調査時期は以下の通りである（表５－１）。

表５－１【研究１－１】調査協力施設の概要

	活動団体	施設	対象	期間	内容
≪調査1≫	高齢者大学	施設A（ボランティア実践コース）	56歳以上	2年 90分/週	地域の歴史や文化、地域活動の課題等の教養講座と地域貢献活動のボランティア参加
		施設B（美術・工芸コース）	57歳以上	3年 週2日 3時間/	健康、スポーツ、自然、地域の歴史、文化等の一般教養講座と絵画、版画等の美術と陶芸の実習。在学中に地域のボランティアに参加
≪調査2≫	絵画教室	施設C	中学生以上	週１日 2時間/日	講師一人に対して受講者5人から7人のグループで行う絵画教室。。 学習内容は洋画全般（油、水彩、パステル等）
≪調査3≫	トライアル就労	施設D（高齢者複合施設） 施設E（介護老人保健施設） 施設F（介護老人保健施設）	60歳以上	3か月 週2日 2時間/日	兵庫県宝塚市主催。 希望した市内の高齢者施設で、3か月間のトライアル勤務。職種は、介護助手、直接介護を伴わない配膳下膳、風呂の清掃等の生活介助。

≪調査１≫

対象施設

高齢者大学２施設は、いずれも兵庫県内の自治体主催の施設で、1 つはボランティア養成講座（施設Ａ）、もう１つは美術・工芸コース（施設Ｂ）であった。施設Ａは、２年で修了のコース、施設Ｂは３年のコースと修了期間は違うが、いずれも受講者は教養講座等の座学とボランティア活動への参加を経験した。

調査協力者のリクルート

協力者の選出方法は、施設Ａは施設Ａで活動を行った調査者の知人１人に、同時期に活動を共にした活動仲間の中から２～３人の紹介を依頼した。

施設Ｂは、調査に関する窓口となる施設の担当者を介して、調査協力者の条件を説明し、２～３人の選出を依頼した。

調査時期

2017 年 8 月から 9 月に施設Ａ、2017 年 7 月に施設Ｂの調査を行った。

≪調査２≫

対象施設

絵画教室 1 施設

兵庫県内にある絵画教室（施設Ｃ）で、受講者はグループで絵画制作を行う。講師１人に対して５～７人程度が一緒に受講し、教室のメンバーは、30 歳代から 80 歳代までで構成されていた。

調査協力者

調査協力者の選出方法は、施設担当者に条件に合った受講者３～6 人の調査協力者の選出を依頼した。

調査時期

2016 年 8 月から 11 月に調査を行った。

≪調査３≫

対象施設

兵庫県宝塚市が主催する「宝塚市健康・生きがい就労トライアル（以下トライアル就労)」事業に参加した高齢者福祉施設９施設であった。

生きがい就労プログラムとして高齢者の自由な時間の充実、健康増進と生きがい創出のための就労機会を市内の高齢者へ提供する宝塚市が行ったプログラムであった。宝塚市が働きたい高齢者を市報にて募集した。一方高齢者就労の受け入れを希望した市内の高齢者施設が３か月の期間を限定して雇用した。３か月のトライアル就労終了後は、参加者の希望に応じて本契約を結ぶことも可能であった。トライアル就労は、2019 年５月から７月（第１期）と 2019 年 11 月から 2020 年１月（第２期）の２回実施された。プログラムに参加した施設のうち、インタビュー調査への協力を得た施設は第１期１施設（高齢者複合施設：施設 D）と第２期２施設（介護老人保健施設：施設 E，高齢者複合施設：施設 F）であった。なお、施設Ｄと施設Ｆの高齢者複合施設は特別養護老人ホームと介護付き有料老人ホーム、介護付きケアハウスの３つのサービスを運営する施設であった。トライアル就労参加者の職種は、資格を必要としない介護助手で、主に食事の配膳下膳、風呂掃除等の生活介助であった。

調査協力者のリクルート

施設Ｄ、Ｅ、Ｆの調査協力者の選出方法は、トライアル就労に参加した９施設のうち、調査協力の承諾を得られた３施設から調査協力者の選出を行った。施設ＤとＥには、単独で仕事をする参加者とペアで仕事をする参加者がいたことから、単独活動者とペア活動者それぞれ２～３人の選出を施設担当者に依頼した。施設 Fは単独活動者のみであったため、活動者から２～３人の選出を施設担当者に依頼した。各施設で選出された対象者のうち、調査協力への承諾が得られた 22 人を調査協力者とした。

調査時期

施設Ｄは 2019 年 7 月、施設Ｅと施設Ｆは、2020 年 1 月に、いずれも 3 か月のトライアル就労期間の終了前後１週間に調査を行った。

第 3 項　分析手続き

調査データの分析については、「活動をとおした学び」を、Jarvis（1987）の定義にならって「活動で得られた変化」と捉え、分析テーマを「活動を通して変化した認識と考え方」と設定した。

分析に際しては、佐藤（2008）の『質的データ分析法』を参照し、次の方法で行った。まず、調査協力者のＩＤは、活動団体、施設、協力者をアルファベットと数字で示した。高齢者大学をＫ、絵画教室をＰ、トライアル就労をＳで示し、施設をＡからＦで示した。協力者個別番号は施設ごとに１から通し番号を付した。したがって例えば、高齢者大学の施設Ａの個別番号１の協力者のＩＤは、ＫＡ１となった（表２）。

ＩＤを付した後、協力者の発言の中から一定の意味のまとまりに従ってコーディングを行った。次に、各コードの内容に従ってより抽象度の高い[概念]の検討を行った。協力者ごとの発言と[概念]の整理を行うため、コード・マトリックスを作成した。コード・マトリックスとは、協力者を縦軸、「概念」を横軸として、協力者の発言を概念ごとに並べて示す一覧表である。コード・マトリックスを使用して、欠損データや発言が極端に少数の「概念」の有無のチェック、活動団体の比較を行い、[概念]同士の関係から〈カテゴリー〉にまとめ、〈カテゴリー〉間

の関係から【コアカテゴリー】にまとめていった。それぞれの段階で、コード、概念、カテゴリー、コアカテゴリーの抽出について調査者１人が提案し、社会心理と老年学の専門家２人、大学院生５人で議論の上導出した。

なお、高齢者の社会参加では、１つの活動のみへの参加の場合や複数の活動への参加の場合、また活動の参加動機やこれまでの人生における経験等が認識の変化や考え方に違いが生じる可能性もある。このためインタビュー調査及び分析において、語られたエピソードに対してこれまでの社会活動の経験や現在の生活、家族や友人などの個人的な要因の影響があったか等を確認しながら行った。以下で、インタビュー調査データの分析結果を示す。

第４項　活動をとおした認識と考え方の変化：「社会活動をとおした学び」

調査協力者の概要

調査協力者の概要を表５－２で示した。

男性は７人、女性は 15 人であった。男女に偏りが見られたのは、本プロジェクトへの参加者に男性が少なく、女性の参加者が多かったためであった。

表５－２　調査協力者の概要

活動団体	施設	ID	性別	年齢	配偶者	最終学歴	参加期間	概要
高齢者大学	施設A	KA1	男	60代	有	大学	２年	平均年齢：平均67.5歳（SD=4.46，最小64歳，最大75歳） 社会参加経験：４人が、定年退職して初めての社会活動への参加。1人がスポーツ教室にも参加。
		KA2	女	70代	無*	大学		
		KA3	男	60代	有	大学		
		KA4	女	60代	無	大学		
	施設B	KB1	男	70代	有	高専	３年	
		KB2	男	60代	有	大学	３年	
絵画教室	施設C	PC1	男	60代	有	大学	12年	平均年齢：平均70.7歳（SD=4.72，最小65歳，最大76歳） 社会参加経験：他の趣味活動参加3人、宗教活動参加一人
		PC2	女	70代	有	短大	17年	
		PC3	女	60代	無*	短大	15年	
		PC4	女	70代	無*	短大	16年	
		PC5	女	70代	有	大学	15年	
		PC6	女	60代	無*	大学	13年	
就労トライアル	施設D	SD1	男	80代	有	大学	３か月	平均年齢：平均69.4歳（SD=5.32，最小60歳，最大80歳） 社会参加経験：1人は定年退職後すぐの参加、他の趣味活動参加は5人、他の就労団体に参加１人
		SD2	男	70代	有	高校		
		SD3	女	60代	有	大学		
		SD4	女	70代	無	高校		
		SD5	女	60代	無	高校		
	施設E	SE1	女	60代	無*	高校		
	施設F	SF1	女	60代	有	高校		
		SF2	女	70代	有	不明		
		SF3	女	70代	有	大学		
		SF4	女	60代	有	短大		

（＊は死別）

活動をとおした認識と考え方の変化

調査協力者から語られた発言について、分析テーマに基づいて分析を行った結果、13[概念]が抽出された。13[概念]を意味内容からまとめた結果、６〈カテゴリー〉が析出され、最終的に２つの【コアカテゴリー】が析出された（表５－３）。

まず、２つの**【コアカテゴリー】**の定義について述べる。

表５－３　活動をとおした認識と考え方の変化　カテゴリー表

【コアカテゴリー】	〈カテゴリー〉	［概念］
【自己に関する認識】(35)	〈 今まで気づかなかったニーズ〉(13)	［現在のニーズ］(6) ①貢献へのニーズ ②興味関心のニーズ ［未来のニーズ］(7)
	〈自分自身の価値〉(12)	［新たな自分の発見］(4) ［自分の成長への気づき］(8)
	〈高齢期の変化に対する捉え方〉(10)	［年齢の受容］(3) ［健康に対する認識の変化］(7)
【環境に関する認識】(49)	〈活動参加の価値〉(15)	［友人・仲間の重要性への気づき］(5) ［関与の重要性への気づき］(10)
	〈高齢者の価値〉(18)	［高齢者の強みへの気づき］(15) ［高齢期に伸びる能力への気づき］(3)
	〈地域と社会に関する情報〉(18)	［活動団体の実情の把握］(7) ［社会に対する新たな視点］(6) ［地域情報の入手］(5)

（注 （ ）内は発言数）

【自己に関する認識】は、自分自身に関する考え方や認識の変化であり、自分自身がこれまで気づいていなかった自分の側面や高齢期になった自分に対する新たな見方や気づきである。

【環境に関する認識】は、活動参加に対する認識の変化であり、高齢者の社会参加に対する価値と捉え方、活動参加によって得られる地域や社会の情報や課題についての認識の変化である。

なお、本分析結果で使用する「環境」とは、調査協力者が参加したグループ活動（高齢者大学、絵画教室、トライアル就労）に関連する学習施設や勤務施設、これらの施設が関わる地域や社会、また活動で出会う仲間等、活動参加で協力者が活動を通して関わる要素を指すものとする。

これらの２つの**【コアカテゴリー】**について、**〈カテゴリー〉**ごとに分析結果を説明する。発言はイタリック文字で示し、〔 〕は方言等の部分の補足、{ } は逐語録からの筆者の補足である。また、発言後部の（ ）は、発言者と発現者における発言番号を示す。

Ⅰ．コアカテゴリー**【自己に関する認識】**

自分自身に関する考え方や認識の変化であり、＜今まで気づかなかったニーズ＞＜自分自身の価値＞＜高齢期の変化に対する捉え方＞の3つのカテゴリーを含む。

① カテゴリー**〈今まで気づかなかったニーズ〉**

活動をしていく中で、参加する前には気づいていなかった他者や社会への貢献、また自分の持っている興味関心に気づいた様子がインタビューの発言から捉えられた。

「*3 年というても、授業数は少ないですから*｛中略｝*もうちょっと絵の授業専門的にやっても良かったかな*（KB2-4)」

「*自分のための家事じゃない、誰かのための家事というのが良い*（SD4-7)」

これらの発言は、参加した活動を通した経験から、満足や不満などの感情を通して、自分ではそれほど意識していなかった①貢献へのニーズと②興味関心のニーズという**［現在のニーズ］**への気づきについての発言と考えられる。

「*続くと思ってなかったけど、自分の中でこれからこれを趣味としていけるのは、楽しみです*（PC1-2)」

「*車いす押していってもね、ありがとういうてずうっと言ってるおばあちゃんもいるし、もう行けへん言うたら、頑固の一徹で*｛中略｝*ああなるほどな、こんな人もいてはるんやなと。そういう頑固なじじいやなしね、やっぱりかわいいおじいちゃんになりたいな*（KB1-14)」

これらの発言は、これまで考えていなかったこれからの人生の楽しみや老後の理想像への気づきという**［未来のニーズ］**への気づきに関する発言と捉えられる。

②カテゴリー**〈自分自身の価値〉**

「*現役で働いていた時は感じなかった、働くってこんなに楽し*〔い〕*んやと初めておもいました*（SD4-2)」

「*私、年寄さんがすきなんだなと*（SF1-2)」

これは、これまで気づいていなかった楽しみや好みに気付いたという［新たな自分の発見］と捉えた。

「{他人の心に構わず入ってくるような} *女性の特殊性、もう本当に嫌やったんやけどね、ちょっとましになった。すごく良かったと思う*（PC1-4)」
「*テレビなんか見てるとすごくより絵の、美術のこととか見てても分かりやすくなった*（PC3-3)」

これは、自分自身がネガティブに感じていたことに対する克服や、自分の知識や能力が伸びたこというような［自分の成長への気づき］に関する言及といえる。

これらの言説は、ポジティブな自己の側面に対する発見や気づきであることから、カテゴリーを**〈自分自身の価値〉**と設定した。

② カテゴリー**〈高齢期の変化に対する捉え方〉**

年齢によって定年退職し、高齢者としての自分を受け入れがたかったというこれまでの捉え方から、活動へ参加していく中で高齢者としての自分を受け入れられるようになったという**［年齢の受容］**が可能となっていた。

「*辞める前が 2 年間、30 代の会社におったでしょう。若者と同じ職場にいたから、で、辞めてこっち*{高齢者大学} *きたら、いきなり、*{平均} *69 歳でしょう。ショックが大きかったね。今考えたら良かったと思うよね。早く慣れて*（KA3-5)」
「*年齢怖かった、はじめ入った時、ほ*〔それ〕*でも、*{活動に参加して} *目標っていうか、こんなんで集まってきてますっていうから、まだしゃべれる*（KA4-7)」

また、活動をはじめるようになって、健康管理への意識が高まり、健康への自信というような**［健康に対する認識の変化］**が得られたことが捉えられた。

「{高齢の入所者と接することで} *健康に気をつけますよね。意識は*{中略} *前より高まった*（SD3-5)」

「{年齢が近い入所者を見て} *健康管理が大事やなと*（SF4-1)」

これらの言説は、高齢期の変化の中で特に注目される側面である年齢や健康に関する変化であることから、**〈高齢期の変化に対する認識の変化〉**と命名した。

Ⅱ.コアカテゴリー**【環境に関する認識】**

活動参加や活動を取り巻く状況に対する認識の変化であり、**＜活動参加の価値＞＜高齢者の価値＞＜地域と社会に関する情報＞**の 3 つのカテゴリーを含む。

①カテゴリー**〈活動参加の価値〉**

活動におけるモチベーションや活動参加の意義を高めるために、仲間の存在が欠かせないということに気付いたという**［友人・仲間の重要性への気づき］**に関する言及があった。

「*モチベーションが保てたのは*{中略} *3 年間同じ部屋で*（中略）*5 人、10 人のチームごとに分かれて*{中略} *苦労を共にしてきた*（KB1-4)」

「*人との関わりもできるし、それで頭の体操にもなるし*（PC2-5)」

また、主体性や積極性をもった活動への関わり方が、活動の意義を高めるということに気付いたという**［関与の重要性への気づき］**に関する発言も得られた。

「{座学は} *面白いなだけでおわっちゃう。自分がそこに参画しないとね*（KA3-1)」

「*現場に入って初めてわかるっていうか、勉強させてもらうことが多い*（SD1-11)」

友人や仲間、活動への関与度の大切さへの気づきは、活動への参加が仲間や関与度によって、さらに意味のあるものになるという価値の変化であると捉えられることから、**〈活動参加の価値〉**と設定した。

②カテゴリー**〈高齢者の価値〉**

高齢者という存在がグループへ参加する際にマイナスではなく、むしろプラスになるということに気付いたという**［高齢者の強みへの気づき］**や、加齢にともなって伸び続けている能力の認知という**［高齢期に伸びる能力への気づき］**に関する言及があった。

「*若い時は、時間にも振り回されるし、仕事にも振り回される*｛中略｝*70歳になると、一歩も二歩も引いて自分も見られるし、世の中も見られるしってなるから、そういうのが、これから高齢者が働くのに良い面じゃないかと思います*（SD4-3)」

「｛高齢者施設の｝*入所者さんから、私たちが子供の年代だから、私たちと話したがる*（SE1-3)」

「｛高齢期は｝*年々物を見たら深く、深く見られる。やっぱり、年とともにね。いろんなものが*（PC4-4)」

これらの発言の特徴的な点は、自分が高齢期に得た変化を、一般的な高齢者の特徴として捉え、客観性のある言葉で語ったことである。これらの語りからは、活動の参加において、高齢者という存在にプラスの側面があることへの客観的な気づきと捉えられることから、**〈高齢者の価値〉**と設定した。

③カテゴリー**〈地域と社会に関する情報〉**

活動に参加することで、活動団体や地域に関するこれまで知らなかった実態が分かったという**［活動団体の実情の把握］**や、これまで意識していなかったことに対して社会的関心が芽生えたという**［社会に対する新たな視点］**が得られたことが語られた。

「*いろんなノウハウをね、グループ活動なんか教えてもらったんだけど、なかなかそれを実践するところが*｛自分の地域に｝*ないわけ*（KA2-2)」

「*私の母が入所して*〔い〕*て、でも外部からだったし、実際一緒にするようになって、ああ大変だなと*（SF2-1)」

「*今までは*｛高齢者施設での虐待について｝*新聞読んだりテレビみたり、*

そうやねんなと思うだけ。やる人は悪いことやけど、なんか落ち度が他にあったんかなとか思うようになりましたね（SD1-9)」

他に、これまで自分一人では収集できていなかった地域の情報が、活動への参加がきっかけで得られたという**［地域情報の入手］**に関する発言があった。

「{やりたいと思ってた} *横笛教室を教えてもらった*（KB2-6)」
「*教会のバザーを教えてもらった*（PC2-6)」

これらの言説は、これまで自分が知っていた団体や地域、社会の認識に、活動参加によって新たな情報が追加されたり、新たな認識が得られたりしたことがうかがえる。よって**〈地域と社会に関する情報の獲得〉**と名付けた。

社会活動をとおして、自己と自分の周りの環境に関するつながりからの学びが得られることが明らかになった。しかしこれらは、高齢者大学、絵画教室、生きがい就労、3 種類の活動をまとめて行った分析であった。このためどの活動でも同様の効果が得られるかは検討できないため、次項で3つの活動のつながりからの学びの比較検討を行った。

第５項　社会活動の種類による学びの違い

上記分析結果に基づき、「活動をとおした学び」が、活動内容で違いがあるかを検討するため、[概念]の発言数を比較した（表５－４)。

表５－４　活動別発言数

	高齢者大学 *n*=6	絵画教室 *n*=6	トライアル就労 *n*=10
【自己に関する認識】	**9**	**11**	**15**
〈今まで気づかなかったニーズ〉	6	3	4
［現在のニーズ］	4	-	2
［未来のニーズ］	2	3	2
〈自分自身の価値〉	-	8	4
［新たな自分の発見］	-	1	3
［自分の成長への気づき］	-	7	1
〈高齢期の変化に対する捉え方〉	3	-	7
［年齢の受容］	3	-	-
［健康に対する認識の変化］	-	-	7
【環境に関する認識】	**10**	**15**	**24**
〈活動参加の価値〉	7	3	5
［友人・仲間の重要性への気づき］	1	2	2
［関与の重要性への気づき］	6	1	3
〈高齢者の価値〉	-	8	10
［高齢者の強みへの気づき］	-	5	10
［高齢期に伸びる能力への気づき］	-	3	-
〈地域と社会に関する情報〉	3	4	11
［活動団体の実情の把握］	1	-	6
［社会に対する新たな視点］	-	1	5
［地域情報の入手］	2	3	-

（注「-」は、発言がなかったカテゴリーと概念）

すべての活動団体において言及が見られたカテゴリーは、〈活動参加の価値〉であった。その他のカテゴリーについては、３つの活動団体により発言に偏りが見られた。

まず、**高齢者大学**で発言数が多かった概念は、［現在のニーズ］、［年齢の受容］、［関与の重要性への気づき］の３つであった。特に［年齢の受容］は、高齢者大学でのみ発言があった。

次に、**絵画教室**は、[自分の成長への気づき]と[高齢期に伸びる能力への気づき]に関する発言が、他の活動団体に比べて多かった。[自分の成長への気づき]は、他の活動団体では発言が少なかった概念であり、絵画教室の中では他の概念に比べても一番発言が多く得られた概念であった。また、[高齢期に伸びる能力への気づき]については、絵画教室のみで発言があった。

トライアル就労で特徴的に発言が多かったのは、[健康に対する認識の変化]、[高齢者の強みへの気づき]であった。中でも[健康に対する認識の変化]は、トライアル就労のみで発言が得られた概念であった。また[高齢者の強みへの気づき]は、トライアル就労の中で他の概念と比較しても最も発言が多かった。

最後に、活動によっては言及がなかった〈カテゴリー〉があった。高齢者大学では〈自分自身の価値〉と〈高齢者の価値〉に関する発言がなかった。どちらも絵画教室とトライアル就労では発言があった。また絵画教室では、〈高齢期の変化に対する捉え方〉に関する発言がなかった。

第6項　「社会活動をとおした学び」からみた社会活動の効果

本節、第4項で示した「活動をとおした学び」は、健康や友人・仲間に関して効果が得られたが、これらはこれまで高齢者の社会参加の活動効果として捉えられてきた（片桐，2012）。しかし学びという視点を取り入れると、これまでの研究で示された活動効果は、社会参加への主体的な関与によって得られた効果である可能性が見いだされた。「健康になった」という活動効果は、つながりからの学びを取り入れると健康に対する認識の変化と捉えられ、「友人ができた」という活動効果は、学びを取り入れると仲間の重要性への気づきと捉えられた。学びの検討により、先行研究において活動をとおした効果として考えられてきたものは、単に社会活動に参加することで健康になったというのではなく、社会活動をとおして得た健康に対する認識の変化という学びによるもの、同様に、「友人ができた」という活動効果は、活動へ参加することでただ友人ができたのではなく、仲間の重要性への気づきという学び経ている可能性が示唆された。

インタビュー調査では、学びが社会活動への主体的な態度の影響を受けていることが示唆される発言があった。つまり、調査協力者が活動へ主体的に関与することで、自分や他者、社会について考えたり感じたりした様子が語られ、さらに

考えたり感じたりしたことが、認識や考え方を変化させるきっかけになったエピソードが語られた。これらのことから、主体的な活動への関与が、学びに影響する可能性、つまり提供されたプログラム等に消費的に参加するのではなく、主体的に関与することによって学びが促進される可能性が示唆された。

社会活動における人とのつながり

「つながりからの学び」に関して、社会活動における人とのつながりには、簡単な会話をする程度の皮相な関係と心理的つながりがあるという関係の２つの種類があることが示された。トライアル就労では、一人での配属であったため仕事をとおした仲間を得る機会がなかった。つまりトライアル就労では、挨拶するだけ、あるいは少し話すだけ関係のみであったといえる。一方で高齢者大学ではグループで１つの目標に向かう共同作業、絵画教室では数年以上の長期間の参加によって、参加者が同じ立場同士で心理的なつながりを持つ関係が生まれていた。本研究では、トライアル就労におけるあいさつ程度の関係を「弱いつながり」、対して心理的つながりのある関係を「強いつながり」と呼ぶこととする。また調査データにおいて、「強いつながり」でも「弱いつながり」においてもは、カテゴリー〈活動参加の価値〉の概念［友人・仲間の重要性への気づき］に関する学びがあったことが確認できた。またどちらも、継続へのモチベーションや活動参加の楽しみにつながっていたことが見いだされた。

第２節　質的研究による学びの変化【研究１－２】

第２章、第２節で述べたように、Chen（2016）は、ボランティアをとおした学びの研究では、学びの５つの側面には１つの側面が活動における学びが生じることにより、他の側面に影響し、さらに学びが生じることでまた他の側面を影響するというように、学びの側面は互いに関連することを示した。これは、活動継続によって学びも生じ続けた際に、学びが次の学びを生じさせる可能性を示唆した。本節では、活動を継続することによって新たな学びをもたらすかについて検討した。

第１項　活動継続における「社会活動をとおした学び」の検討

【研究１－２】では、活動を継続における「社会活動をとおした学び」を検討

することを目的とした。

第 2 項　方法

【研究１－１】で使用した《調査１》の高齢者大学、《調査２》の絵画教室、《調査３》のトライアル就労のインタビュー調査のデータを使用した。発言者ごとに認識の変化を時系列にまとめ、変化した認識が後に新たな認識につながったエピソードや発言を抜き出し認識のつながりについてまとめた。

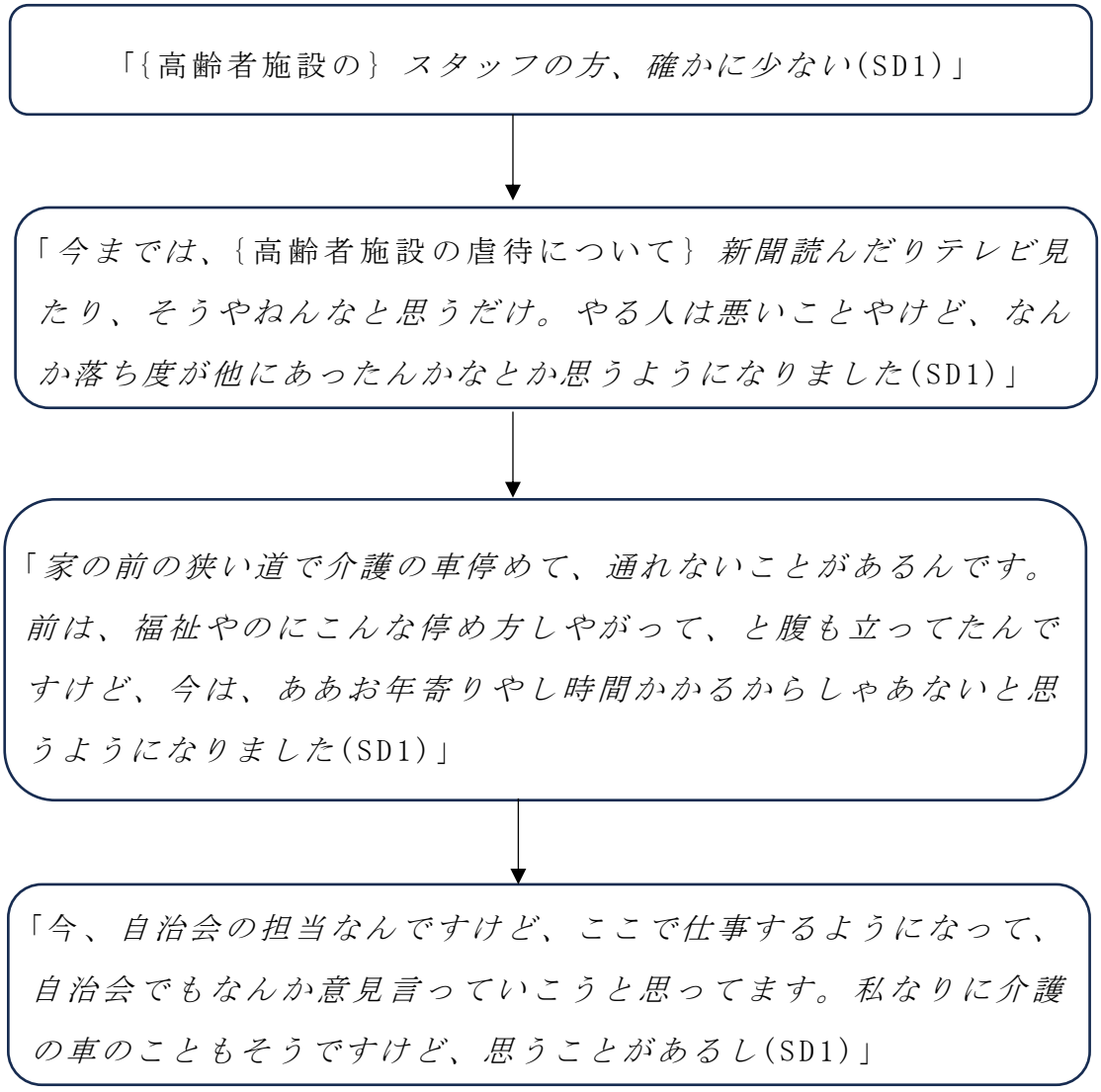
第３項　活動継続がもたらす学びの深化

インタビューデータの分析から、活動を継続することによって一つの学びが別の学びを促進する学びのプロセスが捉えられた。典型的な例を以下で示す。なお文中の「」はインタビューでの発言を示す。

SD1 さんは、介護施設での生きがい就労の参加者であった。仕事を始めて、介護施設の人材不足という課題を目の当たりにすることによって、これまであまり興味をもっていなかった介護施設が抱える人材不足の問題に関する学びを得た。この学びは、その後介護施設での高齢者虐待のニュースを新聞で読んだ際、虐待した人が働いていた介護施設に何か問題があるのではないかと、事件の背後にある介護施設側の問題の可能性というように介護施設全体が抱える問題を意識するようになったことが語られた。さらに介護現場が抱える介護の大変さ、という業界の認識の変化は、その後地域の課題に関する認識が変化したエピソードが捉えられた。SD１さんの地域では、介護の送迎マイクロバスが住宅街の交通の妨げになっていることが地域の課題になっていた。この課題に対して、これまでは福祉が社会の邪魔をしていることに腹を立てていたが、介護の実情を理解することで「お年寄りやし時間がかかるからしゃあない」というように容認すべきことへと認識が変化したことが語られた。さらに、その後自治会の集まりにおいても、介護者の問題に関して自分の考えを述べようと考えていることが語られ、地域の課題に主体的に関与しようとする態度の変化をもたらしたことが明らかになった。

このようにSD１さんのケースでは、自分の勤める介護施設の小さい範囲の課題に関する学びから、地域や社会というより広い世界の認識の変化へと広がっていったという様子が読みとれる好例である（図５－１）。

図５－１　活動継続による学びの広がり



他のエピソードでは、KA１さんは、高齢者大学で同じ班になった年上の人から、パソコンを教えてと言われたことをきっかけに、「何ができるんや」といった自分の認識で悩んでいたが、自分が他の人よりパソコンの知識があることに気づき、「俺、パソコンできるんや」と自分に関する認識が変化したというエピソードが語られた。

KA１さんは理系の大学院の出身で、定年まで勤めた会社は、パソコンを使うことが仕事で、会社の仲間は皆パソコンの知識があったため、パソコンが得意だったと思ったことはなかった。このため、ボランティアといわれても、「何したら良いか、なにがいったいできるのか分らんかった。何もできない」と自分のこれまでの経験のなさにショックを受けた様子を語った。しかし、高齢者大学のカリキュラムの一環としてパソコン教室のボランティアを行うようになり、パソコンを全く知らない高齢者がとても多いことに驚き、「パソコンのこと分からないから、いっぱいオプション申し込まされた。これはあかんと思いましたね」と、ボランティアで出会った同年代の高齢者が不必要なインターネットのオプションを契約させられていることに気づき、高齢者世帯がもつ課題への認識が深まったことを語った。その後、KA1 さんは高齢者世帯の課題への認識から、居住地域でもパソコン教室のボランティアを始めるようになった。ボランティアで自分のパソコンの知識が誰かの「役に立って満足」という、役にたってうれしかったという自分の気持ちから、今まで気づいていなかった貢献へのニーズという新しい自分の発見につながったことが語られた。この KA1 さんのエピソードからは、自己の認識がボランティアをとおして深化していったと捉えられる。

これらの例は、一つの学びが行動を変化させ、行動が新たな自己や社会に対する認識の変化につながり、変化した新たな認識は、さらに次の行動を引き起こし、それがさらに次の認識の変化をもたらすというように、認識の広がりが生じたものと考えらえる。

第３節　【研究１】のまとめ

【研究１－１】では、高齢者大学と絵画教室、トライアル就労の活動の３種を取り上げ、高齢者の活動を通した認識や考え方の変化から、「社会活動をとおした学び」について検討した。「活動をとおした学び」は、高齢者としての自分やこれからのニーズ、つまりこれからの自分の人生の目標というような自己に関する学びと、友人に関する価値や客観的な視点からの高齢者という存在、参加する活動に関する情報や課題等、自己以外に関する学びが見いだされた。

さらに活動団体での比較では、活動の種類によって学びに違いがあることを確認した。学びには、活動目的と活動内容、活動継続の期間、さらに活動をとおし

た人とのつながりが関連することが明らかになった。

次に、発言が得られなかった**〈カテゴリー〉**について考察する。高齢者大学の参加者において、**〈自分自身の価値〉**に関する言及が得られなかった。これについては、取り組みに対する積極的な関与が関連している可能性が考えらえる。高齢者大学の参加者は、活動において与えられた課題をこなすことが中心になっていたのに対し、絵画教室の参加者は自分の作品に対して主体的に課題を探し取り組んでおり、トライアル就労は、与えられた仕事以外に自分ができる仕事を積極的に見つけていたことに言及する参加者が多かった。このことから主体的な関与が自分自身の価値への学びを促進する可能性が示唆される。

〈高齢者の価値〉についても高齢者大学のみ言及がなかった。これは、多世代との交流が関連している可能性が考えられる。絵画教室とトライアル就労参加者は、活動をとおして交流する若い世代と自分を比較することで、**［高齢者の強みへの気づき］**や**［高齢期に伸びる能力への気づき］**という学びにつながった様子が語られた。しかし高齢者大学は同世代との交流が中心の環境であったため、若い世代と自分を比較する機会が少ないこのことから、若い世代との交流は、高齢者である自分自身の価値の変化に影響する学びにつながる可能性が考えられる。それは、「アイデンティティ」の発達にもつながる可能性が示唆される。

〈高齢期の変化に対する捉え方〉については、絵画教室の参加者からの言及がなかった。これは絵画教室が、自分より上の世代と交流する機会が少なかったことが関連している可能性が考えられる。絵画教室の協力者の活動環境は、協力者が最年長であることが多く、下の世代との交流の方が多かった。高齢者大学では、60 代の参加者が 70 代のクラスメートと交流することで**［年齢の受容］**が可能になったエピソードが語られ、トライアル就労では介護施設の入所者、つまり自分より上の世代との交流から**［健康に対する認識の変化］**を得たことが語られた。このことから、高齢者としての自己の受容という高齢者にとって重要な学びは上の世代との交流がきっかけになる可能性が示唆される。

「人とのつながり」という視点でこれらをまとめると、若い世代との交流は高齢者の価値の変化、上の世代との交流は高齢者である自分の受容につながるといえる。また【研究１－１】の考察でも触れたが、強いつながりは活動継続のモチベーション、弱いつながりは活動の楽しみにつながることも見いだされたことか

ら、活動をとおしたつながりは、どのような世代との交流があるか、どのような人間関係があるのかなどによって得られる効果に違いがあることも明らかになった。

【研究１－２】では、個人が活動を通して得た学びが、参加した団体が持つ課題や問題に関する学びを経て、社会全体の課題に関する学びへ広がっていった様子が見られた。つまりいったん学びが生じると、活動を継続することにより別の学びに広がることが明らかになった。【研究１－１】で捉えられた学びは、活動継続によってより広い世界への認識の変化が期待できることが考えられ、社会にもたらす効果という視点からも活動の継続の意義が見いだされたといえる。

しかし社会へもたらす学びが、どの活動に参加しても生じるとは限らないことも明らかになった。高齢者大学の参加者と生きがい就労参加者の発言からは、「貢献へのニーズ」に関する発言があった。高齢者大学はカリキュラムにボランティアへの参加が組み込まれており、生きがい就労は人材不足という社会的課題を抱えている環境における就労であった。しかし、絵画教室の参加者からは、「貢献へのニーズ」に関する発言がなかった。絵画教室では社会的課題について見聞きする機会が少なかったと考えらえることから、貢献のニーズに関連する学びが生じなかった可能性が考えられる。このことから、「社会貢献意識」の発達には、社会的課題に関係する経験の必要性が示唆される。

図５－２　【研究１】の結果

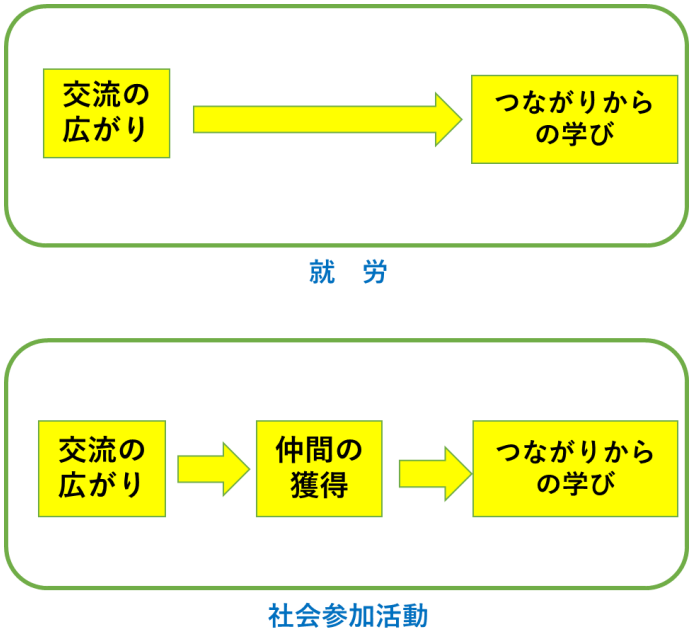


図５－２で、【研究１－１】と【研究１－２】の結果を示した。本章、第１節、第６項で述べたように、社会活動をとおして得られる「人とのつながり」は、軽く話すだけの弱いつながりと、仲間という強いつながりの２種類が確認された。

「人とのつながり」について、軽く話すだけの弱いつながりは多様な人との交流が広がっていくつながりであることから「交流の広がり」と名付け、時間の長さや蜜な関係を築いて得られる強いつながりを「仲間の獲得」とした。

トライアル就労では、「交流の広がり」のみであったが、学びが生じていたことが確認された（図５－２、上図）。また高齢者大学と絵画教室の社会参加活動では、活動をとおして「交流の広がり」が得られる中で、活動における「仲間を獲得」していた。高齢者大学は仲間と一緒に難しい課題を超えた経験、絵画教室は気の知れた仲間との関係をきっかけとした学びに関する発言の方が、弱いつながりをきっかけにした学びに関する発言より多かった。このことから、「弱いつながり」より「仲間の獲得」がより学びを促進する可能性が見いだされた（図５－２、下図）。

第６章　社会活動をとおした高齢者の発達の検討

前章では、高齢者大学、絵画教室、生きがい就労をとりあげ、社会活動をとおした「人とのつながり」は、弱いつながりである「交流の広がり」と強いつながりである「仲間の獲得」の２種類あること、それらどちらも学びのきっかけになることが明らかになった。

本章では、社会活動が発達をもたらすかについて、質的研究と量的研究から検討する。

第１節では、【研究２】で兵庫県宝塚市の介護施設における生きがい就労の実践を取り上げ、３か月のパネル調査とインタビュー調査から介護施設での生きがい就労を通した参加者の変化を検討する。

第２節では、生きがい就労以外の就労も含めて社会活動と発達の関係について、生きがい就労の調査協力施設と同じ地域である兵庫県宝塚市で実施した社会調査から検討する【研究３】。

第１節　３か月のトライアル就労をとおした個人の変化：縦断調査【研究２】

第１項　目的

介護施設における生きがい就労を通した３か月の効果を検討することを目的とした。

第２項　調査方法

調査概要

本研究は、兵庫県宝塚市が主催する「宝塚市健康・生きがい就労トライアル（以下トライアル就労）」事業を研究対象とした。本事業は、宝塚市エイジフレンドリーシティー事業の一つとして、市内の介護施設における人材不足という課題解決のため、自治体と市内の介護施設が協力して行った事業であり、おおむね60 歳以上の高齢者を対象に、３か月限定で地域の介護施設での就労機会を提供するプログラムであった。参加者は勤務施設との間に３か月の雇用契約を結び、３

か月のトライアル就労終了後に本人が希望すれば施設と面接を経て１年の本契約を結ぶことできる。参加者の募集は宝塚市が広報誌やホームページ等を通して行った。

賃金と勤務条件はそれぞれの施設の規則に準じ、賃金は 900 円（2019 年の最低賃金）から 930 円の間、勤務条件は週２、３回、１回につき２、３時間の範囲であった。勤務先は参加者の希望に応じて、施設と参加者との面談のうえで決定された。仕事内容は、介護資格がなくてもできる介護助手で、主にホールの清掃、シーツ交換、食事の配膳・下膳、食器洗い等の生活介助であった。各施設には、１人ないし２人で配属された。参加者の中には、介護資格のある参加者もいたが、トライアル就労では介護資格があっても無資格者と同じ介護助手の業務を行った。

トライアル就労事業は、2019 年 5 月から 7 月に第１期、2019 年９月から 11 月に第２期が実施された。事業へ参加した施設は、第１期で１施設（高齢者複合施設)、第２期で９施設（高齢者複合施設４施設、 介護老人保健施設２施設、介護付き有料老人ホーム１施設、介護老人福祉施設２施設）であった。第１期に参加した１施設は、第２期にも参加していた。なお高齢者複合施設とは、施設内に特別養護老人ホーム、グループホーム、ショートステイ、介護付き有料老人ホーム、小規模多機能型居宅介護施設、介護老人保健施設、サービス付き高齢者向け住宅のうち、同じ建物内に２種類以上の施設やサービスがあることを指す。

本事業への 60 歳以上の全参加者 67 人（第 1 期 17 人、第 2 期 50 人）のうち、３か月後本契約へ継続した人数は 53 人（第１期 14 人、第２期 39 人）で継続率は 79.1％であった。

調査協力施設

質問紙調査は、第１期、第２期のトライアル就労に参加した全９施設、インタビュー調査は、第１期は 1 施設（Ａ施設)、第２期は２施設（Ｆ施設、Ｈ施設）に対して行った。

調査対象施設と、第１期、第２期の参加者人数を表６－１に示した。なお、施設Ａにおける参加者 17 人は第１期か第２期のどちらかに参加していた。

表６－１　調査協力施設と施設ごとの参加人数と調査協力者数

施設	種類	全参加人数		質問紙調査協力者数		インタビュー調査協力者数	
		第１期	第２期	第１期	第２期	第１期	第２期
施設A	高齢者複合施設	17	22	11	18	5	―
施設B		―	4	―	3	―	―
施設C		―	2	―	2	―	―
施設D		―	2	―	1	―	―
施設E	介護付き有料老人ホーム	―	5	―	5	―	―
施設F	介護老人保健施設	―	5	―	3	―	1
施設G		―	4	―	4	―	4
施設H	介護老人福祉施設	―	4	―	4	―	―
施設I		―	2	―	1	―	―
	合計	17	50	11	41	5	5

調査協力者

１）質問紙調査

トライアル就労に参加した 60 歳代から 80 歳代までの参加者全員、第１期 17 人、第２期 50 人、合計 67 人を対象とした。そのうち開始時と終了時の両方の質問紙に回答した第１期 11 人、第２期 41 人の 52 人（男性９人、女性 43 人、平均年齢 69.9 歳、標準偏差 4.95、回収率 77.6％）が調査協力者となった。

自由記述欄については、対象者の 52 人のうち、開始時と終了時の両方の自由記述欄に記入した 25 人（第１期 11 人中８人、第２期 41 人中 17 人）を対象とした。

２）インタビュー調査

トライアル就労に参加した９施設のうち、調査協力を承諾した３施設からインタビュー調査の調査協力者の選出を行った。調査協力者の条件を、60 歳以上で定年退職や子育てが終了した男女とした。

調査協力者の選出方法については、施設ごとに異なった。施設ＡとＦは、単独で仕事をする参加者とペアで仕事をする参加者がいたことから、単独で仕事をする人とペアで仕事をする人それぞれ２～３人の選出を施設担当者に依頼した。施設Ｇは単独配属のみであったため、２～３人の選出を施設担当者に依頼した。各施設で選出された対象者のうち、調査協力への承諾が得られた 10 人（男性２人、女

性８人）を調査対象とした。

調査時期

１）質問紙調査

質問紙調査は、第１期は 2019 年５月と７月、第２期は 2019 年９月と 11 月に実施した。開始時の質問紙調査は、勤務開始後１週間で配布回収を行い、終了時は、勤務終了前２週間で配布回収を行った。

２）インタビュー調査

第１期は 2019 年７月、第２期は 2020 年１月に実施した。第１期のインタビューは勤務終了１週間前、第２期は勤務終了後１か月後に行った。

調査内容

１）質問紙調査

質問紙調査の内容は、性別、年齢、婚姻状況、学歴等の基本的属性、抑うつ、生活の充実感、主観的健康、友人関係に関する満足度、貢献に関する満足度、「世代性」についてであった（Appendix ３、Appendix ４）。

抑うつについては、日本語版K6（古川他，2003；Kessler et al.，2002）の尺度を使用した。過去30日間に、「神経過敏に感じましたか」「絶望的だと感じましたか」「そわそわ、落ち着かなく感じましたか」「気分が沈み込んで、何がおこっても気が晴れないように感じましたか」「何をするのも骨折りだと感じましたか」「自分は価値のない人間だと感じましたか」の6項目について、「１．全く感じない」「２．少しだけ」「３．ときどき」「４．たいてい」「５．いつも」の5点尺度で回答を求めた。6項目の合計得点を加算して１つの尺度とした。

主観的健康は過去1か月の健康状態について「１．最高に良い」から「６．ぜんぜん良くない」までの6点尺度で回答を求め、値が大きいほど健康状態が良い状態になるように尺度化した。

友人関係の満足度と貢献に関する満足度は、「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度（岡本，2010)」の４つの概念、「友人」、「貢献」、「学習」、「健康体力」のうち「友人」と「貢献」に関連する項目を使用した。

友人関係に関する満足について、「友人とのつきあいに満足している」「一緒に

何らかの活動をして楽しめるような友人がいる」「友人と楽しい時間を過ごせている」の３項目に「１．とてもよくあてはまる」から「５．まったくあてはまらない」までの５点尺度で問うた。これら３項目を、値が大きいほど「友人関係に関する満足度」が高くなるように尺度化した。α係数は .83と十分高かったため、加算して１つの尺度として用いた。

貢献に関する満足度に関しては、「何らかのグループ・組織・団体の役に立てたと思うことがある」「自分が住んでいる地域の役に立てたと思うことがある」「自分なりに、困っている人の手助けをしている」「自分なりに、社会の役にたつようなことをしている」の４項目を「１．とてもよくあてはまる」から「５．まったくあてはまらない」までの５点尺度で問うた。これら４項目を、値が大きいほど「貢献に関する満足度」が高くなるように著者が尺度化した。α係数は .75と十分高かったため、4項目を加算して用いた。

生活の充実感については、近藤・鎌田（2003）の「高齢者向け生きがい感スケール（K-I式)」の４つの概念、「生活充実感」「自己実現と意欲」「生きる意欲」「存在感」から、青木（2009）の再検証によっても妥当性が確認された「生活充実感」４項目、「なにもかもむなしいと思うことがある（逆転項目)」「何のために生きているのか分からないと思うことがある（逆転項目)」「毎日何となく惰性で過ごしている（逆転項目)」「今日はなにをして過ごそうかと困ることがある（逆転項目)」を使用した。「生活充実感」以外の３つの概念については、家庭や家族等、仕事に関連のない項目を含む等、生きがい就労による変化の検討には適さないと考え、「生活充実感」のみを取り上げた。上記４項目について、「１．とてもあてはまる」から「４．あてはまらない」までの４件尺度で回答を求め、著者によって値が大きいほど「生活の充実感」が高くなるように尺度化した。α係数は .76とであったため、加算して１つの尺度として用いた。

「世代性」の測定に使用した尺度は、McAdams & de St. Aubin（1992）のLGS の 20 項目から、LGS が示した５つの因子、「遺産」「知識伝達」「世話」「貢献」「創造性」からそれぞれ1項目ずつを取り出した5項目からなる田渕ほか（2012）の「短縮版 Generativity 尺度」の、「私が死んでも、人は私のことを覚えていてくれるだろう」「私が人のためにしてきたことは、後世にも残ると思う」「自分の経験や知識を人に伝えるようにしている」「何かに向かって前進していると感じる」

「無理のない範囲で、募金をしたい」の５項目を使用し、「１．まったくあてはまらない」から「５．非常によくあてはまる」までの５点尺度で回答を求めた。これら５項目を、値が大きいほど「世代性」の概念、「次世代の確立と導きへの関心」が高くなるよう尺度化した。α係数は .77 と十分高かったため、加算し１つの尺度として用いた。なお、「世代性」尺度は、第２期の調査の質問紙に含めたため、「世代性」に関する分析は、第２期の調査協力者 41 名のみが分析対象者となった。

また研究者が設定した以外の参加効果を発見する目的で、開始時の質問紙の最後に、「その他、「健康・生きがい就労トライアル」へ期待すること等ありましたら、なんでもお聞かせください」、終了時には「その他、「健康・生きがい就労トライアル」に参加した感想等、なんでもお聞かせ下さい」と自由記述の設問を付した。

２）インタビュー調査

インタビュー調査は半構造化で行った。質問内容は質問紙調査の自由記述の結果をもとに以下の３点について質問した。①トライアル就労への応募の背景に関する質問として、トライアル就労への応募のきっかけ、動機、期待、②３か月の変化に関して、考え方、捉え方、行動等、日常生活での変化、③介護施設の生きがい就労に関する質問として、仕事に関して思うことや仕事中に感じたことについてであった（Appendix ２）。

調査実施方法

１）質問紙調査

質問紙調査は、施設担当者にナンバリング済みの調査用紙を預け、各調査対象者の勤務初日と３か月後の最終日が来る２週間前の勤務日に質問紙を配布するよう伝達した。調査対象者は自宅で質問紙に回答後、封をした封筒に入れて勤務日に提出した。パネル調査であるため、調査対象者にはＩＤナンバーを振り、施設担当者のみナンバーと氏名を把握していた。

２）インタビュー調査

調査協力者の仕事終了後に、施設の一部屋を借りて行った。調査はすべて、著者が１人で行った。場所と協力者の時間の制約があったため、協力者１人の個別インタビュー、協力者２人または４人でのグループインタビューのいずれかでイン

タビュー調査を実施した。インタビュー時間は 47 分から 97 分（平均 66.8 分）であった。

倫理的配慮については、今回の調査が勤務評価に影響しないこと、個人が特定される内容は公開しないこと等の説明を紙面と口頭で行い、調査の承諾を書面で得た。

なお、本調査は神戸大学大学院人間発達環境学研究科の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

第３項　分析方法

１）質問紙調査

調査協力者の３か月の変化を検討するために、「抑うつ」、「主観的健康」、「友人関係に関する満足度」、「貢献に関する満足度」、「生活の充実感」、「世代性」に関して、それぞれ開始時と３か月後の終了時の平均値の差について対応のある t 検定を行った。また自由記述については、佐藤（2008）の『質的データ分析法』[24)]を参考に、開始時と終了時の自由記述欄のテキストデータを記述内容に従ってコーディングした。内容が類似したコードをカテゴリーに分類し、コードとカテゴリーごとに記述数を算出した。次に、３か月の変化について、開始時の記述内容の特徴と終了時の記述内容の特徴から検討した。

２）インタビュー調査

インタビューデータの分析についてもテープ起こしをしてデータ化した。自由記述欄の分析ど同様に、コーディング及びカテゴリーを析出し、コードとカテゴリーごとの発言数を算出した。

なお、質問紙調査の自由記述とインタビュー調査の分析において、コードとカテゴリーの抽出について著者が提案し、社会心理と老年学の専門家２人、大学院生５人での検討を経て導出した。

第４項　量的な調査からみた３か月の変化

１．質問紙調査協力者の概要

調査協力者の基本的属性を表６－２に示した。

男女比では、第１期、第２期とも女性の方が多く、年齢は第１期、第２期とも

70 歳から 74 歳が一番多かった。就業状況については、トライアル就労開始時に他の仕事に就いていた人は９人で、全てパートタイムの仕事であった。

表６－２　質問紙調査協力者の基本的属性

（n=52）

		第１期		第２期		合計	
		n	%	n	%	n	%
性別							
	男性	2	18.2	7	17.1	9	17.3
	女性	9	81.8	34	82.9	43	82.7
就業の有無							
	無職	6	54.6	32	78.1	38	73.0
	有職	4	36.4	5	12.2	9	17.3
	無回答	1	9.1	4	9.8	5	9.6
婚姻状況							
	未婚	1	9.1	2	4.9	3	5.8
	配偶者有	5	45.5	24	58.5	29	55.8
	配偶者無（離婚・死別）	5	45.5	15	36.6	20	38.5
年　代							
	60-64	3	27.3	5	12.1	8	15.4
	65-69	1	9.1	14	34.3	15	28.8
	70-74	4	36.3	16	39.0	20	38.5
	75-79	2	18.2	4	9.7	6	11.5
	80以上	1	9.1	1	2.4	2	3.8
	無回答	0	0.0	1	2.4	1	1.9
学歴							
	中学・高校卒	6	54.5	23	56.1	29	55.8
	高専・短大卒	2	18.2	9	22.0	11	21.2
	大学・大学院卒	3	27.3	8	19.5	11	21.2
	無回答	0	0.0	1	2.4	1	1.9

２．トライアル就労の心理的効果

主観的健康、抑うつ、生活の充実感、貢献に関する満足度、友人に関する満足度、「世代性」について、トライアル就労の開始時と３か月後の終了時の得点について表６－３に示した。

就労開始時と終了時の平均値の差を検討した結果、主観的健康と抑うつは有意な差はなかった。生活の充実感については、やや得点が高まった（t(44) = −1.84、 p < .10)。貢献に関する満足度は、開始時に比べ有意に高まった（t(46)

= −2.17、 $p < .05$)。友人に関する満足度については、有意な差はなく、「世代性」は、終了時の得点が有意に高くなっていた（$t(37) = -2.06$、 $p < .05$)。

表６－３　主観的健康，抑うつ，生活充実感，貢献に関する満足度，友人に関する満足度，「世代性」の開始時と終了の平均得点

		開始時	終了時		
	n	平均得点(標準偏差)	平均得点(標準偏差)	*t* 値	
主観的健康 〈1 点- 6 点〉	48	3.94 (.59)	3.96 (.60)	- .21	*n.s*
抑うつ〈6点-30点〉	48	8.42 (3.25)	9.02 (3.03)	-1.56	*n.s*
生活の充実感〈4 点-16点〉	45	12.51 (2.48)	13.07 (2.09)	-1.84	†
貢献に関する満足度〈4 点-20点〉	47	12.41 (3.11)	13.10 (2.88)	-2.17	*
友人に関する満足度〈3 点-15点〉	48	11.73 (2.61)	11.64 (2.32)	.54	*n.s*
世代性〈5 点-25点〉	38	15.55 (3.60)	16.42 (3.40)	-2.06	*

$^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

３．開始時のトライアル就労への期待に関する自由記述の特徴

生きがい就労への期待に関する自由記述を分析した結果、【事業の評価】、【就労機会への感謝】、【参加に対する期待】の３つのカテゴリーが析出された（表６－４)。

表６－４　トライアル就労への期待に関する自由記述の内容（開始時）

【カテゴリー】（記述数）	［コード］（記述数）	記述例
【事業の評価】（9）	［企画・内容への評価］（5）	・今回の就労トライアルは年齢のみで見ていない所が大変良い ・内容、規模等、今の私にとって、格好の企画となっており、躊躇なく飛びついた
	［職種の拡大への要望］（4）	・多業種に広がっていけば男性の参加者も増えるのでは ・他の色々な分野でもこのような取り組みがあってもいいな
【就労機会への感謝】（7）	［就労機会への感謝］（7）	・私に合う仕事が与えられたことに感謝している。 ・働く場を作って下さりありがとうございます。仕事さがしの際年齢で不利になる事多く、何か割り切れない思いありました
【参加に対する期待】（7）	［貢献］（2）	・私の時間を何かお役に立てる事に使える機会がありますよう期待します。
	［人との交流］（2）	・トライアルで出あいがあるかなと期待します。
	［生きがい創出］（1）	・生きがいを見つけたい
	［学び］（1）	・自分の必要とする知識が得られるのではないかと思い今回のトライアル就労に応募した
	［責任の全う］（1）	・迷惑を掛けず仕事するので精一杯

【事業の評価】では、「概ね 60 歳から 80 歳」、２時間程度の短時間勤務といった募集年齢や勤務条件の設定に対する評価が記述された。一方で、今回の募集は、介護施設での仕事のみであったことに対して、職種の拡大を希望する記述も見ら

れた。

【就労機会への感謝】は、仕事を得る機会の提供に対する感謝が多かった。高齢期には年齢で不利になる等、就労意欲があっても仕事を得るのが難しい現状が推察された。

【参加に対する期待】は［貢献］、［人との交流］、［生きがい創出］、［学び］、［責務の全う］の５つのコードから析出され、トライアル就労への参加で、生活の豊かさや成長できることを期待している様子がうかがえた。

４．終了時のトライアル就労参加の感想に関する自由記述の特徴

終了時の感想に関する自由記述からは、【学び・気づき】、【働けたことへの感謝】、【日常生活の変化】、【事業の評価】、【貢献への意識】、の５つのカテゴリーが析出された（表６－５）。

表６－５　トライアル就労へ参加した感想に関する自由記述の内容（終了時）

【カテゴリー】（記述数）	［コード］（記述数）	記述例
【学び・気づき】（10）	［生きがい就労の意義］（４）	・このシステムを広く展開出来れば高齢化と人手不足を多少なりとも解消出来るのではないでしょうか
	［介護施設の実態］（２）	・入所者の皆さんが日々暮らす場が、介護職を中心に多くの方が担い支えている様子を体験、見聞しました
	［理想の老い方］（１）	・入居者様に接していて自分はどういう老い方をしたいと学ばせてもらった
	［トライアル就労へのニーズ］（２）	・これからも働いてみたいという意欲に繋がるかどうかは、事業者側の対応によるのではないかと感じた ・支援に入っている人の交流会があれば
	［働くことの楽しさ］（１）	・自分の体力に合う働き方で、仕事ってこんなに楽しかったんだと新発見。
【働けたこと・職場への感謝】（８）	［働けたこと・職場への感謝］（８）	・高齢者でも働きやすい場所や環境を紹介して頂きありがたいと思っております ・見守って頂いた職員の方々にも入居者の方々にも、企画をして下さった皆様にもありがとう、感謝です
【日常生活の変化】（４）	［生きがいが得られた］（１）	・高齢になっても地域で就労・活躍できる機会を与えて頂き，生きがいになっております。
	［生活が充実した］（１）	・生活のリズムもでき、少しおこづかいも入り、充実した日をすごせています
	［人との交流増加］（２）	・知り合いが出来て大変良い経験をさせて頂いた
【事業の評価】（３）	［事業継続への期待］（２）	・大変良い企画でこの様な事が益々広まれば良いと思う
	［職種拡大への要望］（１）	・いろいろな職種の道が広がればと期待します。
【貢献への意識】（２）	［貢献意欲］（１）	・今後自治会活動の役員としても今回の経験を生かしていきたい
	［貢献満足］（１）	・お役にたてる事がある事がうれしかった

終了時の自由記述では、生きがい就労が人材不足という社会的課題の解消になり得るという［生きがい就労の意義］、入所者の暮らしが介護職だけではなく多くの人に支えられている等、外からでは知り得ない［介護施設の実態］を学んだという記述があった。また自分より年上の入所者と接することで自分の［理想の老い方］という介護施設だからこその学びもあった。実際に仕事をすることで、参

加者の継続意欲向上に対する事業者の対応の重要性や参加者同士の交流会への要望等、仕事を実際に始めたことで気づいた［トライアル就労へのニーズ］に関する気づきがあったことも記述された。また現役時代には感じなかった［働くことの楽しさ］の発見があったことも捉えられた。

【働けたこと・職場への感謝】は、開始時の記述でも見られた仕事の提供への感謝の他に、入所者や職員に対する感謝の記述も見られた。その他に生きがいや生活リズムができたこと、また知人が増加した等の【日常生活の変化】に関する記述、【事業の評価】として今後もトライアル就労と同様の事業の広がり等、「事業継続への期待」も語られた。その他、仕事の経験を地域活動へ活かしたいという［貢献意欲］や仕事で役に立てた喜びという［貢献満足］が得られたという【貢献に関する意識】についても記述があった。

５．自由記述から見る３か月の変化

開始時には【事業への評価】に関した記述が目立ち、終了時には【学び・気づき】と捉えられる内容の記述が目立った。

【事業の評価】について、開始時は事業内容に対する評価が多かったが、３か月後には事業継続への期待に関する記述が目立った。また［職種の拡大への要望］に関する記述は、開始時から終了時で減少した。

【就労機会への感謝】は、開始時は就労機会の提供に対する内容が目立ったが、終了時では就労機会だけではなく、職員や入所者に対する感謝の記述も見られた。

第５項　質的な調査からみた３か月の変化

１．　インタビュー調査協力者の概要

インタビュー調査協力者の基本的属性を表６－６に示した。

表６－６　インタビュー調査協力者の基本的属性

期	施設	ID	性別	年齢	配偶者	最終学歴	働き方
第1期	施設A	A	男	80代	有	大学	単独
		B	男	70代	有	高校	単独
		C	女	60代	有	大学	単独
		D	女	70代	無	高校	ペア
		E	女	60代	無	高校	ペア
第2期	施設F	F	女	60代	無	高校	ペア
	施設G	G	女	60代	有	高校	単独
		H	女	70代	有	不明	単独
		I	女	70代	有	大学	単独
		J	女	60代	有	短大	単独

施設Ａと施設Ｆでは、単独とトライアル就労２人のペアでの配属があった。施設Ａで単独で仕事をした人は、他のトライアル就労参加者とはすれ違う程度で、ペアで仕事をした人は毎回同じペアで勤務した。施設Ｆはペアのみ、勤務時間にずれがあったため、勤務時間の前後１時間は一人での仕事であった。施設Ｇでは、全員単独配属であったため仕事は一人で行ったが、トライアル就労参加者全員が同じ曜日と時間の勤務であったため、勤務終了後に食事に行く等の交流があった。

２．３か月のトライアル就労をとおして感じたこと

インタビュー調査データの分析からは、調査協力者が３か月のトライアル就労で感じた変化について、【高齢期に働くことの意義】【仕事におけるやりがい】【職場の人間関係】【トライアル就労の評価】の４つのカテゴリーが析出された（表６－７）。文中の「　」内のイタリック文字は調査協力者の発言、また表中、文中の〈　〉は筆者の補足、文末の≪　≫は発言者（Ａ～Ｊ）を示す。

表６－７　３か月のトライアル就労をとおして感じたこと

【カテゴリ】（発言数）	［コード］（発言数）	発言例〈筆者の補足〉≪発言者≫
【高齢期に働くことの意義】（12）	［健康増進］（３）	・〈トライアル就労へ参加して良かった点は〉やっぱり，健康面≪Ｃ≫ ・〈トライアル就労参加は〉健康維持というより，頭のため≪Ｄ≫
	［生活の充実］（６）	・生活も前向きになりました。〈メリハリができたから〉家でだらだらするだけでなくなったから≪Ｄ≫ ・時間が決まっているということは，それだけ，家のこともしてから出るから，リズムができるかなと思います≪Ｃ≫
	［経済的報酬］（３）	・少しでも〈給料が〉でるということは，励み≪Ｂ≫ ・年金では足らないので〈中略〉気持ちに余裕が生まれる，楽しみが増える≪E≫
【仕事におけるやりがい】（５）	［充実感］（２）	・今日はここからここまで，明日は端までしようとか，〈仕事に対する〉自分の楽しみというかそういう感じで≪Ａ≫ ・ここの仕事では達成感はなくて〈中略〉だれにも迷惑かけないでお仕事が終わったなと，そういうレベルですね≪F≫
	［キャリアアップに対する考え方］（３）	・〈達成感のない家事業務〉かといって，介護の資格をとろうとか，そういう風にはなってないですけどね≪Ｄ≫ ・むしろこういう風に時給もあげて，仕事もステップアップしてくださいとかいうのは困る≪Ｅ≫
【つながりと交流】（21）	［仲間とのコミュニケーション］（９）	・最初説明会の時にちょっとお話させていただいた方，女性の方ですが，ちょっと会った時手ふったり≪Ａ≫ ・〈トライアル就労の人と〉週に１回会えるのは楽しみ≪Ｇ≫
	［入所者とのコミュニケーション］（４）	・ありがとう，いつもしてもらってとかお礼言っていただくんですよ。やっぱりうれしいなとおもいます≪H≫ ・入所者さんと笑顔を交わしたり，接触があるときに，ああ，ありがたいなと思います≪Ｄ≫
	［スタッフとのコミュニケーション］（８）	・何をしても〈スタッフに〉ありがとうといってもらえる≪Ｅ≫ ・いつも人〈担当スタッフ〉が違うから，言うことが違うし，これは聞いてないということもある≪H≫ ・親切にアドバイスいうか教えていただくときもありますし，孫みたいな人から命令的な言葉遣いで言われるときもありますし。ムカッときてもしゃあないなとか。そういう風に思えるような年ですし，それはあんまり苦にしてません≪Ａ≫ ・〈スタッフの対応も〉いろいろあるからね，分かってきた。その人たちにあわせてね≪Ｂ≫

１）カテゴリー【高齢期に働くことの意義】

インタビューでは高齢期に働くことで、［健康増進］や［生活の充実］の他に、生きがい就労で給料を得たことによって生活の楽しみが増えた等の［経済的報酬］に関する発言があった。給料をもらう楽しみは、無給のボランティア等の社会参加では得られない就労ならではの効果である。

２）カテゴリー【仕事におけるやりがい】

協力者は仕事に慣れていくことで、与えられることだけではなく仕事での楽しみを自ら作り［充実感］を得たという主体的な態度が語られた。しかし、現役時

代のようなキャリアアップはトライアル就労に求めていない様子も捉えられた。生きがい就労といわれる所以であろう。

3）カテゴリー【つながりと交流】

【つながりと交流】については［仲間とのコミュニケーション］は仕事に行く楽しみ、［入所者とのコミュニケーション］は仕事における嬉しさや喜びにつながっていた。［スタッフとのコミュニケーション］では、スタッフからお礼を言われたり親切に教えてもらえたりした満足がある一方で、スタッフの言葉遣い等でネガティブな感情についての語りが聞かれた。このような活動をとおした人との関係におけるネガティブな感情は、高齢者自身が考え方を変えたり相手に合わせたりすることで、関係を良好に保つようにしていた様子が語られた。

第６項　【研究２】の考察

3か月の就労体験の効果

【研究２】では、トライアル就労の参加者を対象に、介護施設における３か月の生きがい就労の効果を検討した。

貢献に関する満足度は、３か月後で有意に得点が高く、生活の充実度では有意傾向で高まった。これらは先行研究の知見と一致する結果である（東，2018；辻，2013)。また貢献に関する満足や意欲は、ボランティア等の無償の社会貢献活動でも高まり、生活の充実は高齢者の社会参加活動全体の効果としても報告されている（片桐，2012)。これらのことから、貢献に関する満足はトライアル就労が介護施設であったこと、生活充実は参加者にとってトライアル就労は社会参加活動と同様の活動であったことが効果から分かった。

これまでの生きがい就労に関する研究では、健康増進や生きがい創出等に関する効果の報告がほとんどであった。しかし高齢期の社会活動は新しい経験になり、高齢者の成熟、つまり発達的な効果が期待できることが指摘されている（片桐，2012；片桐，2017)。【研究２】では、発達的な効果について確認するために、「世代性」について検討した。その結果、３か月で「世代性」得点が有意に高まったことが示された。「世代性」は下の世代との交流で高まること確認されている

が（Cheng, 2009)、【研究２】の結果からは上の世代との交流でも「世代性」が高まる可能性が示唆された。自由記述では、上の世代との交流で［理想の老い方］を学んだという記述が見られたように、自分の老い先を考えることは、将来への関心が高まり、次の世代への関心も高まったとも考えられる。このような次世代への関心の変化が、「世代性」を高めた可能性が示唆される。このことから仕事をとおした交流から、「理想の老い方」という「つながりからの学び」が生じ、「世代性」が高まった可能性が考えられる。

また、「世代性」に含まれる「世話」の概念からこれまで直接的な介護との関連が報告されている(Grossman & Gruenewald, 2017)が、今回の調査協力者は、介護助手という直接的な介護を行わない職種であったことから、介護助手という間接的な世話によっても「世代性」が高まる可能性が示唆された。

開始時と終了後の自由記述の特徴から見えた３か月の変化に関して、開始時では【事業の評価】に関する記述が多く、終了時では【学び・気づき】と捉えられる記述が目立った。これは、開始時はトライアル就労への評価から応募したが、３か月間でトライアル就労をとおしたつながりからの学びが得られたと捉えることができよう。また自由記述で、［職種拡大への要望］に関する記述が開始時より終了時に減少したという結果が示されたが、これは［生きがい就労の意義］や［介護施設の実態］という「つながりからの学び」が関連した可能性が考えらえる。高齢者が介護施設で働くことの意義、トライアル就労の職種が介護施設であることの意義について理解を深め、［職種拡大への要望］の記述が減少した可能性が考えられる。

仕事をとおした人とつながりの効果とネガティブな感情へ高齢者の対応

本調査における自由記述の結果からは、トライアル就労参加者同士のコミュニケーションや入所者とのコミュニケーションが、仕事のはげみや楽しみというポジティブな効果につながったことが明らかになった。今回の生きがい就労参加者同士の関係や入所者との関係は、プライベートで食事をしたり仕事以外の話や相談をしたりするような強いつながりではなかったが、弱いつながりにおけるコミュニケーションも高齢者の仕事においてはげみや楽しみをもたらすことが明らかになった。

しかし一方で、インタビュー調査では若いスタッフの言葉遣いや指示の統一がないことへの戸惑いというネガティブな感情をもったエピソードが聞かれた。このようなネガティブな感情を持った際には、高齢者側が若い人たちに合わせていくことで関係を良好な方向へ導くように積極的に努めた経験が語られた。さらに関係性が良好なままであるのは、自分が経験のある高齢者だからできたとことであり、経験のない若い人が経験の豊かな高齢者と働くことの利点であると、高齢者が就労することの価値を学んだことも語られた。

高齢者が仕事をすることで新しいつながりを得ることは、ポジティブな感情だけではなくネガティブな感情も経験する可能性がある。しかしネガティブな感情も、高齢者が働く利点への気づきという学びにつながる可能性もあることが見いだされた。

第２節　発達につながる社会活動：社会調査による検討【研究３―１】

【研究２】では、生きがい就労以外の就労について、また「世代性」以外の発達については検討していないため、本節で生きがい就労以外の就労も含め、社会調査から検討する。

【研究３－１】では、個人的側面と社会的側面の発達について、【研究３―２】で、社会活動をとおして得られる「交流の広がり」と「仲間の獲得」、「学び」と発達の関係について検討する。

第１項　目的

【研究３―１】では、社会活動が高齢者の個人的側面と社会的側面の発達につながるかを検討した。個人的側面の発達は「アイデンティティ」と「世代性」、社会的側面の発達は「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」を使って測定した。

第２項　方法

《調査４》の宝塚市で実施した社会調査のデータを使用した。

調査概要

調査期間は 2019 年 10 月から 11 月に郵送による質問紙調査を行った。調査対象者は、選挙人名簿より無作為抽出した宝塚市在住の 60 歳から 79 歳の男女 1022 人

で、456 件の回答済み調査票を回収した（回収率 45％）。

質問内容は、基本的属性と就労の有無、現在加わっている社会参加活動について、実際に活動している活動、加わっているが活動していない活動を質問した。実際に活動している社会参加活動について、活動を通した新しい友人数や活動頻度、また活動を通して得られたと効果について質問した。成熟に関する質問として、個人面の成熟としてはアイデンティティと「世代性」、社会面の成熟としてコミュニティ感覚と社会貢献志向に関して回答を求めた（Appendix ５）。

使用した項目

１）「アイデンティティ」

岡本（1996）が Erikson の 8 段階の発達課題をもとに 1 段階ごとに作成した全 30 項目からなる心理・社会的課題達成度測定尺度のうち、5 段階目の「アイデンティティ」に関連する項目４項目を使用した。各項目の設問に続く文章を、「肯定的な局面」から「否定的な局面」まで、7 ポイントスケールで回答を求めた。

１.「生きることに私は…」に続く言葉を、「何の目標も目的もない」を最小１ポイント、「非常にはっきりした目標や目的をもっている」を最大７ポイントにし、１から７までの数字で該当する位置の数字に○をする方法で質問した。

以下同様に、２.「私の生活を考えると私は・・・」に関して、「何のためにいるのかわからない」から「今生きている理由がはっきりしている」まで。

３.「私は生活の中で…」に対して「何をしたらよいのかわからない」から「自分のすべきことや役割がはっきりしている」まで。

４.「私は現在やっている活動や役割に対して…」、「全く消極的である」から「積極的に一生懸命うちこんでやっている」まで。

信頼性係数は .881 で十分高かったため一つの尺度とし、点数が高いほど「アイデンティティ」の達成度が高くなるように尺度化した。

２）「世代性」

田渕ら（2012）が作成した「短縮版 Generativity 尺度」を使用した。

１.「私が死んでも、人は私のことを覚えていてくれるだろう」

２.「私が人のためにしてきたことは、後世にも残ると思う」

３.「自分の経験や知識を人に伝えるようにしている」

４.「何かに向かって前進していると感じる」

５.「無理のない範囲で、募金をしたい」

「１．まったくあてはまらない」から「５．非常によくあてはまる」までの５点尺度で回答を求めた。

信頼性係数は.765 で、十分高かったため、得点の和が高い方が「世代性」が高くなるように尺度化した。

３)「コミュニティ感覚」

McMillan & Chavis（1986）が作成した「Sensen of Community Index」の日本語版（笹尾，2007）12 項目から、9 項目を採用した。信頼性係数は.780 で十分高かったため、一つの尺度とし、得点が高いほど地域コミュニティに対してもっている関係や感情が高くなるように尺度化した。

１．この地域に住む多くの人と顔見知りである。

２．この地域は、わたしにとって居心地が良い

３．この地域の住人のほとんどが私のことを知っている

４．この地域のあり方に対して、影響力を持っている

５．この地域で何か問題が生じたとき、住人がそれを自ら解決することができる

６．この地域は、私にとって住むのに適している

７．この地域に住む人々は、皆同じような価値観を共有している

８．私とこの地域に住む人々は、この地域に同じものを期待している

９．この地域に住み続けると思う

４)「社会貢献意識」

片桐（2012）が作成した「社会貢献志向」を参考に、5 項目を使用した。

１．自分の楽しみをしながら社会に貢献していきたい

２．地域活動に積極的に参加したい

３．住んでいる地域に貢献したい

４．社会で問題になっていることの役に立ちたい

５．社会に対してなにか恩返しをしたい

これら 5 項目について、「そう思う」から「そう思わない」までの 4 件法を用いた。信頼性係数は .823 で十分高かったため一つの尺度とし、尺度得点が高いほど社会貢献志向が高くなるように尺度化した。

５）社会参加活動

社会参加活動に関する質問は、社会参加活動を以下の 10 種類に分類し、それぞれの活動に対して「加入しており実際に活動している」、「加入いるがあまり活動していない」、「加わっていない」の３つの選択肢で回答を求めた。　本研究は社会活動を行うことによって得られる効果について検討することを目的としているため、「加わっており実際に活動している」人を社会参加有り、「加入いるがあまり活動していない」と「加わっていない」を社会参加無しとして分析に使用した。

社会参加活動の分類

１．自治会・町内会・老人会・婦人会
２．同業者の団体・農協・労働組合
３．生協・消費者団体・住民/市民運動団体
４．ボランティア団体
５．宗教団体
６．学習会や習い事グループ
７．趣味や遊び仲間グループ
８．仕事仲間グループ
９．同窓会
10．電子町内会や地域のメーリングリスト

第３項　結果

調査協力者の概要

回収された 456 名の男女比は、男性 50.8%、女性 49.2%で、男女の偏りはなかった。年代では、70 代が 60 代より若干多く、70 代で無職が増加するため就業状況についても、全体として無職が多い。学歴では、男性では大学・大学院が多く、

女性では高等学校が多かった。住宅状況では、持ち家が 89％と非常に多く、経済的にも心配が少ない人が多かった。健康状態も普通から良い人が多かった。宝塚市は、兵庫県でも比較的経済的に余裕のある世帯が多い地域であることが、回答者の属性に反映し、経済的にも恵まれた層の回答者の割合が高くなったと考えられる。調査協力者の基本的属性については表６－８で示した。

表６－８　宝塚市社会調査対象者の基本的属性（*N*=456）

特　徴	*n*	%
性別		
男性	229	50.8
女性	222	49.2
就業の有無		
フルタイム	82	18.0
パートタイム	89	19.5
無職	248	54.4
年代		
60-64	67	14.9
65-69	93	20.7
70-74	135	30.0
75-79	155	34.4
学歴		
小・中学校	36	8.3
高等学校	170	39.3
専門・専修学校	16	3.7
短大・高専	64	14.8
大学・大学院	147	33.9
住居状況		
持ち家	389	89.0
賃貸	25	5.7
官舎・寮	12	2.7
サービス付き高齢者住宅	3	0.7
その他	8	1.8
健康		
良くない	22	5.0
あまり良くない	73	16.4
普通	127	28.6
まあ良い	130	29.3
良い	92	20.7
経済的な暮らし向き		
苦しく非常に心配	22	5.0
ゆとりがなく多少心配	57	12.9
あまりゆとりはないがそれほど心配ない	257	58.3
ゆとりがあり全く心配ない	101	22.9
わからない	4	0.9

表６－９　社会参加活動の参加状況

	加わっており実際に活動している		加わっているがあまり活動していない		加わっていない	
	n	%	*n*	%	*n*	%
自治会・町内会・老人会・婦人会	124	27.2	171	37.5	151	33
同業者の団体・農協・労働組合	21	4.6	12	2.6	414	90.6
生協・消費者団体・住民/市民運動団体	34	7.5	63	13.8	350	76.6
ボランティア団体	51	11.2	15	3.3	381	83.4
宗教団体	27	5.9	19	4.2	400	87.5
学習会や習い事グループ	110	24.1	13	2.9	324	70.9
趣味や遊び仲間グループ	190	41.7	35	7.7	223	48.8
仕事仲間グループ	73	16.0	39	8.6	334	73.1
同窓会	103	22.6	104	22.8	240	52.5
電子町内会や地域のメーリングリスト	2	0.4	11	2.4	447	97.8
合計	735		482		3264	

調査協力者の社会参加活動へ参加状況は表６－９に示した。

全体の社会参加活動への参加率は６割程度であり、日本全体の参加率と同程度であった。女性では約７割の人がなんらかの社会参加活動に加わっていて実際に活動しており、女性の社会参加活動が活発な地域である。

趣味や習い事が一番多い一方で、ボランティア団体への参加は１割程度と少なかった。

【研究３－１】では、社会参加活動に加わっており実際に活動をしている人を「社会参加活動有」、加わっているがあまり活動していない、また加わっていない人は「社会参加活動無」として、社会参加活動の有無として分析に用いた。

社会参加活動有群の性別別参加状況

次に、社会参加活動に加わっており実際に活動をしている（以下、社会参加活動有）の性別別参加状況を表６－10 に示した。

参加率の男女差が大きかったのは「学習会や習い事のグループ」であった。女性の参加率が女性全体の 39.6％であったのに対し、男性は 9.2％と 1 割に満たなかった。男女とも参加率が一番高かった活動は、「趣味や遊び仲間グループ」で、男性 36.7％、女性 46.4％であった。「ボランティア団体」への参加は、男女ともに低く、1 割程度であった。

男女の参加率全体でみると、女性の方が男性より社会参加活動への参加は活発であった。

表６－10　社会参加活動の性別別参加率

	男性		女性		性別無回答	
	n	%	*n*	%	*n*	%
自治会・町内会・老人会・婦人会	53	23.1	70	31.5	1	20.0
同業者の団体・農協・労働組合	13	5.7	7	3.2	1	20.0
生協・消費者団体・住民/市民運動団体	17	7.4	17	7.7	0	0.0
ボランティア団体	23	10	27	12.2	1	20.0
宗教団体	11	4.8	16	7.2	0	0.0
学習会や習い事グループ	21	9.2	88	39.6	1	20.0
趣味や遊び仲間グループ	84	36.7	103	46.4	3	60.0
仕事仲間グループ	49	21.4	23	10.4	1	20.0
同窓会	63	27.5	37	16.7	3	60.0
電子町内会や地域のメーリングリスト	0	0	2	0.9	0	0.0

性別別就業率

全体の就業率は、表６－８で示したように無職が 54.4％と約半数で、有職は 37.5％、有職者のうちフルタイムは 48％、パートタイムは 52％と、パートタイムの方が若干多かった。

性別別の就業率を表６－11 に示した。男女別では、女性（n = 222）の 6 割が仕事をしておらず、有職者ではフルタイム（7.7％）よりパートタイム（21.6％）で働く人の割合が高かった。男性（n = 229）は逆にフルタイムで働く割合（28.0％）がパートタイム（17.0％）より多く、無職の割合は 48.9％と半数以上が何らかの仕事していることが分かった。

表６－11　性別別就業率

	男性		女性		性別無回答	
	n	%	*n*	%	*n*	%
フルタイム	64	28.0	17	7.7	1	20.0
パートタイム	39	17.0	48	21.6	2	40.0
無職	112	48.9	134	60.4	2	40.0
無回答	14	6.1	23	10.4	0	0.0
合計	229		222		5	

年齢別就業率

次に、男女それぞれの年齢別の就労状況については表６－12 で示した結果となった。

男性有職者（*n* = 103）のうち、フルタイムは 60 歳から 64 歳が一番多く、パートタイムで一番多かったのは、70 歳から 74 歳であった。

女性有職者（*n*=65）はフルタイムよりパートタイムが多かった。パートタイムの就労は 65 歳から 69 歳が一番多かった。

表６－12　年齢別就労率（性別別）

男性（*n*=229）

	フルタイム		パートタイム	
	n	%	*n*	%
60歳～64歳	23	36.0	5	12.9
65歳～69歳	16	25.0	10	25.7
70歳～74歳	17	26.5	13	33.3
75歳～79歳	8	12.5	11	28.2
無回答	0	0	0	0
合計	64	100	39	100

女性（*n*=222）

	フルタイム		パートタイム	
	n	%	*n*	%
60歳～64歳	5	29.4	12	25
65歳～69歳	3	17.6	18	37.5
70歳～74歳	7	41.2	13	27.1
75歳～79歳	2	11.8	4	8.3
無回答	0	0	1	2.1
合計	17	100	48	100

１．社会活動と個人的側面、社会的側面の発達との関連

社会活動が高齢者の発達につながるかについて検討するため、「アイデンティティ」、「世代性」、「コミュニティ感覚」、「社会貢献意識」、それぞれを従属変数、就労の有無、社会参加の有無、社会参加の有無の交互作用項を独立変数とした重回帰分析を行った。統制変数として、性別、年齢、学歴、経済的な暮らし向き、健康状態を投入した。

重回帰分析の結果、「アイデンティティ」は就労（$\beta = .185$, $p < .05$）と社会参加活動（$\beta = .393$, $p < .01$）が有意に関連し、「世代性」も、就労（$\beta = .219$, $p < .05$）と社会参加活動（$\beta = .223$, $p < .01$）が有意に関連していた。社会貢献志向については、就労は有意ではなく（$\beta = .087$, ns）社会参加活動では有意な関連が示され（$\beta = .350$, $p < .001$)、「コミュニティ感覚」も就労は有意ではなく（$\beta = .089$, ns)、社会参加活動は有意に関連していることが示された（$\beta = .233$, $p < .01$)。就労と社会参加活動の交互作用項は、いずれも有意ではなかった。

就労は、「アイデンティティ」と「世代性」のみ関連が示されたが、「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」は有意ではなく、社会参加活動は４つの側面の発達すべてに関連していた（表６－13)。

表６－13　アイデンティティ、「世代性」、コミュニティ感覚、社会貢献志向を従属変数とした重回帰分析の結果

	アイデンティティ（n=376）		「世代性」（n=375）		社会貢献意識（n=362）		コミュニティ感覚（n=346）	
	SE	β	*SE*	β	*SE*	β	*SE*	β
性別（0＝男性，1＝女性）	.478	.107 *	.385	.143 **	.329	-.037	.460	-.038
年齢	.048	-.033	.039	-.012	.033	-.056	.046	.098
学歴	.396	.029	.321	.121 *	.269	-.014	.379	.155 **
経済的な暮らし向き	.320	.206 ***	.256	.166 **	.218	.154 **	.306	.128 *
健康状態	.216	.074	.173	-.043	.146	-.057	.208	.077
就労の有無（0＝無，1＝有）	.837	.185 *	.668	.219 *	.577	.087	.827	.089
社会参加活動の有無（0＝無，1＝有）	.689	.393 ***	.547	.223 **	.472	.350 ***	.671	.233 **
就労の有無 × 社会参加活動の有無	.999	-.110	.800	-.121	.686	-.064	.971	-.048
R^2		.222 ***		.110 ***		.119 ***		.127 ***

***p = .001, **p = .01, *p = .05

２．就労形態による、「アイデンティティ」と「世代性」への影響

就労は社会的側面の発達には関連がみられなかったが、個人的側面の発達に関連していたことから、就労形態による違いがあるかを検討するため、フルタイム、パートタイムで t 検定を行ったが、得点の平均に有意な差はなかった（表６－14）。

表６－14　就労形態別アイデンティと「世代性」の平均値と標準偏差

	アイデンティティ					「世代性」				
	n	平均値	*SD*	最小値	最大値	*n*	平均値	*SD*	最小値	最大値
フルタイム	79	20.6	4.5	5	28	76	15.4	3.9	5	25
パートタイム	87	21.1	5.3	4	28	87	15.1	3.9	5	24

３．性別別、社会活動と「アイデンティティ」、「世代性」との関連

重回帰分析で「アイデンティティ」と「世代性」は性別で有意な結果が得られたため、「アイデンティティ」と「世代性」について男女別で重回帰分析を行った。

その結果、就労は男性のみで「世代性」との関連が示されたが、「アイデンティティ」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」は男女とも有意ではなかった。社会参加活動は、男性は「アイデンティティ」と「世代性」の両方で有意な関連が示され、女性は「アイデンティティ」のみ有意に関連し、「世代性」は関連が示さ

れなかった（表６－15）。

表６－15　性別別，発達４側面を従属変数とした重回帰分析

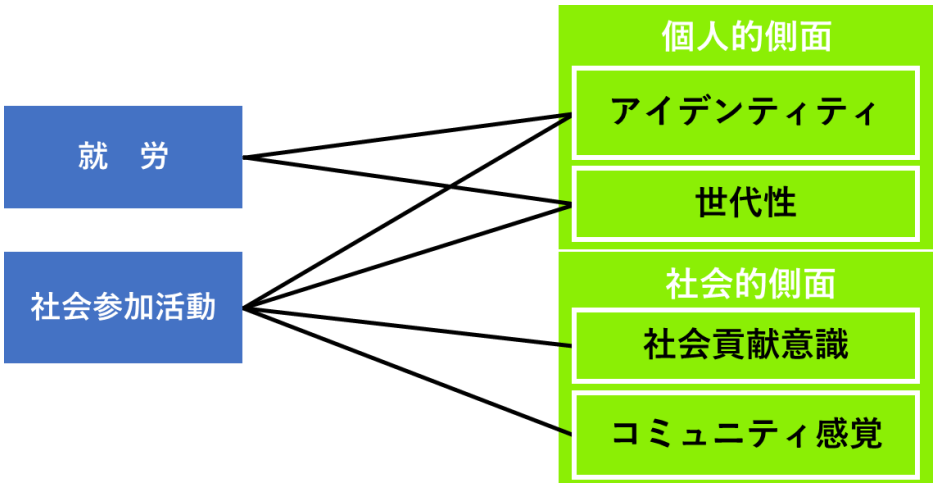
	男　性				女　性			
	アイデンティティ（n=195）		「世代性」（n=197）		アイデンティティ（n=181）		「世代性」（n=178）	
	SE	*β*	*SE*	*β*	*SE*	*β*	*SE*	*β*
年齢	.07	-.02	.06	-.07	.07	-.05	.05	.04
学歴	.56	.50	.46	.60	.58	.07	.45	.92 *
経済的な暮らし向き	.42	1.67 ***	.34	.99 **	.51	1.00 *	.40	.57
健康状態	.29	.55	.24	-.20	.33	-.05	.26	-.10
就労の有無（1＝有，0＝無）	1.07	1.33	.87	2.15 *	1.38	2.53	1.07	1.25
社会参加の有無（1＝有，0＝無）	.99	3.53 ***	.80	2.92 ***	.97	4.87 ***	.76	.66
就労の有無 × 社会参加の有無	1.34	-1.31	1.09	-2.12	1.59	-1.28	1.24	-.28
R^2		.24 ***		.15 ***		.20 ***		.06

$^{***}p < .001$, $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

第４項　【研究３－１】の考察

【研究３－１】では、就労と社会参加活動が発達につながるかを検討した。その結果、就労では「アイデンティティ」と「世代性」のみで関連が示され、社会参加活動は、４側面すべての発達との関連が示された。【研究３－１】の結果を図６－１に示した。

図６－１　【研究３－１】の結果：就労、社会参加活動と発達４側面との関連



先行研究では生きがい就労のみを対象とした研究で、就労と「アイデンティテ

ィ」と「世代性」が関連するという報告（中原，2014)、また【研究２】の生きがい就労のみの検討から３か月で「世代性」が促進されたという結果と同じ結果が得られた。【研究３－１】の結果からも、生きがい就労だけではなく生きがい就労以外の就労を含めた場合でも、同様に就労が「アイデンティティ」と「世代性」を促進する可能性が示された。このことから、就労は個人的側面の発達という効果が期待できることが示唆されたといえる。

しかし、就労は「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」は有意な関連が示されなかった。【研究３－１】の結果では、就労は男性でフルタイムが多く、女性はパートタイムが多かったが、パートタイム、フルタイムの就労形態における差がなかったことから、高齢者の就労において、個人的側面の発達は促進される可能性があるが、社会的側面の発達には関連が低い可能性を示す結果となった。

これは、【研究２】のトライアル就労では、貢献に関する満足度が高まったという結果とは矛盾するように思える。しかし貢献に関する満足は、貢献意識をもともと持っていた人が満足したと捉えることができ、貢献に関する満足が得られたからといって貢献意識が高まるとは言い切れない。一方で、貢献に関して満足できる環境であれば、【研究１－１】のインタビュー調査の結果で示されたように、貢献できて満足したことへ気づくことで、自分の貢献意識というニーズに目覚めることがある。また【研究１－２】のインタビュー調査の結果から、生きがい就労をとおして得た社会的課題に関する学びによって「社会貢献意識」につながる可能性が示唆されている。これらのことから、就労でも職種や仕事の分野によっては「社会貢献意識」が高まる可能性は考えられる。しかし、社会貢献の活動に触れることや社会貢献につながる社会の課題に対して考えを深める機会があることが、社会的側面の発達につながり得るが、就労全体で見た場合、社会的課題に直面する機会等がない環境での就労もあると考えられる。【研究１】、【研究２】、【研究３―１】の結果の違いは、このように就労に関して社会的課題に接する機会があるかどうかの違いによるものと考えられる。

就労全体では関連が見られなかったが、社会的側面の発達は社会参加活動では関連が示された。今回の調査協力者の社会参加活動で参加率が高かった活動の種類が学習会や習い事（24.1％）や趣味や遊び仲間（41.7％）の活動であったが、ボランティア団体への参加は全体で 11.2％と低かった。つまり社会参加活動有群

は、ボランティアへの参加より学習や趣味の活動への参加の方が多かったということになる。このことから、ボランティア活動への参加がなくても社会的側面の発達は促される可能性があることが示唆される。

社会参加活動についての男女別での分析からは、性別での違いが示された。調査協力者全体では、「アイデンティティ」と「世代性」は社会参加活動との有意な関連が示され、男性でも同様に有意な関連が示されたが、女性は「アイデンティティ」との関連は示されたが「世代性」との関連は見られなかった。参加率については、活動の種類で大きな性別による違いがなかったことから、活動の種類の違いによる影響は低いと考えられる。

女性の場合は、社会参加活動をしていない人でも、家庭内で家族の世話等、「世代性」に関連する行動、例えば孫育てや親の介護を家で行っている場合が考えられる。よって、日常生活で「世代性」を高めている可能性があることから、社会参加活動をしている人が「世代性」が高いという結果が示されなかったという可能性が考えられる。

【研究３－１】の結果からは、就労と社会参加活動の交互作用が有意ではなかったことから、就労と社会参加活動を両方することによって効果が高まる可能性は低いが、就労環境で社会的課題に関する学びにつながる経験が少ない人でも、社会参加活動を同時に行うことによって社会的側面の発達の効果を高める可能性が考えられる。

このように【研究３－１】の結果からは、就労と社会参加活動とでは、発達に関する効果に違いが見られた。また社会参加活動については、男女で発達の効果に違いがあることも明らかになった。しかし就労では関連がなかった社会的側面の発達が、社会参加活動では関連がみられたということは、社会参加活動によるなにかが発達に関連すると考えられる。

次に、本研究で検討する「社会活動をとおした発達プロセス（仮説モデル）」は、「交流の広がり」、「仲間の獲得」、「つながりをとおした学び」と発達を、一連のプロセスと捉えた。次節では、この３つの関係について検討した（【研究３－２】）。

第３節　社会参加活動をとおした交流、仲間、学びの発達への影響【研究３－２】

第１項　目的

【研究３－１】の結果からは、調査協力者全体で社会参加活動は「アイデンティティ」、「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」の全てと関連することが明らかになった。【研究３－２】では、社会参加活動をとおした「交流の広がり」、「仲間の獲得」、「つながりからの学び」が、「アイデンティティ」、「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」の４つの発達に関連するかについて検討することを目的とした。

第２項　方法

《調査４》の宝塚で実施した社会調査のデータを使用し社会参加活動有群のみ（*n*=299）を分析対象とした。使用した変数は以下の通りである。

使用した項目

１）「アイデンティティ」

岡本（1996）が Erikson の 8 段階の発達課題をもとに 1 段階ごとに作成した全 30 項目からなる心理・社会的課題達成度測定尺度のうち、5 段階目の「アイデンティティ」に関連する項目４項目を使用した。各項目の設問に続く文章を、「肯定的な局面」から「否定的な局面」まで、7 ポイントスケールで回答を求めた。

１.「生きることに私は…」に続く言葉を、「何の目標も目的もない」を最小１ポイント、「非常にはっきりした目標や目的をもっている」を最大７ポイントにし、１から７までの数字で該当する位置の数字に○をする方法で質問した。

以下同様に、２.「私の生活を考えると私は・・・」に関して、「何のためにいるのかわからない」から「今生きている理由がはっきりしている」まで。

３.「私は生活の中で…」に対して「何をしたらよいのかわからない」から「自分のすべきことや役割がはっきりしている」まで。

４.「私は現在やっている活動や役割に対して…」、「全く消極的である」から「積極的に一生懸命うちこんでやっている」まで。

信頼性係数は .881 で十分高かったため一つの尺度とし、点数が高いほど「アイデンティティ」の達成度が高くなるように尺度化した。

２）「世代性」

田渕ら（2012）が作成した「短縮版 Generativity 尺度」を使用した。

１.「私が死んでも，人は私のことを覚えていてくれるだろう」

２.「私が人のためにしてきたことは，後世にも残ると思う」

３.「自分の経験や知識を人に伝えるようにしている」

４.「何かに向かって前進していると感じる」

５.「無理のない範囲で，募金をしたい」

「１．まったくあてはまらない」から「５．非常によくあてはまる」までの５点尺度で回答を求めた。

信頼性係数は.765 で、十分高かったため、得点の和が高い方が「世代性」が高くなるように尺度化した。

「コミュニティ感覚」

McMillan & Chavis（1986）が作成した「Sensen of Community Index」の日本語版（笹尾，2007）12 項目から、9 項目を採用した。信頼性係数は.780 で十分高かったため、一つの尺度とし、得点が高いほど地域コミュニティに対してもっている関係や感情が高くなるように尺度化した。

１．この地域に住む多くの人と顔見知りである。

２．この地域は、わたしにとって居心地が良い

３．この地域の住人のほとんどが私のことを知っている

４．この地域のあり方に対して、影響力を持っている

５．この地域で何か問題が生じたとき、住人がそれを自ら解決することができる

６．この地域は、私にとって住むのに適している

７．この地域に住む人々は、皆同じような価値観を共有している

８．私とこの地域に住む人々は、この地域に同じものを期待している

９．この地域に住み続けると思う

４）「社会貢献意識」

片桐（2012）が作成した「社会貢献志向」を参考に、5 項目を使用した。

１．自分の楽しみをしながら社会に貢献していきたい

２．地域活動に積極的に参加したい

３．住んでいる地域に貢献したい

４．社会で問題になっていることの役に立ちたい

５．社会に対してなにか恩返しをしたい

これら 5 項目について、「そう思う」から「そう思わない」までの 4 件法を用いた。信頼性係数は .823 で十分高かったため一つの尺度とし、尺度得点が高いほど社会貢献志向が高くなるように尺度化した。

５）「交流の広がり」

「加わっており実際に活動している」社会参加活動グループのうち、最も力を入れている活動について、以下 3 項目に当てはまるもの全てに選択を求めた。

・自分と違う年齢層・世代の人たちとの交流が広がった

・これまで知らなかった近所の人たちとの交流が広がった

・自分の住む地域以外の人たちとの交流が広がった

これら３項目について、選択を１、非選択を０とし３項目の和を「交流の広がり」の得点とした。

６）　「仲間の獲得」

「(参加している）活動で新しい友人は何人できましたか」の設問に「１．できなかった、２．１人～３人、３．４人～８人、４．8 人以上」から１つ選択するように回答を求めた。

７）「つながりからの学び」

「加わっており実際に活動している」社会参加活動グループのうち、最も力を入れている活動について、以下４項目に当てはまるもの全てに選択を求めた。

・興味と関心が広がった

・いろいろな価値や考えを知るきっかけになった

・自分自身を知る機会になった

・地域や社会の課題や問題がわかった

これら４項目について、選択を１、非選択を０とし、４項目の和を「つながりからの学び」の得点とした。

第３項　結果

社会参加有群を分析対象にして、社会参加活動をとおした交流の広がり、仲間の獲得、「つながりからの学び」が発達につながるかを検討するため、「アイデンティティ」、「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」、それぞれを従属変数、活動をとおした「交流の広がり」、「仲間の獲得」、「つながりからの学び」を独立変数として重回帰分析を行った。変数間の相関表は表６－16 のとおりである。

表６－16　変数間の相関表

		1	2	3	4	5	6
1	アイデンティティ	―					
2	世代性	.50 ***	―				
3	社会貢献意識	.35 ***	.39 ***	―			
4	コミュニティ感覚	.29 ***	0.46 ***	.29 ***	―		
5	交流の広がり	.20 **	.19 **	.17 **	.26 ***	―	
6	仲間の獲得	.17 **	.28 ***	.07	.23 ***	.36 ***	―
7	つながりからの学び	.20 **	.24 ***	.22 ***	.17 **	.36 ***	.24 ***

** $p < .01$, *** $p < .001$

重回帰分析の結果、「交流の広がり」は、「社会貢献意識」は有意傾向、「コミュニティ感覚」は有意な正の関連が示された。なお、多重共線性は生じていなかった（表６－17）。

表６—17　発達４側面を従属変数した重回帰分析の結果（交流の広がり、仲間の獲得、学び）

	「アイデンティティ」（n=229）		「世代性」（n=228）		「社会貢献意識」（n=224）		「コミュニティ感覚」（n=217）	
	SE	*β*	*SE*	*β*	*SE*	*β*	*SE*	*β*
性別（０＝男性，１＝女性）	.524	.143 *	.461	.079	.379	-.127 †	.579	-.113 †
年齢	.050	.057	.044	-.086	.036	-.085	.055	.050
学歴	.440	.071	.384	.139 *	.325	-.050	.488	.074
経済的な暮らし向き	.377	.099 *	.325	.058	.273	.093 *	.413	.102
健康状態	.237	.022	.207	-.050	.172	-.060	.266	.090
交流の広がり	.304	.111	.265	.057	.217	.128 †	.329	.173 *
仲間の獲得	.300	.098	.265	.256 ***	.220	.053	.329	.121 †
つながりからの学び	.235	.079	.206	.141 *	.170	.264 ***	.259	.131 †
R^2		.098 **		.156 ***		.139 ***		.149 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

活動をとおした「仲間の獲得」は、「世代性」と有意な関連が示され、「コミュニティ感覚」は有意傾向で関連が見られた。

活動を通して得た「つながりからの学び」は、「世代性」、「社会貢献意識」と有意に関連しており、「コミュニティ感覚」は有意な傾向が示された。

「アイデンティティ」については、「交流の広がり」「仲間の獲得」「つながりからの学び」とはどれも有意ではなかった。しかし、「アイデンティティ」を従属変数とする分析においては、性別が有意であったため男女別で分析を行った。

表６－18　性別別、アイデンティティを従属変数とした重回帰分析の結果

	男性（n=110）		女性（n=119）	
	SE	*β*	*SE*	*β*
年齢	.07	.13	.05	-.02
学歴	.64	.06	.44	.09
経済的な暮らし向き	.48	.15	.38	.05
健康状態	.31	.09	.24	-.06
交流の広がり	.40	.11	.30	.13
仲間の獲得	.40	.12 †	.30	.03
つながりからの学び	.33	.17	.24	.06
R^2		.17 **		.05

† $p < .10$

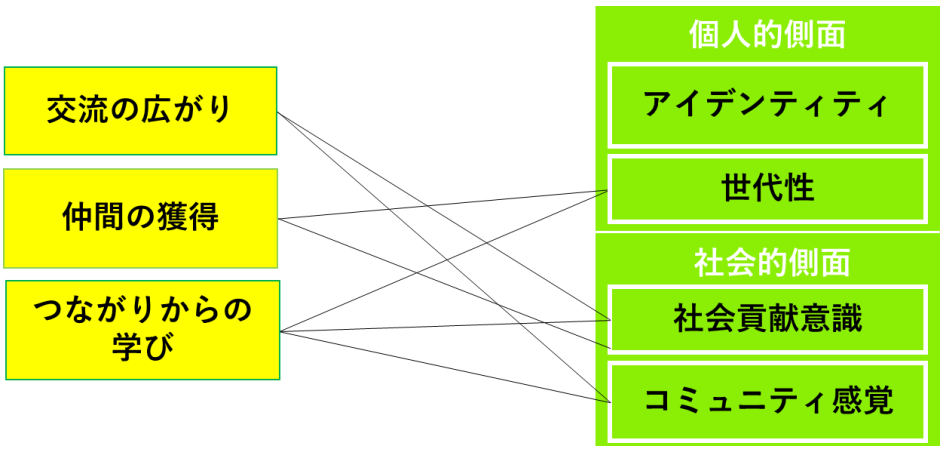
男女別の分析結果では、男性は「仲間の獲得」では強くはないが関連は示されたが、女性はどの変数でも有意ではなかった（表６－18）。

第４項　【研究３―２】の考察

【研究３－２】では、社会参加活動に参加している人を対象として、活動を通して得た交流の広がり、仲間の獲得、学びが発達を促進する可能性があるかを検討した。その結果、交流が広がることは、「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」という社会的側面の発達を促す可能性、また仲間を増やしていくことは「世代性」と「コミュニティ感覚」が高まる可能性が示された（図６－２）。つまり活動をとおした交流や仲間といった人とのつながりは、社会的側面の発達に影響する可能性があることが示されたといえる。

高齢期に社会参加活動へ参加するということは、孤独感の緩和という効果があることが指摘されているが（片桐，2012）、それだけではなく、コミュニティに対する愛着や社会貢献の意識を高め、さらに次の世代に対する関心も高まる可能性が明らかになった。つまり社会参加活動へ参加する高齢者は、社会から望ましい発達の側面を伸ばしている可能性があるといえよう。

図６－２　【研究３－２】の結果：社会参加活動における「交流広がり」「仲間の獲得」「つながりからの学び」と発達４側面との関連



【研究３－２】では、「アイデンティティ」は、「交流の広がり」、「仲間の獲得」、「つながりの学び」のいずれも関連が示されなかった。しかし、【研究３－１】では社会参加活動とアイデンティティは関連が示された。このことから、「アイデンティティ」を促進するものは、社会参加活動における「交流の広がり」、「仲間の獲得」、「つながりの学び」以外の別の要因である可能性が考えらえる。これについてはさらなる検討が必要である。

第５項　【研究３】のまとめ

【研究３－１】と【研究３－２】では、高齢者の社会活動と発達の関連について、生きがい就労以外の就労を含めた就労と社会参加活動に分けて検討した。

その結果、就労は「アイデンティティ」と「世代性」の個人的側面の発達が促進される可能性が示され、社会参加活動では個人的側面と「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」という社会的側面の４つの発達すべてが促進される可能性があることが明らかになった。

高齢期に就労を継続することは、高齢者個人にとって発達が促進されるが、【研究３－１】の結果からは、地域社会への貢献、あるいは地域づくりの人材に関わる発達の促進の可能性が低い結果となった。しかし、「世代性」が促進される可能性があることから、「世代性」の高まりが利他的行動意欲を高め、地域活動において利他的行動意欲が貢献行動として発揮されるという点で社会貢献につながる発達が期待できるといえる。

社会参加活動は、「アイデンティティ」、「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」の４つの発達が促進されるており、社会参加活動をとおして得られる交流が広がっていくことは「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」の発達、仲間を獲得していくことは、「世代性」と「コミュニティ感覚」が発達する可能性が見いだされた。

特に「つながりからの学び」は、「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」の発達に関連していることが示されたことから、社会貢献や地域の課題について講座やセミナーを受けなくても、「社会活動をとおした学び」によって社会貢献につながる発達を高めることができる可能性が見いだされた。

第４節　【研究２】と【研究３】のまとめ

【研究２】では、就労で「世代性」が向上することと、「社会活動をとおした学び」は、活動継続の動機になることが示唆された。「世代性」の向上については、先行研究で「世代性」との関連が示された介護施設における仕事であった。しかし先行研究では、介護職員を対象としていたが、本研究における生きがい就労参加者は介護職員が行う入所者の直接介助は行っておらず、掃除や食器の片づけなど介護職員の補佐という仕事であった。このことから、直接介助がなくても「世代性」と関連することが示唆される。

【研究３－１】の結果からは、生きがい就労以外の就労を含めた検討においても、「世代性」との関連が示されたことから、介護施設以外における就労においても「世代性」が高まる可能性が示されたといえる。片桐（2017）は、高齢者就労は高齢者の経験等を継承したり、下の世代を育成したりする役割を求められる可能性が高いため、「世代性」が向上する可能性があることを指摘しているが、本研究では高齢者就労と「世代性」の関係を実証データにより示したといえよう。

【研究３－１】では、就労と「社会貢献意識」との関連示されなかた。しかし【研究２】の生きがい就労を対象とした調査では、貢献に関する満足度が３か月で高まり、貢献に関する満足と意欲に関する自由回答が見られた。また、介護施設の課題や生きがい就労の意義に気づいたという学びに関する記述もあった。このことから、就労でも仕事内容によっては、「社会貢献意識」が高まる可能性が示唆された。

【研究３－２】では、「つながりからの学び」から「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」の発達との関連が示された。しかし関連が示されたのみで、「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」の高い人が学びを得やすい傾向がある可能性も考えられることから、さらなる検討が必要である。次章で、学びが発達を促進するかについて検討を進める。

第７章　社会活動をとおした発達モデルの検証

第６章では、「つながりからの学び」が「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」と関連することが示された。しかし、関連が示されただけで、「つながりからの学び」が発達を促進するかは、明らかにされていない。

もう一つ、仲間の存在が「つながりからの学び」を高めるかについても明らかにされていない。第５章の【研究１―１】の結果からは、「弱いつながり」である「交流の広がり」から得た「つながりからの学び」に関するエピソードよりも、「強いつながり」である「仲間の獲得」から得た「つながりからの学び」に関するエピソードの方が多く語られた。このことから、「交流の広がり」からの「つながりからの学び」より、「仲間の獲得」からの「つながりからの学び」の方が学びの効果を高める可能性が示唆される。

本章では、第１節において、活動をとおして得られる「交流の広がり」が促進する発達は、「つながりからの学び」により促進するかを明らかにし【研究４―１】、第２節で、「仲間の獲得」が「つながりからの学び」を促進するかについて検討する【研究４－２】。

第１節　社会参加活動における交流と学び、発達の関係【研究４－１】

研究【４－１】では、「交流の広がり」と発達、「つながりからの学び」と発達の関係について検討した。

第１項　目的

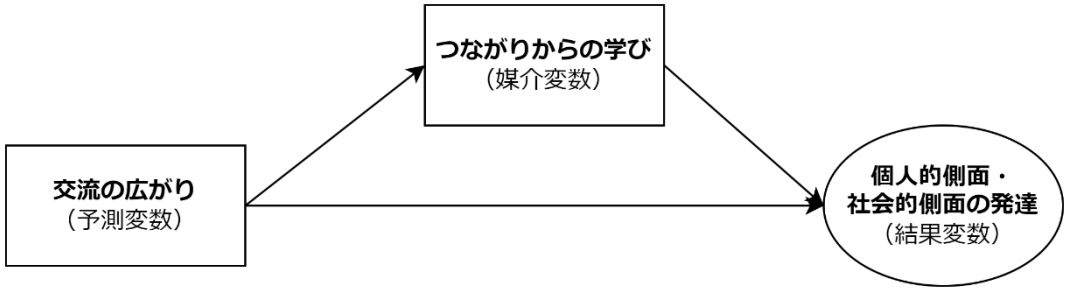
【研究４－１】は、交流の広がりにおける「アイデンティティ」、「世代性」、「社会貢献意識」、「コミュニティ感覚」への影響は、「つながりからの学び」が媒介することによって効果が高まるかついて検討することを目的とする。

第２項　方法

【研究４－１】では、《調査４》のデータを使用し（Appendix ５）、社会参加活動有群を対象として、「交流の広がり」を予測変数とし、４つの発達を結果変数、つながりからの学びを媒介変数として媒介分析を行った（図７－１）。Baron &

Kenny （1986） が示した方法を参照し、最初に予測変数である交流と媒介変数であるつながりからの学びの回帰分析を行い、次に交流と「つながりからの学び」を独立変数として結果変数であるの４つの発達をそれぞれ従属変数とした重回帰分析を行った。その後、「つながりからの学び」の間接効果の検定は、Sobel 検定（Sobel, 1982）で検定した。Sobel 検定は、予測変数から媒介変数への回帰係数と媒介変数から結果変数への回帰係数を乗じて行うものである。

図７－１　「つながりからの学び」による交流の広がりから発達への媒介



分析に使用した項目は以下のとおりである。

使用した項目

１）「アイデンティティ」（4 項目）

各項目の設問に続く文章を、「肯定的な局面」から「否定的な局面」まで、7 ポイントスケールで回答を求めた。

１.「生きることに私は…」に「何の目標も目的もない」から「非常にはっきりした目標や目的をもっている」まで。

２.「私の生活を考えると私は・・・」に関して、「何のためにいるのかわからない」から「今生きている理由がはっきりしている」まで

３.「私は生活の中で…」に対して「何をしたらよいのかわからない」から「自分のすべきことや役割がはっきりしている」まで。

４.「私は現在やっている活動や役割に対して…」に関して、「全く消極的である」から「積極的に一生懸命うちこんでやっている」まで。

２）「世代性」

１.「私が死んでも，人は私のことを覚えていてくれるだろう」

２.「私が人のためにしてきたことは，後世にも残ると思う」
３.「自分の経験や知識を人に伝えるようにしている」
４.「何かに向かって前進していると感じる」
５.「無理のない範囲で，募金をしたい」

３)「コミュニティ感覚」

McMillan & Chavis（1986）が作成した「Sensen of Community Index」の日本語版（笹尾，2007）12 項目から、9 項目を採用した。

１．この地域に住む多くの人と顔見知りである。
２．この地域は、わたしにとって居心地が良い
３．この地域の住人のほとんどが私のことを知っている
４．この地域のあり方に対して、影響力を持っている
５．この地域で何か問題が生じたとき、住人がそれを自ら解決することができる
６．この地域は、私にとって住むのに適している
７．この地域に住む人々は、皆同じような価値観を共有している
８．私とこの地域に住む人々は、この地域に同じものを期待している
９．この地域に住み続けると思う

４)「社会貢献意識」

片桐（2012）が作成した「社会貢献志向」を参考に、5 項目を使用した。

１．自分の楽しみをしながら社会に貢献していきたい
２．地域活動に積極的に参加したい
３．住んでいる地域に貢献したい
４．社会で問題になっていることの役に立ちたい
５．社会に対してなにか恩返しをしたい

５)「交流」3 項目

１．自分と違う年齢層・世代の人たちとの交流が広がった
２．これまで知らなかった近所の人たちとの交流が広がった

３．自分の住む地域以外の人たちとの交流が広がった

６）「つながりからの学び」４項目

１．興味と関心が広がった

２．いろいろな価値や考えを知るきっかけになった

３．自分自身を知る機会になった

４．地域や社会の課題や問題がわかった

第３項　結果

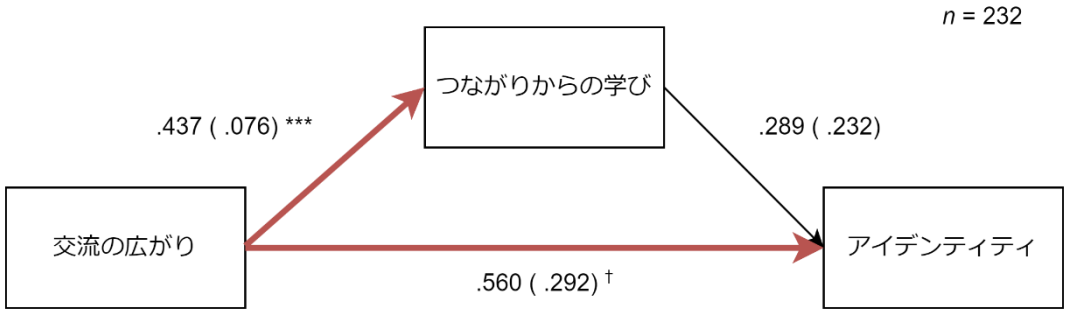
研究４では、社会参加活動へ参加して得た「交流の広がり」の発達の４側面それぞれに対する影響が、「つながりからの学び」を介することによって高まるかを検討した。このため、分析は《調査４》からグループ活動に加入し実際に活動している社会参加活動有群（n=299）のみを対象に行った。

「交流の広がり」の発達４側面への影響に対する「学び」の媒介効果

発達の４側面すべてに共通である「交流の広がり」と「つながりからの学び」の関係は、回帰分析の結果有意な正の効果が示された（B = .437, p < .001）。以下、発達の変数ごとに媒介効果の検定結果について述べる。

１）「アイデンティティ」

図７－２　「つながりからの学び」による交流の広がりからアイデンティティへの効果の媒介

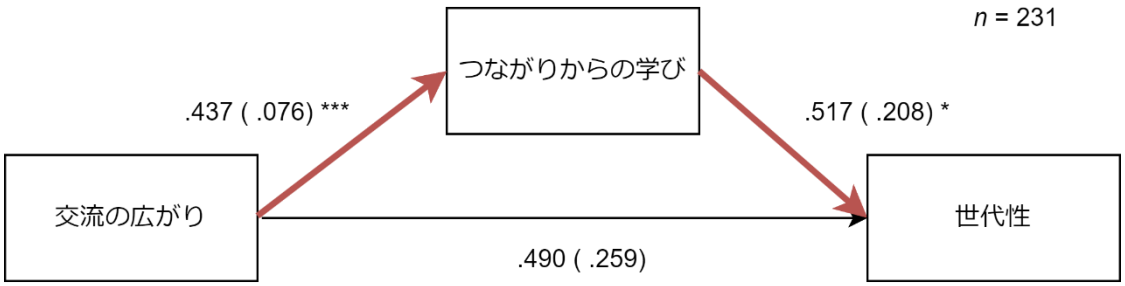


$^{***}p < .001$, $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

「アイデンティティ」に関しては、交流から「アイデンティティ」へは、直接効果（B = .695, p < .05）が有意であった。しかしつながりからの学びと交流を独立変数、「アイデンティティ」を従属変数とした重回帰分析の結果、つながりからの学びから「アイデンティティ」へは非有意（B = .289, $n.s$）であった。

２）「世代性」

図７－３　「つながりからの学び」による交流の広がりから「世代性」への効果の媒介

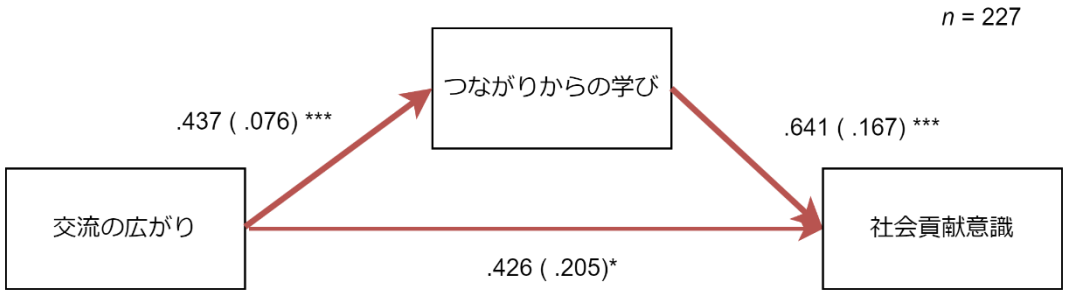


$^{***}p < .001, ^{**}p < .01, ^{*}p < .05, ^{\dagger}p < .10$

「世代性」に関しては、つながりからの学びと交流を独立変数、「世代性」を従属変数とした重回帰分析の結果、つながりからの学びから「世代性」への有意な効果が示され（B = .517, p < .05)、交流から「世代性」へは、直接効果（B = .728, p < .01）からつながりからの学びを媒介とした場合には非有意となり完全に媒介していることが示された（B = .490, ns)。交流がつながりからの学びを媒介として「世代性」に与える間接効果は有意であった（z = 2.61, p < .01)。

３）「社会貢献意識」

図７－４　「つながりからの学び」による交流の広がりから社会貢献意識への効果の媒介

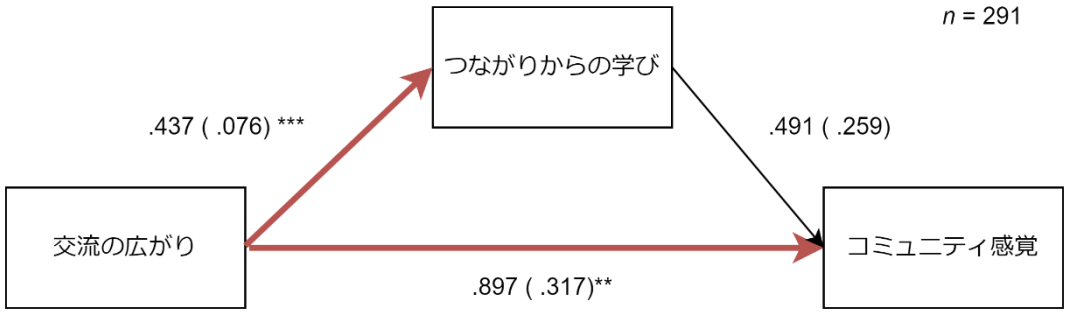


$^{***}p < .001$, $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

「社会貢献意識」に関しては、つながりからの学びと交流の広がりを独立変数、「社会貢献意識」を従属変数とした重回帰分析の結果、つながりからの学びから「社会貢献意識」への有意な効果が示され（B = .641, p < .001）、交流から「社会貢献意識」へは、直接効果（B = .718, p < .001）からつながりからの学びを媒介とした場合にも有意となり（B = .426, p < .05）、つながりからの学びを媒介した場合には交流の広がりから「社会貢献意識」との関連の強さが下がった。交流がつながりからの学びを媒介として「社会貢献意識」に与える間接効果は有意であった（z = 2.48, p < .05）。

４）「コミュニティ感覚」

図７－５　「つながりからの学び」による「交流の広がり」からコミュニティ感覚への効果の媒介



$^{***}p < .001$, $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

「コミュニティ感覚」に関しては、つながりからの学びと交流の広がりを独立変数、「コミュニティ感覚」を従属変数とした重回帰分析の結果、つながりからの学びから「コミュニティ感覚」は有意ではなかった（B = .491, *ns*）。直接効果は有意で（B = 1.103, $p < .001$）あった。

第４項　「交流の広がり」からの発達への影響における「つながりからの学び」の媒介効果

【研究４－１】では、活動をとおして広がる人との交流が影響する発達響は、「つながりからの学び」を媒介することで促進されるかについて検討した。なお、「アイデンティティ」は、【研究３－２】の結果において有意な関連が示されなかったが、【研究４－１】における回帰分析では、交流の広がりとの関連において、有意な結果が示されたため、間接効果の検討を試みた。

「アイデンティティ」と「コミュニティ感覚」は、人との交流によって高まるが、「つながりからの学び」は影響しないことが示され、「世代性」と「社会貢献意識」は、「つながりからの学び」が生じることによって高まることが示された。

これらの結果からは、社会活動へ参加して広がる交流は、高齢者の発達へ影響するが、「世代性」の発達には、「つながりからの学び」が重要であることが明らかになった。

【研究４－１】におけるすべての発達に人との交流は重要であるが、「つながりからの学び」はすべての発達は促進しないことが示された。このことから、発達の視点から見ると学びの影響は、限定した発達においてのみ影響要因となり得るが、学びの視点から見ると、学びが生じても発達につながらないことはなく、学びが生じれば発達に影響していることから、学びが発達につながるという捉え方が可能である。学び影響する発達は【研究４－１】の結果からは限定的で、「アイデンティティ」は「つながりからの学び」が影響されないことが示されている。しかし田中（2011）は、学びがアイデンティティの形成へ影響することを指摘しており、田中の言う学びが「つながりからの学び」ではない可能性も考えらえるが、これについてはさらなる検討が必要である。

第２節　社会参加活動をとおして得た仲間の学びへの影響【研究４－２】

「人とのつながり」が学びのきっかけになることが先行研究でも示され、【研究１－１】のインタビュー調査の分析からも、人との関係が学びに関連していることが明らかになった。本節では、つながりの強さが「つながりからの学び」に影響するかという視点から、「強いつながり」である仲間の存在が学びを促進するかを検討する【研究４－２】

第１項　目的と方法

【研究４－２】では、交流の広がりからつながりからの学びへの影響が、仲間の存在を介することで高まるかについて検討することを目的とした。

《調査４》の宝塚の社会調査のデータより、社会参加活動有群（n=299, 65.6%）のみを分析対象として、「交流の広がり」を予測変数、「つながりからの学び」を結果変数、「仲間の獲得」を媒介変数として媒介分析を行った。Baron & Kenny (1986) が示した方法を参照し、最初に予測変数である交流の広がりと媒介変数である仲間の獲得の回帰分析を行い、次に交流の広がりと仲間の獲得を独立変数として結果変数のつながりからの学び従属変数とした重回帰分析を行った。仲間の獲得の間接効果の検定は、Sobel 検定（Sobel, 1982）を使用した。

使用した項目

「交流の広がり」3 項目

１．自分と違う年齢層・世代の人たちとの交流が広がった

２．これまで知らなかった近所の人たちとの交流が広がった

３．自分の住む地域以外の人たちとの交流が広がった

「つながりからの学び」4 項目

１．興味と関心が広がった

２．いろいろな価値や考えを知るきっかけになった

３．自分自身を知る機会になった

４．地域や社会の課題や問題がわかった

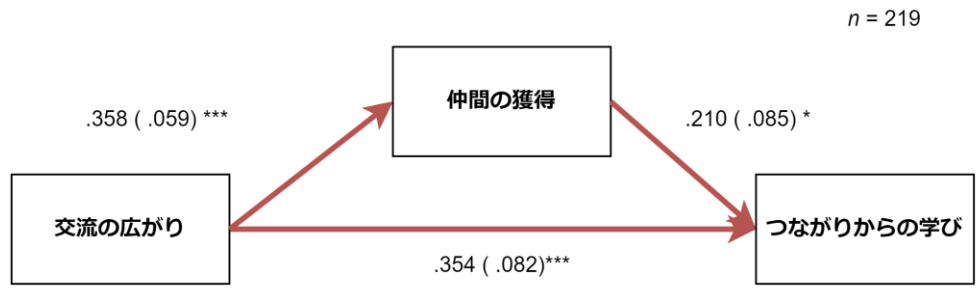
「仲間の獲得」

「(参加している) 活動で新しい友人は何人できました」の設問に「１．できなかった、２．１人～３人、３．４人～８人、４．８人以上」か１つ選択するように回答を求めた。

第２項　結果と考察

媒介分析の結果、「交流の広がり」から「つながりからの学び」の影響において、「仲間の獲得」から「つながりからの学び」への影響は有意な結果（B = .210, p < .05）であり、仲間を獲得することの間接効果は有意であった（z = 2.29, p < .05)。つまり、仲間づくりが「つながりからの学び」を促進する可能性が示された。しかし、交流の広がりから「つながりからの学び」への直接効果（B = .437, p < .001）は、仲間の獲得を媒介しても有意な結果が示された（B = .354, p < .001）ため、仲間ができることは「つながりからの学び」を促進するが、仲間がいなくても多様な交流が広がることで「つながりからの学び」は促進されることが明らかになった。

図７―６　仲間の獲得による「交流の広がり」から「つながりからの学び」への効果の媒介



$^{***}p < .001$, $^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$, $^{\dagger}p < .10$

Jarvis(1987)は、学びは新しい価値観に触れることによって生じるとしており、仲間の存在は当然語らう時間が増え、より多くの話題の共有が増える。仲間とのコミュニケーションは新しい価値観と出会うきっかけでもある。また仲間という「強いつながり」ではなくても、多様な人との交流（「弱いつながり」）もコミュニケーションが増加することで、新しい価値観に触れる機会も増える。このこと

においても、コミュニケーションの機会を増やすことは、「つながりからの学び」を促進することが考えられる。

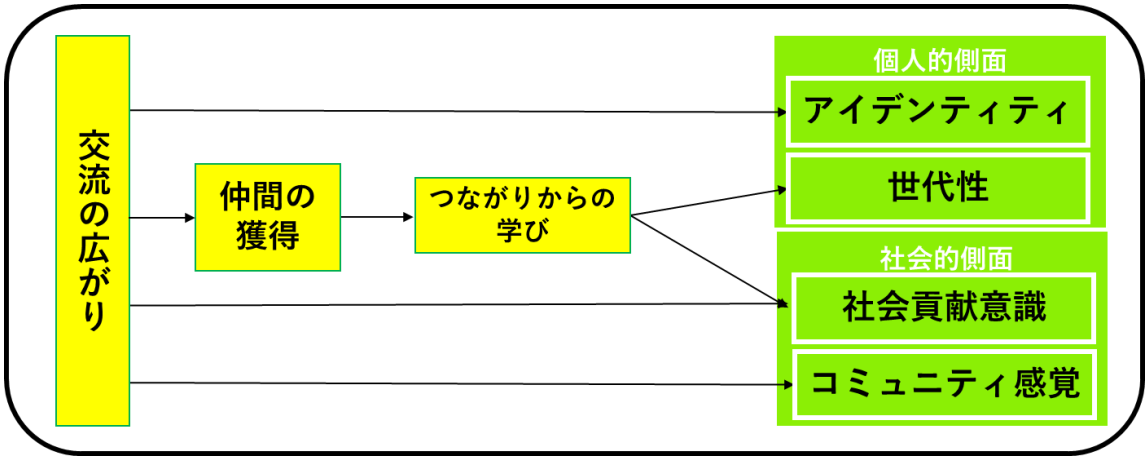
新しい人間関係の構築が煩わしいと感じる高齢者でも、社会活動へ参加し家族以外の多様な人と交流することで、学びが促進され、発達する可能性が示唆された。

第３節　社会参加活動における「つながりからの学び」の発達への影響

【研究４】の結果を図７－７にまとめた。

【研究４】の結果から、「アイデンティティ」と「コミュニティ感覚」については、「つながりからの学び」が生じる必要はなく、多様な人と交流することで促進されることが示された。「世代性」と「社会貢献意識」については、「つながりからの学び」が重要であることが示された。

図７－７　社会参加活動における発達プロセス（【研究４】の結果）



「つながりからの学び」は仲間の存在が促進させることが示されたが、仲間の存在だけではなく、社会活動をとおして人との交流を増やすことによっても、「つながりからの学び」は促進されることが考えらえる。「つながりからの学び」は人との交流から生じることから、人との交流の増加により、「つながりからの学び」も増加する可能性が示唆される。「世代性」は「つながりからの学び」が生じることが重要であることから、仲間づくりは「世代性」を高めるのに有効であると考えられる。しかし仲間（「強いつながり」）ができないと「世代性」が高まらないわけではなく、人との交流（「弱いつながり」）の増加によっても、「つながりから

の学び」が増幅し、「世代性」が高まる可能性が考えられる。

【研究４】は、社会参加活動参加者を対象にした分析であるが、「つながりからの学び」が「世代性」を高めることから、【研究２】で示された生きがい就労における参加者同士の交流の要望に事業者が答えることの効果も示唆される。「世代性」は「世話」に関する概念が含まれていることから、介護施設等における生きがい就労では、仲間づくりをとおして「世代性」が高まることが職務能力の向上につながる可能性があるが考えられる。参加者同士の交流の支援は、仲間の効果から「つながりからの学び」が高まり、「世代性」の促進が期待できる。しかし仲間ができない人、もしは仲間を必要としない人がいる場合でも、交流機会を増加させることで「つながりからの学び」が高まり、「世代性」が促進される可能性がある。このことから、介護施設における生きがい就労においては、事業者は従業員の交流機会を設けることを単なる楽しみの機会、福利厚生と考えるのではなく、世代性を高める、つまり質の高い労働者となる機会と捉えて積極的に取り組むべきだと考えられる。

第３部　総合考察

第８章　知見のまとめと総合考察

本研究は、社会活動をとおして得られる，
人とのつながりがもたらす学びと発達について検討した。本研究における社会活動とは、これまで老年学で個別に扱われて検討されてきた社会参加活動と就労を合わせた概念である。社会参加活動と就労は高齢者にとっては、どちらも高齢期の過ごし方の選択肢の１つであり、超高齢社会はボランティアや就労の担い手として、人材不足等の課題解消の方法の１つとして高齢者の活躍を期待している。

これまで教育学では、学びが発達をもたらすことが指摘されているが（堀，2010)、社会活動をとおして得られる人とのつながりが、学びや発達をもたらすと指摘されている（岡本，1997；上田・中原，2013)。しかしこれまで、社会老年学では、学びや発達はほとんど注目されてこなかった。

人とのつながり、学び、発達は、高齢者にとってはすべて社会活動がもたらし得る効果である。しかし人とのつながりは社会老年学、学びは生涯学習、発達は生涯発達と、これまで個別の学問領域で検討されてきた。本研究では、これら社会活動をとおした人とのつながり、学び、発達を一連のプロセスとして捉え、高齢者が社会活動へ参加することによって人とつながり、そこから学びを得て、発達へ向かうと「社会活動をとおした発達プロセス（仮説モデル)」を提案した。

本研究では、社会老年学の立場から、人とのつながり、学び、発達の関係について明らかにし、仮説モデルを検証することを目的とした。仮説モデルの検証に際し、以下３つの課題を検討した。

１.「社会活動をとおした学び」とはどのようなものか

２．社会活動は発達を促進するか

３.「つながりからの学び」は発達に影響するか

第１節で課題１、第２節で課題２、第３節で課題３について、知見のまとめと考察を述べる。

第１節　「社会活動をとおした学び」とはどのようなものか（課題１）

本研究では、高齢者の社会活動における学びとして、生涯学習の分野における Jarvis(2010)の学びの分類から、学ぼうとしなくても経験から偶発的に生じる学びである Incidental Learning に注目した。この理由としては、高齢者の社会活動においては、学ぼうとして学ぶよりも活動をとおして偶発的に学ぶことが多く、社会活動における学びにおいては重要であると考えたためである。本研究では、高齢者の社会活動をとおした Incidental Learning を、「社会活動をとおした学び」と呼ぶこととした。

高齢者の「社会活動をとおした学び」の検討は多くないが、Chen(2016)は心身の健康の促進や人生の目的の確立、生活の充実等の学びの側面として、日常における態度や行動の変化を明らかにした。しかし、Chen の研究はボランティア活動のみの検討であったことと、学びについては”Learning“とひとまとめに捉え、どのような学びが生じたかは明らかにしていないという問題点があった。

Chen の研究の課題を踏まえ、【研究１】において「社会活動をとおした学び」はどのようなものかを検討した。高齢者の多様な社会活動から、本研究では、社会や人とのつながりを得るきっかけづくりになることが多い自治体主催の高齢者大学と、高齢者に人気が高い社会参加活動の１つである趣味の活動から民間の絵画教室、地域における高齢者就労の機会を提供する事業から自治体主催の生きがい就労の、３種類の社会活動から検討した。

「社会活動をとおした学び」は、健康に関する認識や新しい自分の価値の発見という「自己に関する認識」と、活動や仲間、情報といった自己以外の「環境に関する認識」の２つのカテゴリーが析出され、３種の活動の種類によって学びの内容に違いがあることが明らかになった。さらに活動の目的、内容、継続期間、人間関係等が学びの内容に影響すること、活動継続が学びを深化させることが見いだされた。

【研究１】で明らかになった「社会活動をとおした学び」の２つのカテゴリーのうち、「自己に関する認識」は、Chen が明らかにした態度や行動の変化である健康の促進や自己評価、新しい人生の目的の設定等に関連する内容であったことが見いだされた。例えば、健康に関する認識の変化という学びが生じることで、健康促進につながる食事や運動を増やすようになるというように、活動をとおして

生じた学びの内容は、その内容に応じて態度や行動が変化すると考えられる。「自己に関する認識」は、人生の目的等の内容も含まれていたことから、「社会活動をとおした学び」は、高齢期の生き方にも変化を与えることが考えられる。「環境に関する認識」というカテゴリーには、地域や社会に関する課題などの学びがあったことも明らかになった。このような学びは、社会的課題の解消等、社会貢献活動への実際の参加というような、高齢者の行動を社会への効果を高める行動へと変化させる可能性が示唆された。

本研究では、さらに「社会活動をとおした学び」を３つの学びに分類した。人とのインタラクションがきっかけとなる「つながりからの学び」、インタラクションがない人との出会いがきっかけとなる「たまたま出会った人からの学び」、仕事などをとおして情報を得ることによる「情報取得からの学び」である。３つの学びのうち、「つながりからの学び」は、高齢者にとって大切なコミュニケーションが生じる点で重要であることから、「つながりからの学び」に焦点をあてて検討した。本研究では、「つながりからの学び」をインタラクションがある人との関係がきっかけとして生じる学びと定義した。

【研究１】では、「つながりからの学び」に関する発言が多く、高齢者にとってはインタラクションのある関係は、コミュニケーションという点で重要なだけではなく、学びという観点からも重要であることが示された。

本研究から、「つながりからの学び」のきっかけになる「人とのつながり」には、軽い話をする程度の「弱いつながり」と、仲間という「強いつながり」の２種類あることが明らかになった。本研究では「弱いつながり」を「交流の広がり」と呼び、「強いつながり」を「仲間の獲得」と呼ぶこととした。「交流の広がり」は楽しみをもたらす学び、「仲間の獲得」は継続動機のモチベーションにつながる学びというそれぞれ異なる「つながりからの学び」があることが明らかになった。

これまでネットワーク研究では「弱いつながり」は、情報の交換・獲得をもたらすことが指摘されている（Granovetter, 1973）が、本研究結果からは、それだけではなく楽しみをもたらす学びがあることも示唆された。楽しみというのは、一過性の印象があるが、活動の楽しみは活動継続にプラスに働くと考えらえる。活動継続は学びを深化させることが【研究１－２】の結果から示されたことから、たとえ「弱いつながり」である「交流の広がり」だけの活動であっても活動を継

続することによって、「つながりからの学び」が深まる可能性が考えられる。

さらに【研究４－２】では、活動をとおして「仲間の獲得」があることは、「つながりからの学び」を高める効果があることが示され、高齢期の活動をとおした仲間づくりは、学びの効果を促進する可能性があることも示唆された。

高齢者の活動は社会的孤立の防止や健康促進の目的から、仲間づくりが注目されることが多い。高齢者の生涯学習等においても、高齢者の仲間づくりが重視されることも多く、仲間づくりのためのプロジェクトをカリキュラムに含めることもある。しかし社会活動に参加する高齢者の中には、人との親密な関係の構築を煩わしく思う人がいる可能性がある。このような高齢者にとっては、仲間づくりの推進が継続意欲を阻害することも考えられる。本研究結果からは、高齢者の「交流の広がり」によっても「つながりからの学び」が生じることが明らかになったことから、学びという観点では無理に「強いつながり」を作る必要はなく、その方がより多くの高齢者の参加を期待することができると考えられる。

第２節　社会活動は発達を促進するか（課題２）

これまで社会老年学では、社会活動の効果について健康や主観的幸福感等の個人の効果が注目されてきたが、現代においては、社会にもたらす効果の視点も必要であることが指摘されている（片桐，2012）。よって、高齢者の発達を個人的側面の発達と社会的側面の発達という、２つの側面を合わせて本研究の発達とした。個人的側面は「アイデンティティ」と「世代性」、社会的側面は「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」という新しい視点からの発達を取り上げた。

【研究３】では、社会活動と発達の関連を検討した。就労は社会的側面の発達との関連は見られず、個人的側面のみとの関連が示された。一方社会参加活動は、個人的側面と社会的側面の両方の発達との関連が明らかになった。

【研究４―１】では、「弱いつながり」である「交流の広がり」は個人的側面と社会的側面の両方の発達を促進することが明らかになった。このことから、高齢者の社会活動をとおした発達は、「交流の広がり」が重要であることが明らかになった。

「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」は、これまでボランティア活動等への参加の促進要因として検討されることが多かった（片桐，2012；笹尾，2007）。

しかし本研究結果からは、社会活動がこれらの発達の促進要因になる可能性も示された。

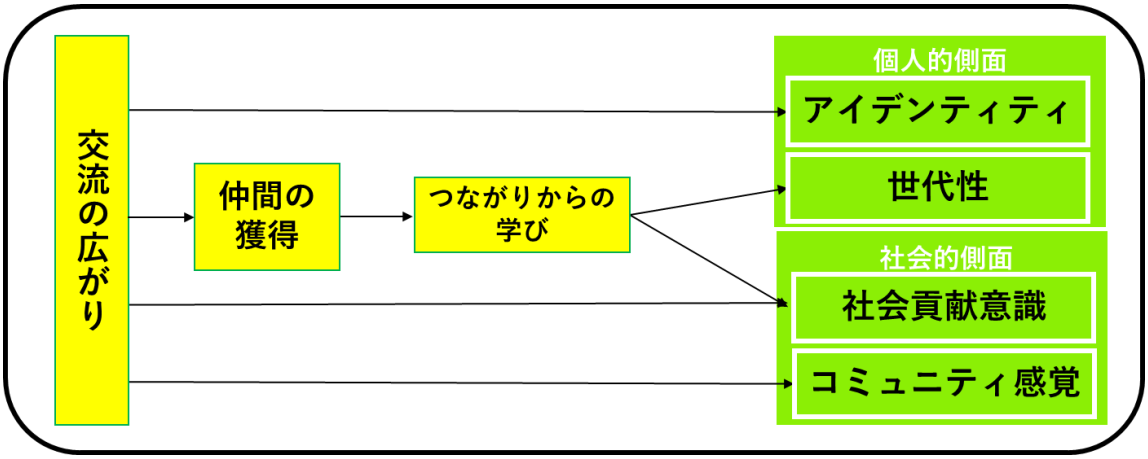
しかし、就労においては、社会的側面の発達との関連が示されなかった。これについては、仕事では人間関係の多様な交流が少なく、限られた人間関係との交流だけの職場がある可能性が考えられ、「交流の広がり」が得らない仕事があることが影響した可能性も考えられる。しかし就労においても【研究２】の、生きがい就労参加者は社会貢献に関する満足や意識の高まりが明らかになった。このことから、介護施設での仕事のように、社会貢献や社会的課題に関連する仕事等、仕事の内容や職種によっては社会的側面の発達が促進される可能性が考えられる。

第３節　社会活動における「つながりからの学び」は発達を促進するか（課題３）

社会老年学では、高齢者の社会活動の効果として、心身の健康増進や生きがい創出に関する研究が中心であった（片桐，2012１；辻，2016）が、大浦（1996）は、教育学の立場から若い世代においては活動による経験から学びがあり、発達へ向かうという、学びと発達の効果を指摘している。しかし高齢者も同様に学びと発達の効果があるかについては言及していない。一方で、発達研究においては、学びを検討した研究は少ない。本研究では、高齢者の社会活動における「つながりからの学び」と発達の関係について、社会調査から検討を行った。

【研究４－２】では、「つながりからの学び」が促進する発達は、「世代性」と「社会貢献意識」であることが示され、「アイデンティティ」と「コミュニティ感覚」は「つながりからの学び」は関連せず、「交流の広がり」によって促進されることが明らかになった。「世代性」は「交流の広がり」だけでは促進されず、「つながりからの学び」が重要であることが明らかになり、「社会貢献意識」は「つながりからの学び」によっても高まるが、「交流の広がり」も促進することが示された（図８－１）。

図８－１　社会参加活動における発達プロセス（【研究４】の結果）再掲



本研究では、「アイデンティティ」と「つながりからの学び」とは関連が示されなかった。しかし田中（2011）は、ボランティアを通した「つながりからの学び」と「アイデンティティ」が関連するという、本研究結果とは違う指摘をしている。田中は、組織単位で行った活動成果への評価や組織の活動経験がもたらす地域への関心という、組織の所属や地域に関する意識の形成も学びとして捉えている。アイデンティティと意識については、シルバー人材センターと「アイデンティティ」の関係について中原（2014）は、請け負った仕事の量より組織の一員として働く経験が重要であることを指摘している。つまり組織の一員としての帰属意識が「アイデンティティ」に関連すると考えられる。このような地域社会や組織への帰属意識が関連する自己は、他者や社会との「関係性にもとづくアイデンティティ（岡本，1996）」や、アジア人に優性とされている関係性から捉える「依存的自己観（Marks & Kitayama, 1991）」に関連すると考えられる。このことから日本人の「アイデンティティ」については、地域社会や組織の一員としての帰属意識や関心の高まりが重要であることが考えられる。【研究１】の結果である「社会活動をとおした学び」の内容から考えると、帰属意識や関心は地域や組織の活動に関する情報という「つながりからの学び」によって形成される可能性が示唆される。このような「つながりからの学び」は、「アイデンティティ」に関連する要因の一つである所属意識に関連すると考えられ、直接「アイデンティティ」に関連しない可能性が考えられる。このことが本研究で「つながりからの学び」と「アイデンティティ」に関連しなかったことに影響した可能性が考えられる。

「つながりからの学び」が「コミュニティ感覚」と関連がなかったことについても、「コミュニティ感覚」においては地域の住民としての意識の高まり（笹尾, 2007）が重要である。【研究１】の結果から、地域社会の情報という「つながりからの学び」が地域住民としての意識へ関連する可能性が考えられ、「つながりからの学び」は「コミュニティ感覚」へ直接関連せず、「コミュニティ感覚」に関連する要因の一つである地域住民としての意識に関連する可能性が考えられる

「アイデンティティ」と「コミュニティ感覚」が「つながりからの学び」と関連しなかったことについて考えらえるもう一つの理由は、《調査４》で使用した「つながりからの学び」の調査項目に、組織や地域に関する項目がなかったことも可能性として考えられる。

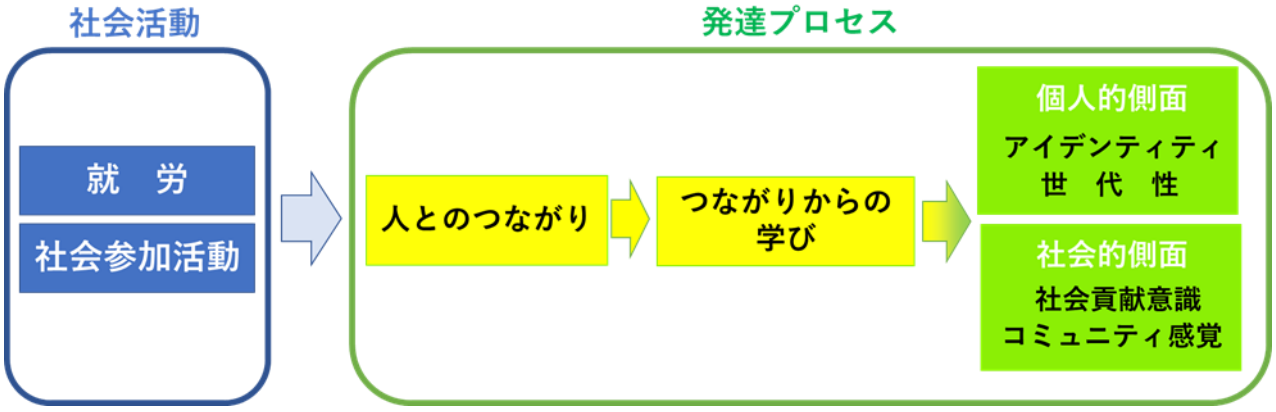
一方で、「つながりからの学び」が「世代性」と「社会貢献意識」を促進するという本研究の結果については、地域や社会の課題の認識という「つながりからの学び」が影響した可能性が考えられる。「世代性」の「世話」や「貢献」(Erikson, Erikson, & Kivnik, 1986/1990)、「社会貢献意識」の社会への貢献意欲という下位概念（片桐, 2012）は、社会的課題に関して学ぶことによって高まる可能性が示唆される。

これまで学びについては、活動をとおした学びをひとまとめにして捉えたものであり、どのような学びが得られたかという学びの内容から検討したものは少ない。本研究結果からは、「つながりからの学び」が直接関連する発達と、関連しない発達があることが見いだされ、さらにどのような学びがあったかという具体的な内容が、どの発達を促進するかに関連する可能性も見いだされた。このことから、発達と「つながりの学び」との関連については、何について学んだかという学びの内容も重要であることが見いだされた。

第４節　「社会活動をとおした高齢者の発達モデル（理論モデル)」

本研究は、これまで個別の分野で検討されてきた「人とのつながり（社会老年学)」、「つながりからの学び（生涯学習)」、発達（生涯発達）を、一連の流れとして捉え、「社会活動をとおした高齢期の発達プロセス（仮説モデル)」を提案した（図８－２)。これは高齢者が社会活動で「人とのつながり」が広がり、学びながら発達へ向かうという発達プロセスとして示したモデルである。

図８－２　社会活動をとおした高齢期の発達プロセス（仮説モデル）再掲



本研究の目的は、この仮説モデルで示した「人とのつながり」、「つながりからの学び」、発達の関係を明らかにし、仮説モデルを検証することであった。

まず、「人とのつながり」、「つながりからの学び」、発達の関係について以下でまとめる。

「人とのつながり」、「つながりからの学び」、発達の関係性について

まず社会活動における「人とのつながり」に関しては、本研究から２種類のつながりがあることが明らかになった。一つは、軽い会話をする程度の「弱いつながり」、もう一つは友人や仲間という「強いつながり」である。本研究では、「弱いつながり」を「交流の広がり」、「強いつながり」を「仲間の獲得」と呼びそれぞれのつながりと学び、発達の関係を検討した。

「つながりからの学び」は、「交流の広がり」、「仲間の獲得」というそれぞれの関係から、異なる２種類の「つながりからの学び」が得られることが明らかになった。「仲間の獲得」は、「交流の広がり」によってもたらされるため、「仲間の獲得」があった人は、「交流の広がり」と「仲間の獲得」それぞれから、２種類の「つながりからの学び」の獲得が可能であると考えられる。

「つながりからの学び」と発達の関係では、「つながりからの学び」によって促進される発達と、「つながりからの学び」が関連せず「交流の広がり」から促進される発達があることが明らかになった。本研究結果からは、「交流の広がり」はすべての発達を促進するが、「つながりからの学び」は限定された発達においては重

要であることが示された。

本研究結果から、仮説モデルには２点について修正が必要であることが明らかになった。１つ目は、仮説モデルは「人とのつながり」と「つながりからの学び」がどちらも１種類で示されていたことである。本研究結果からは、「人とのつながり」と「つながりからの学び」はそれぞれ２種類あることが明らかになったため修正が必要である。

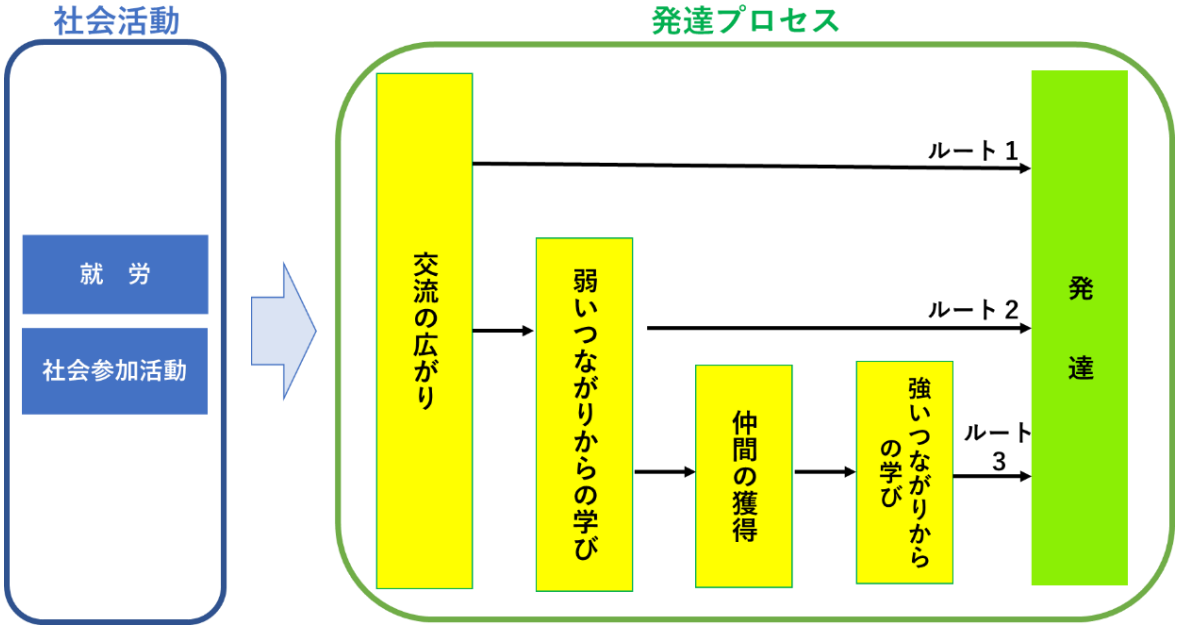
２つ目に「人とのつながり」から発達へ向かう道筋が、「つながりからの学び」を通る１種類の道筋で示されていたことである。本研究結果からは、「交流の広がり」から直接促進される発達があること、２種類の「つながりからの学び」によってもたらされる発達への道筋が２つあることが明らかになったことから、３つの道筋が必要である。

これらを踏まえて、仮説モデル（図８－２）を「社会活動をとおした高齢期の発達プロセス（理論モデル)」として、以下のように修正した（図８－３)。

このモデルは、高齢者が社会活動へ参加することで促進される発達へのプロセスについて、３つの道筋から示している。

このモデルにおける「つながりからの学び」については、「交流の広がり」と「仲間の獲得」という２種類の関係から生じる２つの「つながりからの学び」があることを勘案して修正したものである。

図８―３　社会活動をとおした高齢期の発達プロセス（理論モデル）



この理論モデルで示した発達へのプロセスが３つあることを想定している。

ルート１．活動をとおした多様な人との交流が直接発達へつながる道筋である。これは、人との交流によって、学びや仲間がなくても発達が促進されるという道筋である。

ルート２．活動をとおして「交流の広がり」が得られることで生じる「弱いつながりからの学び」が発達を促進するという道筋である。

ルート３．活動をとおした交流から「弱いつながりからの学び」を獲得し、「仲間の獲得」によって生じる「強いつながりからの学び」から発達へ向かうという道筋である。これは、「弱いつながりからの学び」と「強いつながりからの学び」の両方を得ながら発達するという道筋である。

これら３つの道筋は、発達の影響要因が「つながりからの学び」だけではなく、多様な人との交流によっても発達すること、人間関係のつながりの強さに関係なく、それぞれの関係からそれぞれの「つながりからの学び」が生じること、仲間を作ることによって、２種類の関係から生じる２つの「つながりからの学び」を獲得しながら発達へ向かうことが可能であることを示した。

第９章　本研究の貢献と今後の展望

第１節　理論的貢献

本研究の理論的貢献は、まず１つ目に、社会老年学の立場から高齢者が社会活動をとおして学び、発達することを、科学的エビデンスを持って示したことである。社会老年学ではこれまで、高齢者の社会活動の効果として、人間関係の広がりや心身の健康、生きがい創出等が検討されてきた（片桐，2012；辻，2016）。しかし本研究結果から、社会活動をとおした経験から偶発的に生じる「社会活動をとおした学び」が得られることを明らかにし、活動へ参加することで軽く会話する程度の関係（「交流の広がり」）でも、高齢者の発達が促進されることを示した。高齢者も若い世代と同様に、社会活動をとおして学びと発達が得られることを示し、社会老年学における社会活動による学びと発達の検討の必要性を示した。

２つ目に従来社会活動のもたらす効果としては個人への影響の検討がほとんどであったが、高齢者の社会活動における社会にもたらす効果についても学びと発達という視点から明らかにしたことである。片桐（2012）は、「社会効益性」として社会貢献活動が社会へもたらす効果が高いことを指摘したが、本研究では社会貢献活動に限らず、社会活動をとおした発達によっても、社会へもたらす効果が高まる可能性を示した。

社会貢献に関連する発達は、インタラクションのある人との関係がもたらす「つながりからの学び」が促進することが明らかになった。それにとどまらず軽い会話程度の「弱いつながり」である「交流の広がり」は「コミュニティ感覚」を高めることが示され、社会活動における社会への効果という視点では、人との交流と学びが重要であることを示した。

３つ目に、ネットワーク研究に、「弱いつながり」における学びと発達の効果に関する知見を提供したことである。これまで「弱いつながり」は情報の交換という効果が指摘されてきた（Granovetter，1973）が、学びと発達という効果の視点からも「弱いつながり」の重要性を示した。

本研究では、社会活動をとおして得られる人間関係には、軽い会話だけの「弱いつながり（「交流の広がり」）」と仲間や友人という「強いつながり（「仲間の獲得」）」の２種類のつながりがあることを確認し、前者は楽しみをもたらす学び、

後者は継続のモチベーションをもたらす学びという、異なる学びが生じることを示した。「弱いつながり」からも学びが生じることから、「弱いつながり」を増やすことで、「強いつながり」を無理に持たなくても、学びの効果が得られることを示し、学びにおいては「弱いつながり」も重要であることを明らかにした。

さらに、本研究において「弱いつながり」である「交流の広がり」は、「アイデンティティ」と「世代性」という個人面の発達と、「社会貢献意識」と「コミュニティ感覚」という社会的側面の発達の両方を促進することを示し、発達においては「弱いつながり」も重要であることを明らかにした。

４つ目に、生涯学習の研究に、高齢者の社会活動をとおした偶発的な学びに関する知見を提供したことである。これまで生涯学習における高齢者の学びの検討は、どのような学びが生じたかについて、学びを構成する詳しい要素を分類して詳細に検討した研究は少なかった。本研究では活動の経験をとおして偶発的に学ぶ「社会活動をとおした学び」には、自己の学びの他、活動や地域社会における課題等、自己以外の学びがあること、これまであまり検討されてこなかった就労においても「社会活動をとおした学び」が生じていたことを明らかにした。「社会活動をとおした学び」は、これからの自分の生き方や年齢の受容など、教科書等では学べない高齢期の人生に関連する学びがあることが明らかになり、高齢期の偶発的な学び（「社会活動をとおした学び」）の検討の必要性を示した。

第２節　社会的貢献

本研究では、高齢者の社会活動をとおして得られる学びと発達について検討した。高齢者の発達は、社会における実践においてあまり注目されていない。学習活動へ参加する高齢者自身においても、学習を目的としているにもかかわらず、学びや発達を重要視しない人もいる。学びを知的欲求の充足や興味に基づいた楽しみと捉え、若い世代のような発達につながると考える高齢者は多くはないのではないだろうか。

本研究では、高齢者が社会活動をとおして人との交流を広げることによって、これからの人生の目標や新しい自分の発見、高齢者の強み、社会的課題等の学びが得られること、また学びがあることが社会貢献につながる発達も促進することを示した。さらに高齢期の発達は、軽く交流するだけのつながりでも促進するこ

とが明らかになり、個人の発達だけではなく社会貢献や地域づくりに関連する発達も促進することが明らかになった。

本研究結果がもたらす社会的貢献について、１つは、高齢者への効果、２つめに自治体における高齢者支援の意義の拡大、３つめはボランティア以外の活動実践における高齢者支援への示唆が考えられる。

まず１つ目の高齢者への効果は、本研究が高齢者の社会活動への参加によって、学びや発達が得られることを示し、高齢者における活動参加の意義を広げたことである。これまで高齢者の社会活動は、健康維持や社会的孤立防止などの効果が注目されてきた。高齢者自身も健康の衰退等、ネガティブな側面に目が向くことが多く、社会活動も健康のために参加する人が多いと考えられる。本研究は、社会活動から人とのつながりを持つことによって、高齢者も若い世代のように学び、発達できるということを実証的データから示した。高齢者が、自身が高齢期になっても発達し得るのだと知ることは、人生への積極的な取り組みを促し、彼らの自身につながり、well-being にもプラスに働くと考えられる。

２つ目の、自治体の高齢者支援の意義の拡大については、健康や孤立防止という効果以外に、地域づくり等につながる発達という視点からの社会への効果という、高齢者への支援に対する新しい意義を示したことである。本研究では高齢者が社会活動をとおした人との交流を持つことにより、「社会貢献意識」や「コミュニティ感覚」という社会的側面の発達が期待できることを示した。これは地域の高齢者同士の交流機会が、高齢者の発達を促進する可能性があり、社会への効果を高める可能性があるということである。これは自治体の高齢者同士の交流支援へ期待できる新しい効果であると考えられる。

３つ目のボランティア以外の活動実践における高齢者支援への示唆については、実践における参加者の社会貢献活動への参加を促すだけではなく、社会貢献につながる発達の促進という視点の重要性を示したことである。本研究では、高齢者の社会活動における人とのつながりによる「つながりからの学び」は、社会貢献につながる「世代性」と「社会貢献意識」の発達を促進することを実証的に示した。近年は公民館等、自治体が主催する高齢者の学習施設等の実践において、生涯学習が参加者の社会貢献につながらないことが問題となっている。しかし本研究からは、ボランティア以外の社会参加活動においても、学びをとおして社会貢

献につながる発達が得られる可能性を示唆した。これにより、社会貢献活動への接続だけではない、高齢者の発達支援という高齢者支援の新しい在り方への示唆を提供することを可能にすると考えられる。

第３節　本研究の限界と今後の展望

本研究の限界としては以下の３つが考えられる。１つには本研究は、これまであまり検討されなかった高齢者の学びについて、社会活動をとおしてどのような学びがあるかという学びの内容を質的分析により検討した。しかし調査対象に偏りがあり、本分析結果を一般化することは難しい。また調査対象となった社会活動は、高齢者大学、絵画教室、トライアル就労の３種類であったが、現代の高齢者の活動は多様化しており、就労についても再雇用や継続雇用など多様な働き方がある。今後は社会活動の内容や範囲を広げ、さらなる検討が必要である。

２つには、《調査１》、《調査２》、《調査３》のインタビュー調査について、調査データはポジティブなエピソードが中心であった。しかし活動をとおした経験には、ネガティブな感情につながるエピソードがあったと考えられるが、インタビュー調査からはほとんどネガティブな言説は得られなかった。この理由として、１つはインタビューにおいて前向きな発言が好ましいとするインタビュイーの規範意識が働いた可能性、もう１つはインタビュアーから、ネガティブなエピソードにつながる質問がなかったという質問の不足である。発達についてはネガティブな感情や事象が発達課題になる可能性があり、課題に対してどのように乗り越えたかということも重要であることが考えられる。今後は調査方法の修正を行うことで、発達に関する質的な検討から、高齢者が活動をとおしてどのような人とのつながり持つことが発達を促進するかについても検討する必要がある。

３つには、本研究における《調査４》の社会調査は横断データであった。そのため発達に関する時間による変化を追うことができなかった。本研究で明らかになった発達に関連する「人とのつながり」や発達は、時間とともに変化することが考えられるため、活動をとおした発達を的確に捉えるためには、長期的な視点が重要である。今後は縦断データから、長期的に生じる変化も検討する必要がある。

４つめは、【研究３－２】と【研究４】において、「交流の広がり」「仲間の獲

得」、「つながりからの学び」と、発達との関係に関する検討を行ったが、使用した《調査４》の社会調査は、調査対象者と分析対象者に偏りがあった。《調査４》は、兵庫県の宝塚市在住者のみを対象にした調査であったが、宝塚市は比較的経済的にも安定した高齢者が多く、回答者は経済状況に心配がない人が多いという結果となった。社会活動においては経済的な状況が、社会参加活動への参加の有無や就労状況に影響することが考えられるため、代表性のあるサンプルによる更なる検討が必要である。

５つめに、【研究３－２】と【研究４】の分析においては、社会参加活動への参加者のみが対象であり、就労については検討できなかった。本研究では、【研究３－２】と【研究４】の社会参加活動の参加者を対象とした量的分析の結果と、【研究２】の生きがい就労の参加者を対象にした、インタビュー調査の結果を合わせて理論モデルの検討を行ったが、今後は調査項目の修正を行い、就労についても実証的に検討する必要がある。

最後に、上記の研究における問題をふまえ、本研究における質的研究と量的研究の結果から導出した、「社会活動をとおした高齢期の発達プロセス（理論モデル)」の検証と発展が今後の課題である。理論モデルの発展により、高齢者が若い世代と同様に学び、発達することが社会活動をとおして可能であること、高齢者の社会活動をとおした発達が社会への効果も高める可能性があることを、高齢者と社会にも広く周知していくことを今後の展望としたい。

＜参考文献＞

青木邦男．（2009）．高齢者向け生きがい感スケールの因子構造とその得点の検討．*山口県立大学社会福祉学部紀要*，*15*，101-108．

新井康友．（2020）．孤独死の実態と要因に関する一考察．*日本の科学者*，55(11)，11-16．

新木真理子．（2011）．特別養護老人ホーム職員のジェネラティヴィティと仕事の有能感の関連．*日本老年医学会雑誌*，*48*(6)，679-685．

有馬教寧．（2021）．高齢者の就労と生きがいに関する研究の現状と課題．*日本労務学会誌*，*21*(3)，92-102．

東憲太郎．(2018)．元気高齢者の介護助手事業について「将来の介護需給に対する高齢者ケアシステムに関する研究会」資料．経済産業省．〈chrome-https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11271366/www.meti.go.jp/press/2018/04/20180409004/20180409004-3.pdff〉（2023.9.9).

Baltes, M. M., & Lang, F. R. (1997). Everyday functioning and successful aging: the impact of resources. *Psychology and aging*, 12(3), 433.

Baltes, P. B., Reese, H. W., & Lipsitt, L. P. (1980). Life-span developmental psychology. *Annual review of psychology*, 31(1), 65-110.

Baron, R. M., & Kenny, D. A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of personality and social psychology*, 51(6), 1173.

Botwinick, J. (1977). Intellectual abilities. In J. E. Birren & K. W. Schaie (Eds.). Handbook of the psychology of aging. 1st Edition. 508-605.

Boulton-Lewis, G. M. (2010). Education and learning for the elderly: Why, how, what. *Educational gerontology*, 36(3), 213-228.

Chen, L. (2016). Not just Helping: What and how older men learn when they volunteer. *Educational Gerontology*. 42(3), 175-185.

Cheng, S. T.(2009).Generativity in later life: Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being. *Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 64, 45-54.

中小企業庁. (2014). 中小企業白書 2014. 〈https://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/H26/PDF/07Hakusyo_part3_chap2_web.pdf〉. (2023 年 12 月 7 日)

Cranton, P. (1992/1999). 入江直子, 豊田千代子, 三輪建二 (訳). おとなの学びを拓く: 自己決定と意識変容をめざして.鳳書房

Erikson, E. H. (1963). Childhood and Society. New York: WW Norton & Company. (Erikson, E. H.(1977).幼児期と社会１, (仁科弥生, 訳). 東京：みすず書房.)

Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). Vital involvement in old age. WW Norton & Company.(Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990). 老年期: 生き生きしたかかわりあい (朝長正徳, 朝長梨枝子, 訳).みすず書房.)

藤原佳典・杉原陽子・新開省二. (2005). ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響　地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義. *日本公衆衛生雑誌*, 52(4), 293-307.

古川壽亮・大野　裕・宇田英典　他. (2003). 厚生労働科学研究費補 助金厚生労働科学特別研究事業「心の健康問題と対策基盤の 実態に関する研究」*平成 14 年度分担報告書*, 127-129.

後藤智香子・後藤　純. (2017).「りくカフェ：被災地におけるコミュニティスペースの新しい展開」in　「つながりからの学びフルエイジング」とは何か：超高齢社会における学びの可能性. 森玲奈 (編). ミネルヴァ書房.

Granovetter, M. S. (1973). extend access to American Journal of Sociology. *American Journal of Sociology*, *78*(6), 1360-1380.

Grossman, M. R., & Gruenewald, T. L. (2017). Caregiving and perceived generativity: A positive and protective aspect of providing care?. *Clinical gerontologist*, 40, 435-447.

原田　謙・小林江里香・深谷太郎・村山　陽・高橋知也・藤原佳典. (2019). 高齢者の若年者に対する否定的態度に関連する要因. ―世代間関係における「もうひとつのエイジズム」―. *老年社会科学*, 41(1), 28-37.

橋本成仁・山下壮太・海野遥香. (2021). コミュニケーションと高齢者の生きがいの関連性に関する研究-SNS 利用に着目して. *土木学会論文集* D3 (土木計画学), 76(5), I_209-I_220.

Hedge, J. W., & Borman, W. C. (Eds.). (2012). The Oxford handbook of work and aging. Oxford University Press, USA.

堀　薫夫. (2012). 教育老年学と高齢者学習. 学分社

堀越政孝・辻村弘美・恩幣宏美・武居明美・斉藤洋子・岡美智代・神田　清・二渡玉　江. (2009). 手術室見学実習における学びの内容. *群馬保健学紀要*, 30, 67-75.

池田　満. (2006). 大学生の心理的コミュニティ感覚: 日本と韓国の異文化間比較. *国際基督教大学学報. IA, 教育研究*, (48), 151-160.

Jarvis, P. (1987). Meaningful and meaningless experience: Towards an analysis of learning from life. *Adult education quarterly*, 37(3), 164-172.

Jarvis, P. (2010). Adult education and lifelong learning: Theory and practice. 4th edition. Routledge.

Jarvis, P. (2012). Paradoxes of learning: On becoming an individual in society. Routledge.

焦　暁蕾. (2018). 地方都市における高齢者就労の現状と課題:「生きがい就労」の実態を注目して. *人間科学共生社会学*. 8, pp.13-30.

香川正弘・鈴木眞理・佐々木英和. (2008). やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ　よくわかる生涯学習. ミネルヴァ書房

片桐恵子. (2012). 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会.

片桐恵子.(2017).「サードエイジ」をどう生きるか　シニアと拓く高齢先端社会.東京大学出版会.

経済産業省.(2018).　将来の介護需給に対する高齢者ケアシステムに関する研究会.〈https://www.meti.go.jp/press/2018/04/20180409004/20180409004.html〉(2021.10.14).

Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D. K., Normand, S. L., WALTERS, E. E., & Zaslavsky, A. M. (2002). Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. *Psychological medicine*, *32*(6), 959-976.

Kolb, D. A. (2014). Experiential learning: Experience as the source of learning and development. 2nd ED. FT press.

Kim, H. K., Park, C. H., & Lee, N. Y. (2020). Effects of Health Perception, Generativity and Wisdom on Job Competency of Korean Care Workers. *Medico-Legal Update*, 20, 718-723.

Knowles, M. S. (1984). Andragogy in Action. Applying Modern Principles of Adult Education. Jossey Bass.

高　燕・星　旦二・中山直子・高橋俊彦・栗盛須雅子.(2008).　都市在宅前期高齢者における就労状態別にみた 3 年後の累積生存率. *社会医学研究*, 26(1), 1-8.

近藤　勉・鎌田次郎.(2003). 高齢者向け生きがい感スケール（KI 式）の作成および生きがい感の定義. *社会福祉学*, *43*(2), 93-101.

厚生労働省.(2018). 2040 年頃の社会保障を取り巻く環境. 地方制度調査会専門小委員会厚生労働省ヒアリング資料. 2018 年 9 月 12 日.〈https://www.soumu.go.jp/main_content/000573859.pdf 〉(2022.12.16).

厚生労働省.(2022). 高年齢者雇用安定法の改正～70 歳までの就業機会確保～.〈https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/koureisha/topics/tp120903-1_00001.html〉(2023.1.16).

古谷野亘・澤岡詩野・菅原育子・岡村昌記. (2016). 高齢者が日常生活において交流している他者との関係－その分類と把握－(特集 いま改めて考える高齢者の社会関係: 研究の到達点とこれから). *老年社会科学*, 38(3), 345-350.

小山 梓・池田 満・笹尾敏明. (2003). 東京都世田谷区における「プレーパーク」と「地域公園」に見る心理的コミュニティ感覚と育児不安との関連. 日本コミュニティ心理学会第６回大会発表論文集. 40-41.

楠見 孝. (2010). 3 章 大人の学び--熟達化と市民リテラシー. 「学び」 の認知科学事典, 250-263.

Lebel, Jacques (1978). Beyond Andragogy to Gerogogy. Lifelong Learning: The Adult Years, May, 16-19,25.

Levinson, D.J. (1978). The seasons of a man's life. New York: Alfred A. Knopf. [Levinson, D.J. (1992). (南 博訳). ライフサイクルの心理学 (上). 講談社学術文庫].

Lindauer, M. (2003). Aging, creativity and art: A positive perspective on late-life development. Springer Science & Business Media.

Long, D. A., & Perkins, D. D. (2003). Confirmatory factor analysis of the sense of community index and development of a brief SCI. *Journal of community psychology*, 31(3), 279-296.

牧野 篤. (2009). シニア世代の学びと社会－大学がしかける知の循環. 勁草書房.

Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

マルカム・ノールズ. (2002). 成人教育の現代的実践― ペダゴジーからアンドラゴジーへ. 堀薫夫・三輪建二 (監訳) 鳳書房 (原著 Knowles, M.(1980) The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy. Upper Saddle River, NJ: Cambridge, Adult Education.).

丸井ふみ子. (2012). アイデンティティ研究の動向―異文化接触・言語との関係を中心に―. *言語・地域文化研究*, (18), 193-209.

丸島令子. (2005). 世代性尺度の作成: 世代性の関心と行動モデルの測定. *心理臨床学研究*, 23, 422-433

Maslow, A. (1954). Motivation and Personality. 80-106. New York : Harper & Row.

McAdams, D. P., & de St Aubin, E. D. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of personality and social psychology*, 62, 1003-1015.

McAdams, Dan P., and Regina L. Logan (2004). What is generativity?. de St Aubin, E. E., McAdams, D. P., & Kim, T. C. E. (Eds.), The generative society: Caring for future generations (pp.15-31). Washington, DC: American Psychological Association.

McClusky, Y., Howard. (1971). ″Educatin: Background Issues″, A paper for White House Conference on Ageng. Washington, D.C..

McMillan, D. W., & Chavis, D. M. (1986). Sense of community: A definition and theory. *Journal of community psychology*, 14(1), 6-23.

Merriam, S. B., Caffarella, R. S., & Baumgartner, L. M. (2007). Learning in adulthood : a comprehensive guide. 3rd ed. Jossey-Bass.

南　博文・やまだようこ. (1995). 講座　生涯発達心理学　第 5 巻　老いることの意味－中年・老年期. 金子書房.

三森寧子. (2019). 看護大学における養護教諭養成教育から得た学び. Doctoral dissertation, St. Luke’s International University.

文部科学省. (2012). 超高齢者における生涯学習の在り方に関する検討会. 〈https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/koureisha/1311363.htm〉 (2024 年 1 月 10 日).

Moody, H. R. (1986). Late life learning in the information society. In D. A. Peterson, J. E. Thornton, & J. E. Birren (Eds), Education and aging. Prentice-Hall. 122-148

森　玲奈.（2017).「つながりからの学びフルエイジング」とは何か：超高齢社会における学びの可能性. ミネルヴァ書房.

Morrow-Howell, N., Kinnevy, S., & Mann, M. (1999). The perceived benefits of participating in volunteer and educational activities. *Journal of Gerontological Social Work*, 32(2), 65-80.

内閣府.（2013）. 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査.〈https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/index.html〉（2023.9.9）.

内閣府.（2017）. 平成 29 年度版 高齢社会白書.

内閣府.（2021a）. 令和３年版 高齢社会白書.

内閣府.（2021b）. 高齢者の日常生活、地域社会への参加に関する意識調査.〈https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/r03/zentai/pdf_index.html〉（2023.9.9）.

内閣府.（2022）. 令和４年版 高齢社会白書.

内閣府.（2023）. 令和５年版 高齢社会白書.

内閣府.（2020）. 令和２年版 高齢社会白書.

中原　純.（2014）. シルバー人材センターにおける活動が生活満足度に与える影響： 活動理論 （activity theory of aging） の検証. *社会心理学研究*, 29(3), 180-186.

日本少額短期保険協会.（2022）. 孤独死対策委員会第７階孤独死現状レポート.〈https://www.shougakutanki.jp/general/info/kodokushi/news/kodokusiReport_7th.pdf〉（2023 年 12 月６日）

日本商工会議所.（2018）.「人手不足等への対応に関する調査」集計結果.〈https://www.jcci.or.jp/Laborshortagesurvey2018.pdf〉（2021.10.14）.

西田厚子.（2010）. 定年退職とアイデンティティの危機 「定年宿」 モデルの提案. *労働社会学研究*, 11, 1-36.

小田利勝.（2001）. セカンド・マジョリティ・グループとしての高齢者の社会観. *人間科学研究*, 9(1), 1-29.

岡本秀明. (2010). 高齢者向けの 「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討. *日本公衆衛生雑誌, 57*(7), 514-525.

岡本祐子. (1994). 生涯発達心理学の動向と展望 成人発達研究を中心に. *教育心理学年報*, 33, 132-143.

岡本祐子. (1996). 老年期のアイデンティティ様態と「人生の統合」の課題達成について：老年期のアイデンティティ様態の心理・社会的課題の達成の特徴. 平成５．６．７年度文部省科学研究一般研究（B).「ライフサイクルにおけるアイデンティティの再編過程に関する研究」研究報告書.

岡本祐子. (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学. －成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味. ナカニシヤ出版.

岡本　薫. (2004). 行政関係者のための入門・生涯学習政策. （財）全日本社会教育連合会.

大浦　猛. （1968). 人間の成長と教育の意義　系統看護学講座基礎７「教育学」. 大浦猛（編). 医学書院. p.p. 2-28.

尾澤俊・藤井さやか. (2021). 私有空間を利用した住民運営型の高齢者交流拠点づくり促進策の成果と課題 地方小都市での取り組みに着目して. *都市計画論文集*, 56(3), 1253-1260.

Parsons, M. J. (1987). *How we understand art: A cognitive developmental account of aesthetic experience*. Cambridge University Press.

Pitt-Catsouphes, M., & Smyer, M. A. (2005). Older workers: What keeps them working. *Issue Brief, 1*, 1-6.

斉藤雅茂・藤原佳典・小林江里香・深谷太郎・西真理子・新開省二. (2010). 首都圏ベッドタウンにおける世帯構成別にみた孤立高齢者の発現率と特徴. *日本公衆衛生雑誌*, 57(9), 785-795.

Sarason, S. B. (1974). The psychological sense of community: prospects for a community psychology. Jossey-Bass.

笹尾敏明. (2007). コミュニティ感覚　日本コミュニティ心理学会（編）コミュニティ心理学ハンドブック. 東京大学出版会. p.p. 115-129.

佐藤郁哉. (2008). 質的データ分析法　原理・方法・実践. 新曜社.

佐藤俊彦.(2022). 平均寿命と健康寿命. e-ヘルスネット. 厚生労働省 2022 年 12 月 5 日更新.〈 https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/hale/h-01-002.html.〉(2023 年 12 月 6 日).

Schoklitsch, A., & Baumann, U. (2012). Generativity and aging: A promising future research topic?. *Journal of aging studies*, 26, 262-272.

瀬沼克彰.(2014). 地域をひらく生涯学習. 日本地域社会研究所.

蘇　珍伊・岡田進一・白澤政和. (2007). 特別養護老人ホームにおける介護職員の仕事の有能感に関連する要因: 利用者との関係と職場内の人間関係に焦点をあてて. *社会福祉学*, 47(4), 124-135.

清水史恵.(2012). 小児病棟以外の場における小児看護学実習での学生の学びに関する国内文献の検討. *日本小児看護学会誌*, 21(3), 71-77.

Sobel, M. E. (1982). Asymptotic confidence intervals for indirect effects in structural equation models. *Sociological methodology*, 13, 290-312.

総務省.(2021). 年齢階級別就業率：総務省労働力調査.〈https://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2021/index.html〉(2022.12.6).

総務省.(2023). 年齢階級別就業率：総務省労働力調査.〈https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.html〉(2023.1.16).

総務省統計局.(2023). 人口推計. 令和 5 年 7 月 1 日（確定値）〈https://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/202312.pdf〉(2024 年 1 月 7 日).

末本　誠.(2016). 社会教育研究における方法論議の今日的意味－解釈論的アプローチを中心に―. 日本社会教育学会年報編集委員会（編）日本の社会教育第 60 集 社会教育研究における方法論. 東洋館出版社.

Sugawara, I., Murayama, H., Yoshie, S., Wakui, T., & Arami, R. (2009), Age differences of attitude toward community and community activity aprticipation: Study in a suburban city of Tokyo. The 62nd Annual Scientific Meeting of the Gerontological Sciety of America, Atlanta, USA.

スポーツ庁. (2022). 体力・運動能力調査. 〈https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00402102&tstat=000001088875&cycle=0&tclass1=000001210620&tclass2val=0〉(2024 年 1 月 7 日)

鈴木公洋・井村弥生・本多容子. (2021). 認知症高齢者と家族や友人との遠隔コミュニケーション (4 例)―前頭前野賦活, ストレス状態, ポジティブ感情喚起計測の予備的検討―. *Journal of Health Psychology Research*, 34(1), 23-28.

鈴木　忠. (2008). 生涯発達のダイナミクス. 知の多様性　生きかたの可塑性. 東京大学出版会. 142-143

田渕　恵・権藤恭之. (2011). 高齢者における世代性尺度短縮版の信頼性および妥当性. In *日本心理学会大会発表論文集　日本心理学会第 75 回大会* (pp. 1EV112-1EV112). 公益社団法人 日本心理学会.

田渕　恵・中川　威・権藤恭之・小森昌彦. (2012). 高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *厚生の指標*, 59(3), 1-7.

田渕　恵・三浦朝子. (2014). 高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討. *心理学研究*, 84, 632-638

田中雅文. (2011). ボランティア活動とおとなの学び　自己と社会の循環的発展. 学文社.

富樫ひとみ. (2007). 高齢者の社会関係に関する文献的考察. 社会関係の構造的特質の検討-, *立命館産業社会論集*, 42, 165-181.

上田信行・中原　淳. (2013). プレイフル・ラーニング: ワークショップの源流と学びの未来. 三省堂.

World Health Organization (WHO). (2002). Active ageing: a policyframework. 《ttps://apps.who.int/iris/handle/10665/67215?locale-attribute=en& 》(2021.12.7)

World Health Organization (WHO). (2023). World health statistics 2021: monitoring health for the SDGs, sustainable development goals. World Health Organization 2021.

山田昌弘.（2013）. 日本家族のこれから 社会の構造転換が日本家族に与えたインパクト. 社会学評論, 64(4), 649-662.

＜初出一覧＞

本論分の一部は、すでに発表された以下の論文を、許可を得て一部改変し転載したものである。

第５章　【研究１】

安里知陽・竹内真純・Kim Nahyun・片桐恵子.（2022）. 高齢者の社会参加における学習効果：活動団体の種類による比較. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 第 15 巻, 第２号, 65-78.

第６章　【研究 2】

安里知陽・片桐恵子.（2022）. 介護施設における生きがい就労の効果と課題―3 か月の体験就労による変化―. 老年社会科学, 44(3), 256-268.

＜謝　辞＞

本研究に快くご協力いただいた宝塚市役所 健康福祉部 安心ネットワーク推進室地域福祉課の担当者の方々，介護施設の担当者の方々、ならびに高齢者大学の参加者の皆様、絵画教室の参加者の皆様、「宝塚市健康・生きがい就労トライアル」参加者の皆様、宝塚市郵送調査へご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

なお、《調査３》および《調査４》は、前川ヒトづくり財団（MHF2019-A007 安里知陽）の助成を受けて実施しました。心より感謝申し上げます。

本論文執筆にあたり、指導教官の片桐恵子教授（神戸大学ウェルビーイング先端研究センター・神戸大学大学院人間発達環境学研究科）には、博士課程後期課程の６年間、前期課程においても他コースの所属にも関わらず、リサーチミーティングへの参加にご許可いただき、計８年間にわたり厳しくも温かいご指導をいただきました。多大なるエモーショナル・サポートもいただき、研究継続への気持ちを何度も立て直していただきましたことに、深く感謝いたします。副指導教官の長ヶ原誠教授（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）には、論文完成へ向けての貴重なアドバイスをいただき、全体像を見ることの大切さを教えていただきました。副指導教官の加藤佳子教授（同）には、発達研究における重要な視点について貴重なご指摘とご助言をいただきました。森玲奈准教授（帝京大学 共通教育センター）には、論文執筆にあたり重要な用語に関するご指摘と貴重なアドバイスをいただきました。勅使河原君江准教授（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）には、前期課程において指導教官として修士論文をご指導いただき、修士論文の内容をさらに広げた本博士論文についても理論モデルに関する貴重なアドバイスをいただきました。厚く御礼申し上げます。

片桐研究室の竹内真純氏と院生のみなさまには、リサーチミーティングなどで多くのコメントをいただきました。特に、共に博士論文に向けて励まし合ったキム・ナヒョン氏、調査を共に実施した王珏氏には、友として同僚として多くのサポートをいただき、仲間がいることの心強さを感じました。

職場のスタッフと生徒のみなさんには、長きにわたり院生生活への理解と惜しみない協力、励ましをくださったことにお礼の言葉を申し上げます。

最後に、家族にも長期にわたり理解し、支えてくれたことにお礼を伝えます。

Appendices

Appendix １: 【調査１】の兵庫県の高齢者大学で実施したインタビュー調査と【調査２】の兵庫県の絵画教室で実施したインタビュー調査で使用したインタビューガイド

Appendix ２: 【調査３】の兵庫県宝塚市主催の「健康・生きがい就労トライアル」第１弾、第２弾の参加者を対象に実施したインタビュー調査で使用したインタビューガイド

Appendix ３: 【調査３】の兵庫県宝塚市主催の「健康・生きがい就労トライアル」第１弾の参加者を対象に実施したパネル調査の調査票

Appendix ４: 【調査３】の兵庫県宝塚市主催の「健康・生きがい就労トライアル」第２弾の参加者を対象に実施したパネル調査の調査票

Appendix ５: 【調査４】の兵庫県宝塚市で実施した社会調査の調査票

1.基本的属性		年齢 家族 学歴 これまでの学習歴 現在の学習活動(美術)の継続年数 職歴
2.学習	a学習観	他の学習には参加しているか 生涯学習・学習とはどんなものと捉えているか 家族や友人の態度が学習活動に影響があるか
	b動機	学習を始めようと思ったきっかけはなにか 実際に始めることになったきっかけはどのようなことか 続けて行こうと思う理由はなにか 続けて行こうとするときに必要なもの、条件はなにか 現在の学習活動(美術)に求めること
3.人生	a目標	人生のゴール、目標はあるか ゴール達成のための取り組みで行っていることはあるか 人生で大切にしていること、テーマに思うことはあるか
	b発達	誰でも生涯成長(発達)すると思うか ＊ 今、成長(発達)していると感じるか、どんなことで感じるか 自分の成長(発達)について取り組んでいることはあるか
	c高齢	高齢期に入ったと感じた時はどんな時か 高齢期に対して思うことはどんなことか
4.変容	a生活	高齢期に入ってからの性格や考え方の変化はあるか 学習活動(美術)をしていることで生活などに対する変化があったか
	b学習	現在の学習活動(美術)が、他の学習活動や社会活動に対する行動や考え方に変化があったか 現在の学習活動(美術)で、学習についての考え方、取り組み方の変化はあるか
5.他		ボランティア活動はしているか、またはどういう印象があるか 現在したいけどできていないこと、またはそう思うことはあるか

「健康・生きがい就労トライアル」参加者へのインタビューガイド

1．活動参加のきっかけ、動機、活動への期待
　参加前にもっていた人生、生活に関する計画
　実際に参加することになった直接の要因

2．活動について
　活動中に困ったこと
　活動中に難しく感じたこと
　活動に対して、不満に感じたこと
　活動中に参加したことを後悔するようなことがあったか

3．活動を始めてからの変化
　活動前に期待したことの達成感
　日常生活（リズムなど）や服装、行動、気持ちなどに変化があったか
　活動を通して一番学んだと感じること、そのエピソード
　人生や生活の計画に変化はあったか

4．活動が終了した今の感想
　良かった点、悪かった点など
　今回の活動で得た経験や知識が、今後どのようなことにつながると思うか

5．地域活動について
　ボランティアはやりたい（続けたい）か
　ボランティアはどのようなものだと思うか（気軽に参加できるもの、知識がいるもの・・・）
　ボランティアの報酬（有償・無償）について、どう思うか

あなた自身についてお聞きします。（それぞれ 1 つに○）

性別	1）男性　2）女性	年齢	歳
就業状況	1）働いている　2）引退した　3）主婦・主夫　4）働いていない		
ボランティア活動	1）NPO やグループのメンバーとして日常的に活動している 2）個人ボランティアとして時々活動している　3）していない		
今の地域に住んで何年になりますか	1）5 年未満　2）5～10 年未満　3）10～20 年未満 4）20～30 年未満　5）30～50 年未満　6）50 年以上		
結婚されていますか	1）未婚（一度も結婚したことがない） 2）既婚・配偶者あり（現在、夫または妻がいる） 3）既婚・配偶者なし（夫または妻と離婚、死別して現在独身）		
家族構成	1）一人暮らし　2）夫婦のみ　3）夫婦と未婚の子ども 4）夫婦と子ども家族　5）3 世代　6）その他（　　）		
一日の自由時間	1）ほとんどない　2）1 時間以内　3）3 時間以内 4）5 時間以上　5）その他		
最終学歴	1）中学・高校　2）高専・短大　3）大学・大学院		
トライアル参加の理由（複数回答可）	1）新しい知識を得たいから　2）友達づくりのため 3）地域貢献のため　4）自分さがし、自分づくりのため 5）時間を有意義に使うため　6）その他（　　）		

問１．あなたは宝塚市内で次のようなお付き合いをしている人はだいたい何人いますか。

① あいさつをする程度の人　（　　）人
② 立ち話をする人　（　　）人
③ 地域の活動や行事に誘い合う人　（　　）人
④ 困ったときにお互い助けあえる人　（　　）人
⑤ 家を行き来する人　（　　）人
⑥ 相談や愚痴を言い合える人　（　　）人

問２．地域のつながり（近所づきあいや住民同士の支え合い・助け合いなど）があると感じますか。（当てはまる番号 1 つに○）

1）とても感じる　2）やや感じる　3）あまり感じない　4）まったく感じない

問３．日常の暮らしの中で、あなたにとって地域のつながりは必要だと思いますか。（1 つに○）

1）とても必要だと思う　2）やや必要だと思う　3）あまり必要ないと思う　4）まったく必要ないと思う

問 4．次の考え方について、あなたはどう思いますか（それぞれ 1 つに○）

	とても あてはまる	まあまあ あてはまる	あまり あてはまらない	あてはまらない
1　地域活動に積極的に参加したい				
2　住んでいる地域に貢献したい				
3　社会で問題になっていることの解決に役立ちたい				
4　自分のできるかぎり社会の役に立つべきだ				
5　社会に対して何か恩返しをしたい				
6　多くの場合、人は他の人の役に立とうとすると思う				
7　政治に関して関心がある				

問 5-1．次の活動の中であなたが現在参加しているものすべてに○をつけてください。
(○はいくつでも)

1）自治会、町内会、老人会、婦人会
2）ＰＴＡ
3）同業者の団体、農協、労働組合
4）生協・消費者団体・住民/市民運動の団体
5）ボランティア団体
6）宗教団体
7）学習会や習い事のグループ
8）趣味や遊び仲間のグループ
9）仕事仲間のグループ
10）同窓会
11）電子町内会や地域のメーリングリスト
12）その他
（具体的に：　　）
13）何もしていない

問 5-2　問 5-1 で○をつけた活動の中で、一番頻繁に参加している活動はどれですか？
最も頻繁に参加している活動 _____ （番号でおかきください）

問 5-3 あなたは以下のような活動をするためにどれぐらいの頻度で外出していますか？

	ほとんど 毎日	週に 4,5 回	週に 2,3 回	週に 1 回	月に 1,2 回	外出 しない	その他
問 5-2 で答えた活動							
買い物							
散歩							
トレーニング							
外食							
通院							
友人親戚宅訪問							
その他（ ）							

問 6. 現在、あなたは日常生活に対してどれぐらいの不安を感じますか？「とても不安」を１０点、「不安を感じない」を0点とすると、何点くらいになると思いますか？

１つだけ○をつけてください。

まったく感じない　0 ― 1 ― 2 ― 3 ― 4 ― 5 ― 6 ― 7 ― 8 ― 9 ― 10　とても強く感じる

問 7. あなたは自分の人生を変えるような重大な決断をすることができると感じていますか。
（1～4 のうちもっとも近いものに○）

1）人生を変えることは、ほとんどできないと感じている。
2）どちらかといえば、人生を変えることはできないと感じている。
3）どちらかといえば、人生を変えることはできると感じている。
4）人生を変えることは、十分できると感じている。

問 8. あなたの人生は他の人にくらべて恵まれていると思いますか。（はい、いいえ）

問 9. これまでの人生で、あなたは求めていたことのほとんどを実現できていると感じていますか。（はい、いいえ）

問 10. あなたは過去 30 日の間にどれくらいの頻度で次のことがありましたか。それぞれ一つず○を付けてください。

	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
1　神経過敏に感じましたか					
2　絶望的だと感じましたか					
3　そわそわ、落ち着かなく感じましたか					
4　気分が沈みこんで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか					
5　何をするのも骨折りだと感じましたか					
6　自分は価値のない人間だと感じましたか					

問 11 現在の生活のなかで、あなたが思っていることや感じていることなどをおたずねします。以下の文に書かれたことが、ご自分にどのくらいあてはまるかについて、もっとも近いと思うものに○を１つだけつけてください。

	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1　友人とのつきあいに満足している					
2　何らかのグループ・組織・団体の役に立てた、と思うことがある					
3　興味・関心があることを自分なりに学べている					
4　自分なりに健康に自身がついた、と思うことがある					
5　自分が住んでいる地域の役に立てた、思うことがある					
6　自分にとって何か役に立ちそうなことを学ぶことができた、と思うことがある					
7　一緒に何らかの活動をして楽しめるような友人がいる					
8　自分なりに体力に自信がついた、と思うことがある					
9　教養を高めることができた、と思うことがある					
10　自分なりに、困っている人の手助けをしている					
11　友人と楽しい時間を過ごせている					
12　自分なりに、社会の役に立つようなことをしている					
13　健康の維持につながった、と思うことがある					
14　知的好奇心を満たすことができた、と思うことがある					

問 12. 全体的に見て、過去 1 か月のあなたの健康状態はいかがでしたか。(1 つに○)

1) 最高に良い　2) とても良い　3) 良い　4) あまり良くない　5)良くない　6)ぜんぜん良くない

問 13. 次の質問について、あなたはどのように思いますか。(それぞれ 1 つに○)

	とても あてはまる	まあまあ あてはまる	あまり あてはまらない	あてはまらない
1　私にはまだやりたいことがある				
2　毎日何となく惰性ですごしている				
3　自分が向上したと思えることがある				
4　なにもかもむなしいと思うことがある				
5　私がいなければだめだと思うことがある				
6　私は世の中や家族のためになることをしていると思う				
7　世の中がどうなっていくのか、もっと見ていきたいと思う				
8　何のために生きているのかわからないと思うことがある				
9　他人から認められ評価されたと思うことがある				
10　まだ死ぬわけにいかないと思っている				
11　今日はなにをして過ごそうかと困るときがある				
12　生きていてもしかたないと思う				
13　なにか成し遂げたと思えることがある				
14　私は家族や他人から期待され頼りにされている				

問 14. その他、「健康・生きがい就労トライアル」について、期待すること等ありましたらなんでもお聞かせ下さい。

最初にあなた自身についてうかがいます。（あてはまるもの１つに○）

性別	1）男性　2）女性	年齢	歳
就業状況	1）働いている　2）引退した　3）主婦・主夫　4）働いていない		
ボランティア活動	1）NPO やグループのメンバーとして日常的に活動している 2）個人ボランティアとして時々活動している　3）していない		
今の地域に住んで何年になりますか	1）5 年未満　2）5～10 年未満　3）10～20 年未満 4）20～30 年未満　5）30～50 年未満　6）50 年以上		
結婚されていますか	1）未婚（一度も結婚したことがない） 2）既婚・配偶者あり（現在、夫または妻がいる） 3）既婚・配偶者なし（夫または妻と離婚、死別して現在独身）		
家族構成	1）一人暮らし　2）夫婦のみ　3）夫婦と未婚の子ども 4）夫婦と子ども家族　5）３世代　6）その他（　　）		
一日の自由時間	1）ほとんどない　2）1 時間以内　3）3 時間以内 4）5 時間以上　5）その他		
最終学歴	1）中学・高校　2）高専・短大　3）大学・大学院		

次に、トライアル就労への参加についておうかがいします。

トライアル参加の理由（複数回答可）	1）新しい知識を得たいから　2）友達づくりのため 3）地域貢献のため　4）自分さがし、自分づくりのため 5）時間を有意義に使うため　6）健康（生活不活発予防）の為 7）小遣い稼ぎができるから　8）その他（　　）
現地説明会の参加施設数	1）1 施設　2）2 施設　3）3 施設　4）4 施設以上　5）参加していない
就労する施設を選んだ理由（複数回答可）	1）交通の便が良い　2）自宅に近い　3）施設のことを良く知っている 4）アットホームな雰囲気　5）勤務時間や日数が希望にあった 6）事業者の経営方針等　7）施設の防犯・防災体制　8)施設が清潔 9）施設の新しさ　10）現地説明会の内容　11）説明会担当者の雰囲気 12）施設のスタッフの雰囲気　13）その他（　　）

つぎに、地域に関するあなたの考えをおうかがいします。

問１．あなたは宝塚市内で次のようなお付き合いをしている人はだいたい何人いますか。

① あいさつをする程度の人　（　　）人
② 立ち話をする人　（　　）人
③ 地域の活動や行事に誘い合う人　（　　）人
④ 困ったときにお互い助けあえる人　（　　）人
⑤ 家を行き来する人　（　　）人
⑥ 相談や愚痴を言い合える人　（　　）人

問２．地域のつながり（近所づきあいや住民同士の支え合い・助け合いなど）があると感じますか。（当てはまる番号１つに○）

1）とても感じる　2）やや感じる　3）あまり感じない　4）まったく感じない

問３．日常の暮らしの中で、あなたにとって地域のつながりは必要だと思いますか。(1 つに○)

1）とても必要だと思う　3）あまり必要ないと思う

2）やや必要だと思う　4）まったく必要ないと思う

問 4．次の考え方について、あなたはどう思いますか（それぞれ１つに○）

	とても あてはまる	まあまあ あてはまる	あまり あてはまらない	あてはまらない
1）地域活動に積極的に参加したい				
2）住んでいる地域に貢献したい				
3）社会で問題になっていることの解決に役立ちたい				
4）自分のできるかぎり社会の役に立つべきだ				
5）社会に対して何か恩返しをしたい				
6）多くの場合、人は他の人の役に立とうとすると思う				
7）政治に関して関心がある				

ここからは、あなたの日常の生活についてうかがいます。

問５．あなたは次のようなことのために、どれぐらいの頻度で外出していますか？

	ほとんど 毎日	週に 4,5 回	週に 2,3 回	週に 1 回	月に 1,2 回	しない
1）美術館・図書館・映画館など						
2）買い物						
3）介護や通院の付き添い等						
4）トレーニング・ジム・プールなど						
5）外食						
6）通院						
7）友人親戚宅訪問						
8）その他（　　）						

問６．次の活動の中であなたが現在参加しているものすべてに○をつけてください。
（○はいくつでも）

1）自治会、町内会、老人会、婦人会
2）ＰＴＡ
3）同業者の団体、農協、労働組合
4）生協・消費者団体・住民/市民運動の団体
5）ボランティア団体
6）宗教団体
7）学習会や習い事のグループ
8）趣味や遊び仲間のグループ
9）仕事仲間のグループ
10）同窓会
11）電子町内会や地域のメーリングリス
12）その他（具体的：　　）

13）何もしていない　→【問７へ】

【問６でなんらかの活動に参加にされていると答えた方」にうかがいます】

SQ1. 問６で○をつけた活動の中で、あなたが**最も力を入れて取り組んでいる活動**はどれですか。

１．□（１～１２の番号を□の中におかきください）

２．力を入れて取り組んでいる活動はない →【問７へ】

SQ2. その活動を今後どのくらい続けようと思いますか。（あてはまるもの１つに○）

１．できる限りずっと続けたい　２．あと数年は続けたい　３．やめられるならすぐやめたい

さいごに、あなたの考えをおうかがいします。

【全員の方におうかがいします】

問７．あなたは自分の人生を変えるような重大な決断をすることができると感じていますか。
（1～4 のうちもっとも近いものに○）

1）人生を変えることは、ほとんどできないと感じている。
2）どちらかといえば、人生を変えることはできないと感じている。
3）どちらかといえば、人生を変えることはできると感じている。
4）人生を変えることは、十分できると感じている。

問８．あなたの人生は他の人にくらべて恵まれていると思いますか。

１．はい　　２．いいえ

問９．これまでの人生で、あなたは求めていたことのほとんどを実現できていると感じていますか。

１．はい　　２．いいえ）

問 10. あなたは過去 30 日の間にどれくらいの頻度で次のことがありましたか。それぞれ一つず○を付けてください。

	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
1) 神経過敏に感じましたか					
2) 絶望的だと感じましたか					
3) そわそわ、落ち着かなく感じましたか					
4) 気分が沈みこんで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか					
5) 何をするのも骨折りだと感じましたか					
6) 自分は価値のない人間だと感じましたか					

問 11. あなたは、次の１～５のようなことについてどう思いますか。(それぞれ１つに○)

	非常によくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1) 私が死んでも、人は私のことを覚えていてくれるだろう					
2) 私が人のためにしてきたことは、後世にも残ると思う					
3) 自分の経験や知識を人に伝えるようにしている					
4) 何かに向かって前進していると思う					
5) 無理のない範囲で、募金をしたい					

問 12. 現在の生活のなかで、あなたが思っていることや感じていることなどをおたずねします。以下の文に書かれたことが、ご自分にどのくらいあてはまるかについて、もっとも近いと思うものに○を１つだけつけてください。

	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1）友人とのつきあいに満足している					
2）何らかのグループ・組織・団体の役に立てた、と思うことがある					
3）興味・関心があることを自分なりに学べている					
4）自分なりに健康に自身がついた、と思うことがある					
5）自分が住んでいる地域の役に立てた、思うことがある					
6）自分にとって何か役に立ちそうなことを学ぶことができた、と思うことがある					
7）一緒に何らかの活動をして楽しめるような友人がいる					
8）自分なりに体力に自信がついた、と思うことがある					
9）教養を高めることができた、と思うことがある					
10）自分なりに、困っている人の手助けをしている					
11）友人と楽しい時間を過ごせている					
12）自分なりに、社会の役に立つようなことをしている					
13）健康の維持につながった、と思うことがある					
14）知的好奇心を満たすことができた、と思うことがある					

問 13. 全体的に見て、過去１か月のあなたの健康状態はいかがでしたか。(1 つに○)

1．最高に良い	3．良い	5．良くない
2．とても良い	4．あまり良くない	6．ぜんぜん良くない

問 14. 次の 1～12 の文章について、あなたはどのように思いますか。(それぞれ１つに○)

	とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1) 私にはまだやりたいことがある				
2) 毎日何となく惰性ですごしている				
3) 自分が向上したと思えることがある				
4) なにもかもむなしいと思うことがある				
5) 私がいなければだめだと思うことがある				
6) 私は世の中や家族のためになることをしていると思う				
7) 世の中がどうなっていくのか、もっと見ていきたいと思う				
8) 何のために生きているのかわからないと思うことがある				
9) 他人から認められ評価されたと思うことがある				
10) まだ死ぬわけにいかないと思っている				
11) 今日はなにをして過ごそうかと困るときがある				
12) 生きていてもしかたないと思う				
13) なにか成し遂げたと思えることがある				
14) 私は家族や他人から期待され頼りにされている				

問 15. その他、「健康・生きがい就労トライアル」について、期待すること等なにかありましたらなんでもお聞かせ下さい。

[ ]

地域と社会活動に関する意識調査

令和元年 10 月

（調査企画）神戸大学大学院人間発達環境学研究科　片桐恵子　安里知陽　王珏

（ご記入にあたってのお願い）

・ご記入は必ず**あて名の方ご自身**にお願いいたします。
・回答は、Ｑ１から順にお答えください。
・お答えは、あてはまる番号に○印をつけていただく場合と、マスやカッコの中に数字や文字を記入する場合があります。
・該当者の方だけにお答えをいただく質問もありますが、その場合は指示や矢印（→）にしたがってお答えください。

はじめに、あなたのお住まいの地域にについてうかがいます

Ｑ１．あなたは・・・・・・・・・・・・・１　男性　　２　女性

Ｑ２．あなたの生まれた年は・・・・・・昭和 [　　] 年

Ｑ３．あなたが現在お住まいの小学校区はどちらですか。（あてはまるもの１つに○）
なお、小学校区がわからない場合は、地区名を丁目までご記入ください。（例：中山台１丁目）

１．良元小学校区
２．宝塚第一小学校区
３．小浜小学校区
４．宝塚小学校区
５．長尾小学校区
６．西谷小学校区
７．仁川小学校区
８．西山小学校区
９．売布小学校区
10．長尾南小学校区
11．末成小学校区
12．安倉小学校区
13．中山桜台小学校区
14．長尾台小学校区
15．逆瀬台小学校区
16．美座小学校区
17．光明小学校区
18．末広小学校区
19．中山五月台小学校区
20．丸橋小学校区
21．高司小学校区
22．安倉北小学校区
23．すみれガ丘小学校区
24．山手台小学校区
25．小学校区がわからない
↓
地区名（　　）

Ｑ４．現在お住まいの地区に何年くらい住んでいますか。（転勤などで転出した方は通算した年数でお答えください）

[　　] 年くらい

次に、地域活動についてうかがいます。

Q５．あなたは、下の枠内にあるようなグループや団体に参加していますか。（あてはまるものすべてに○）

	加わっており実際に活動している	加わっているがあまり活動していない	加わっていない
1）自治会、町内会、老人会、婦人会	1	2	3
2）PTA	1	2	3
3）同業者の団体	1	2	3
4）生協・消費者団体・住民/市民運動の団体	1	2	3
5）ボランティア団体	1	2	3
6）宗教団体	1	2	3
7）学習会や習いごとのグループ	1	2	3
8）趣味や遊び仲間のグループ	1	2	3
9）仕事仲間のグループ	1	2	3
10）同窓会	1	2	3
11）電子町内会や地域のメーリングリスト	1	2	3
12）その他（具体的に：　　）	1	2	3

【次ページＱ６へ】

【ここからは、Ｑ５で加わっている「１ 加わっており実際に活動している」もしくは「２ 加わっているがあまり活動していない」のどちらかに１つ以上○をされた方にうかがいます。】

Q５_SQ1. それらの活動で新しい友人は何人できましたか。（あてはまるもの１つに○）

１．できなかった　　２．１人～３人　　３．４人～８人　　４．８人以上

Q５_SQ2. それらの活動で、自分との異なる世代との交流はありましたか。（あてはまるもの１つに○）

１．はい　　2．いいえ

Q５_SQ3. それらの活動に参加にするためにどのくらいの頻度で外出しますか。（あてはまるもの１つに○）

１．ほとんど毎日　　３．週に２、３回　　５．月に１、２回
２．週に４、５回　　４．週に一回　　６．ほとんど外出しない

Q５_SQ4. それらのグループ活動のうち、**最も力を入れて**取り組んでいる活動はどれですか。
１～１２の番号を［　　］の中にお書きください。　**（１つのグループ活動だけを参加されている場合はその活動の番号を書いてください。）**

［　　］

【ここからあなたが最も力を入れて取り組んでいる活動Ｑ５_SQ4 の［　　］に答えた活動】について、もう少し詳しくうかがいます。

Q５_SQ5. その活動を最初に始めたのはいつ頃ですか。（あてはまるもの１つに○）

１．１９歳以前から　　２．２０代から　　３．３０代から　　４．４０代から
５．５０代から　　６．６０代から　　７．７０代から

Q５_SQ6. その活動を行っていて、次のようなことを感じることはありますか。(あてはまるものすべてに○)

1．興味と関心が広がった
2．時間が拘束された
3．生活にリズムやハリができる
4．自分と違う年齢層・世代の人たちと交流が広がった
5．いろいろな価値や考えを知るきっかけになった
6．自分自身を知る機会になった
7．達成感・充実感が味わえた
8．これまで知らなかった近所の人たちとの交流が広がった
9．地域や社会の課題や問題がわかった
10．お金がかかった
11．自分の住む地域以外の人たちとの交流が広がった
12．地域や社会に貢献できた
13．その他（具体的に：　　）

Q５_SQ7. その活動を今後どのくらい続けようと思いますか。(あてはまるもの１つに○)

1．できる限りずっと続けたい　　2．あと数年は続けたい　　3．やめられるならすぐにやめたい

【ここからは、全員の方にうかがいます】

Q６．あなたは、以下のような活動をするために、どれくらいの頻度で外出をしますか。(○は一つ)

	ほとんど毎日	週に4,5回	週に2,3回	週に1回	月に1,2回	しない
1) 美術館・図書館・映画館などを通う	1	2	3	4	5	6
2) 外食	1	2	3	4	5	6
3) 買い物	1	2	3	4	5	6
4) 介護や通院付き添い等	1	2	3	4	5	6
5) 自分の通院	1	2	3	4	5	6
6) 友人親戚宅訪問	1	2	3	4	5	6
7) 仕事・パート・アルバイト	1	2	3	4	5	6
8) その他（具体的に　　）	1	2	3	4	5	6

市民活動についてうかがいます。

Q７．あなたはこの５年間くらいにどのくらい投票しましたか。それぞれお答えください。

（それぞれ１つに○）

	ほとんど投票したことがない	たまに投票した	かなり投票した	ほぼ毎回投票
地方選挙（都道府県/市区町村選挙）	1	2	3	4
国政選挙（衆議院・参議院議員選挙）	1	2	3	4

Q８．あなたは政治にどのくらい関心がありますか。（あてはまるもの１つに○）

1．非常に関心がある　2．ある程度関心がある　3．あまり関心がない　4．全く関心がない

Q９．あなたは、テレビや新聞、ラジオ、インターネットなどのメディアで、政治に関するニュースや情報などをどの程度見聞きしていますか。当てはまる番号に 1 つだけ○をつけてください。

1．１日に数回
2．１日に一回
3．週に５、６回
4．週に３、４回
5．週に１、２日
6．週に一日未満
7．全く見聞きしていない

Q10．あなたは、テレビや新聞、ラジオ、インターネットなどのメディアで、政治に関するニュースや情報などをどの程度見聞きしていますか。当てはまる番号に１つだけ○をつけてください。

1．１日に数回
2．１日に一回
3．週に５、６回
4．週に３、４回
5．週に１、２日
6．週に一日未満
7．全く見聞きしていない

Q11．次の１）～５）のような社会に対する考え方についてあなたはどう思いますか。

（それぞれ１つに○）

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1) 自分自身には社会を変える力はない	1	2	3	4
2) 政治や社会に関心を持つより、自分の生活を充実させることに時間を使いたい	1	2	3	4
3) 自分の楽しみをしながら社会に貢献していきたい	1	2	3	4
4) 社会で問題になっていることの解決に役立ちたい	1	2	3	4
5) 社会に対してなにか恩返しをしたい	1	2	3	4

Q12. 次にあげる意見それぞれについて、あなたのお気持ちに近いものを１つずつ選んでください。

	そう思う	まあそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
1) 自分の住む市区町村の社会的な問題の解決に自分が役立つことができる	1	2	3	4	5
2) 自分の住む都道府県の社会的な問題解決に自分が役立つことができる	1	2	3	4	5
3) 自分のような普通の市民には、政府のすることに対して、それを左右する力はない	1	2	3	4	5
4) いつも偏りのない判断をしようとする	1	2	3	4	5
5) 一つの二つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	1	2	3	4	5
6) いろいろな考えの人と接して多くのことを学びたい	1	2	3	4	5

Q13. 次に、現在あなたがお住まいの地域についてうかがいます。現在住んでいる地域について、次の１）～５）の事柄はどの程度あなたにあてはまりますか。 （それぞれ１つに○）

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1) この地域に住む多くの人と顔見知りである	1	2	3	4
2) この地域は、私にとって居心地が良い	1	2	3	4
3) この地域の住人のほとんどが私のことを知っている	1	2	3	4
4) この地域の人に私がどう思われているかが気になることがある	1	2	3	4
5) この地域のあり方に対して、影響力を持っている	1	2	3	4
6) この地域で何か問題が生じたとき、住人がそれを自ら解決することができる	1	2	3	4
7) この地域は、私にとって住むのに適している	1	2	3	4
8) この地域に住む人々は、皆同じような価値観を共有している	1	2	3	4
9) 私とこの地域に住む人々は、この地域に同じものを期待している	1	2	3	4
10) この地域に住む人々は、私にとって大切なことである	1	2	3	4
11) この地域に住む人々は、お互いに良い	1	2	3	4
12) この地域に住み続けると思う	1	2	3	4
13) 地域活動に積極的に参加したい	1	2	3	4
14) 住んでいる地域に貢献したい	1	2	3	4

あなたのご家族や友人についてうかがいます。

Q14. あなたは、結婚をしていらっしゃいますか。（事実婚も含みます）（あてはまるもの１つに○）

１．未婚（一度も結婚したことがない）
２．既婚・配偶者あり（現在、夫または妻がいる）
３．既婚・配偶者なし（夫または妻と離婚、死別して現在独身）

Q15. 現在、一緒にお住まいの方は、次のうちどなたですか。
同じ敷地内で別の棟に住んでいる方も含みます。　（あてはまるものすべてに○）

１．一人暮らし
２．配偶者（夫または妻）
３．あなた又は配偶者の親
４．子
５．子の配偶者（嫁または婿）
６．孫
７．その他の親族
８．親族以外の者

→【Q16 へ】

Q15 で、「１．一人暮らし」と答えた方にうかがいます。一人暮らしになられたのはいつからですか。
（あてはまるもの１つ○）

１．19 歳以前　　２．20 代から　　３．30 代から　　４．40 代から
５．50 代から　　６．60 代から　　７．70 代から

【全員の方にうかがいます】

Q16. 家族や親類以外で、あなたには親しい友人が何人くらいいますか。（あてはまるもの１つに○）

１．１～２人　　２．３～４人　　３．５～９人
４．１０～１９人　　５．２０人以上　　６．いない

Q17. これらの友人(Q16 で答えた親しい友人)のうち、以下にあてはまる人はどの程度いますか。

(あてはまるもの１つに○)

	全員	かなり	何人か	まったく
ア. あなたと同性の人	1	2	3	4
イ. あなたと同世代の人	1	2	3	4
ウ. あなたと学歴が同じくらいの人	1	2	3	4
エ. あなたと収入が同じくらいの人	1	2	3	4
オ. 外国人	1	2	3	4

【Q17_SQ1 へおすすみください】

【Q18 へ】

Q17_SQ1. これらの友人たちはあなたが困っている時や悩でいる時心配してくれましたか。
(あてはまるもの１つに○)

１．そのようなこと全くない　　２．めったにない　　３．時々　　４．しばしば

Q17_SQ2. これらの友人たちと一緒に楽しい時間を過ごしましたか。(あてはまるもの１つに○)

１．そのようなこと全くない　　２．めったにない　　３．時々　　４．しばしば

Q17_SQ3. これらの友人はあなたが必要な時力を貸してくれましたか。(あてはまるもの１つに○)

１．そのようなこと全くない　　２．めったにない　　３．時々　　４．しばしば

【全員にうかがいます】

Q18. あなたの普段の生活の中で、あいさつ程度の会話や、世間話をする相手はどなたですか。
(あてはまるものすべてに○)

１．ほとんど話はしない → **【次ページ、Q19 へお進みください】**

２．子（息子、娘）
３．子の配偶者（婿、嫁）
４．親
５．兄弟姉妹・親戚
６．友人
７．近所の人
８．参加している会や団体の人
９．ヘルパーなどの介護サービスの人
10．民生委員や役所の人
11．病院の医師や看護師など
12．店の人
13．その他（　　）

【次の質問へ】

Q18_SQ1. これらの方々（Q18 で答えた方）とどの程度頻繁に話しますか？直接会っての会話だけでなく、SNS やメールや電話の会話も含みます。(あてはまるもの１つに○)

１．毎日
２．２～３日に１回
３．４～７日（一週間）に一回
４．２週間に１回
５．１ヶ月に１回
６．ほとんどはしない
７．分からない

【全員の方にうかがいます】

Q19. 次の文章について、あてはまる人はどなたですか。あてはまるすべての人を、下の［　　］から選んで、番号に○をつけてください。（例のように、複数の場合は複数の数字に○をつけてください。

1．家族	6．参加している会や団体の人
2．兄弟姉妹・親戚	7．上記１～６以外の人
3．友人	8．あてはまる人はいない
4．近所の人	9．人に頼む必要はない
5．ヘルパーなど介護サービスの人	

【例）買い物を頼む相手（娘とヘルパーの場合）　①　2　3　4　⑤　6　7　8　9】

1）電球の交換などの日常のちょっとした用事を頼みたい相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9
2）心配ごとや悩み事を相談したい相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9
3）ペットの世話を頼みたい相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9
4）病気で何日か寝込んだ時に看病や世話を頼みたい相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9
5）いざというときにお金の援助を頼みたい相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9
6）パソコン・スマホ・タブレット・ガラケーなど電子機器について相談したい相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9
7）喜びや悲しみを分かち合う相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9
8）一緒にいるとほっとする相手	1	2	3	4	5	6	7	8	9

Q20. あなたが、親しくお付き合いされている方についてうかがいます。
その方々がお住まいのところへは、それぞれよく使う交通手段(徒歩や電車、バス、車等)で、片道何分程度かかりますか。**（該当する方が複数の方がいる場合は、最も親しい方についてお答えください）**
（あてはまるもの１つに○）

	同居（同じ敷地の同居も含む）	15 分未満	15 分以上 1 時間未満	1 時間以上 2 時間未満	2 時間以上	いない
1）親	1	2	3	4	5	6
2）子ども	1	2	3	4	5	6
3）孫	1	2	3	4	5	6
4）兄弟・姉妹	1	2	3	4	5	6
5）その他の親族	1	2	3	4	5	6
6）友人	1	2	3	4	5	6

あなたが日頃感じていることをうかがいます。

Q21. 以下のようなことを、日頃あなたはどれくらい感じていますか。　　(最も近いものに１つ○)

	全くない	めったにない	時々ある	いつもある
1) 独りぼっちだと感じる	1	2	3	4
2) まわりの人たちと共通点が多いと感じる	1	2	3	4
3) 人と親密だと感じる	1	2	3	4
4) 他人から孤立していると感じる	1	2	3	4
5) ほんとうに自分のことを理解してくれている人たちがいると感じる	1	2	3	4
6) まわりに人はいるけれど、心は通っていないと感じる	1	2	3	4

Q22. 日ごろの生活についておうかがいします。次の 1)～10)のことについてあなたはどう思いますか。
(それぞれ１つに○)

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1) 時間ができたらいろいろやってみたいことがある	1	2	3	4
2) 新しいことを始めるのはおっくうだ	1	2	3	4
3) 自分がしたいことがわからない	1	2	3	4
4) 何か新しい趣味などをはじめるとき、情報をどうやって手にいれたらいいかわからない。	1	2	3	4
5) 自分の楽しみがない人間はつまらない	1	2	3	4
6) 人から認められたい	1	2	3	4
7) 自分の生活を豊かにしたい	1	2	3	4
8) 楽しむことが好きだ	1	2	3	4
9) 自分の健康を保つために何かしたい	1	2	3	4
10) 何か自分自身を向上させることをしたい	1	2	3	4

Q23. あなたは、日常生活全般について次のようなことにどの程度不安を感じますか。

（もっとも近いと思うものに１つ○）

	まったく不安を感じない	あまり不安を感じない	どちらともいえない	やや不安	とても不安	考えたことがない
１．自分の病気と介護のこと	1	2	3	4	5	6
２．身体的なおとろえ	1	2	3	4	5	6
３．頼れる人がいなくなること	1	2	3	4	5	6
４．生きがいがなくなること	1	2	3	4	5	6
５．住まいに関すること	1	2	3	4	5	6
６．家族（親・配偶者など）の病気と介護のこと	1	2	3	4	5	6
７．子や孫などの将来	1	2	3	4	5	6
８．人(近隣、親戚、友人、仲間など)のつきあいのこと	1	2	3	4	5	6
９．仕事・就労に関すること	1	2	3	4	5	6
10．生活のための収入のこと	1	2	3	4	5	6
11．貯金や財産のこと	1	2	3	4	5	6
12．パソコンやスマホなどの電子機器類の使い方が分からないこと	1	2	3	4	5	6
13．新しい商品やサービスの利用方法がわからなくなること	1	2	3	4	5	6
14．時代（価値観・文化）が大きく変わってしまうこと	1	2	3	4	5	6
15．だまされたり、犯罪に巻き込まれたりすること	1	2	3	4	5	6
16．自然災害(地震･洪水など)	1	2	3	4	5	6
17．孤独死	1	2	3	4	5	6
18．お墓の管理・相続のこと	1	2	3	4	5	6

Q24. あなたは過去 30 日の間に、どれくらいの頻度で次のことがありましたか。　（それぞれに１つに○）

	全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
1) 神経過敏に感じましたか	1	2	3	4	5
2) 絶望的だと感じましたか	1	2	3	4	5
3) そわそわ、落ち着かなく感じましたか	1	2	3	4	5
4) 気分が沈みこんで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか	1	2	3	4	5
5) 何をするのも骨折りだと感じましたか	1	2	3	4	5
6) 自分は価値のない人間だと感じましたか	1	2	3	4	5

ここからは、あなたの考えをうかがいます。

Q25. あなたは、次の文章についてどのように思いますか。　（それぞれ１つに○）

	そう思う	どちらでもない	そう思わない
1) 私が生活の中で体験することは、たいていは誰か影響力の強い人たちによって決められているような気がする	1	2	3
2) 私の人生の大部分は影響力の強い人たちによって左右されている。	1	2	3
3) 望みをかなえるためには、目上の人に気に入られなければならない。	1	2	3
4) 私が計画を立てても、私に影響力を持つ人たちの意向にそわない計画であれば、それを実現させることはできない。	1	2	3
5) たいていの場合、自分の個人的な利益は自分自身で守ることができる。	1	2	3
6) 望みがかなうのは、自分がそうなるように努力したからである。	1	2	3
7) 自分の人生は自分自身のなせるわざである。	1	2	3

Q26. あなたは、次の 1)から 3)の考え方についてどのように思いますか。　（それぞれ１つに○）

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1) ほとんどの人は信頼できる。	1	2	3	4
2) 知らない人よりも知っている人の方が信頼できる。	1	2	3	4
3) 一般に長く付き合っている人は必要なときに助けてくれることが多い。	1	2	3	4

Q27. あなたは、次の 1)～6)についてどう思いますか。(それぞれ１つに○)

	非常によくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらな
1) 一般的に高齢者は、子どもや若い世代の手本になると思う	1	2	3	4	5
2) 自分の人生について振り返ることがよくある。	1	2	3	4	5
3) 自分には社会人としての責任があるがあると思う	1	2	3	4	5
4) 一般的に高齢者は社会や家庭において、高齢者としての役割があると思う	1	2	3	4	5
5) 家族や周りの人からの期待には、できるだけ応えたいと思う	1	2	3	4	5
6) 地域独特の文化や技術を、未来へ引き継いでいきたいと思う	1	2	3	4	5

Q28. 次の（1）～（5）の文章について、あなたはどのように思いますか。(各文章の下にある、１側の文章から、７側の文章までの間でどの程度、どちらかの方により近いか、１から７の番号の間でよりあなたの考えに近い位置の番号に○をつけてください。)

（1）**今までの私の人生は…**

失敗や悔いの連続であった　1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7　大変意義深い価値あるものだった

（2）**生きることに私は…**

なんの目標も目的ももっていない　1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7　非常にはっきりした目標や目的をもっている

（3）**私の生活を考えると私は…**

何のためにいるのかわからない　1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7　今生きている理由がはっきりしている

（4）**私は生活の中で…**

何をしたらよいのかわからない　1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7　自分のすべきことや役割がはっきりしている

（5）**私は現在やっている活動や役割に対して…**

全く消極的である　1・・・2・・・3・・・4・・・5・・・6・・・7　積極的に一生懸命打ち込んでやっている

Q29. あなたの現在の気持ちについてうかがいます。(1)から 3)のそれぞれに１つに○)

1) 最近になって小さなことを気にするようになったと思います・・・・　1　はい　　2　いいえ

2) あなたの人生は他の人にくらべて恵まれていると思いますか・・・・　1　はい　　2　いいえ

3) これまでの人生で、あなたは求めていたことのほとんどを実現できていると感じますか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1　はい　　2　いいえ

Q30. あなたは、次の 1)～5)のようなことについてどう思いますか。(それぞれ１つに○)

	非常によくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1) 私が死んでも、人は私のことを覚えていてくれるだろう	1	2	3	4	5
2) 私が人のためにしてきたことは、後世にも残ると思う	1	2	3	4	5
3) 自分の経験や知識を人に伝えるようにしている	1	2	3	4	5
4) 何かに向かって前進していると思う	1	2	3	4	5
5) 無理のない範囲で、募金をしたい	1	2	3	4	5

Q31. 次の 1)～6)の考えについて、あなたはどのように思いますか。(それぞれ１つに○)

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1) 人と一緒にいると、元気が出てくる	1	2	3	4
2) いろいろな人と知り合うことは興味深い	1	2	3	4
3) 人と付き合うのはわずらわしい	1	2	3	4
4) 自分の価値を認めてくれる人にそばにいてほしい	1	2	3	4
5) これからも人づきあいを広げていきたい	1	2	3	4
6) いろいろな人と出会って刺激を得たい	1	2	3	4

最後に、あなた自身についてお伺いします。

Q32. あなたのお住まいは、次のどれですか。(あてはまるもの１つに○)

1．持ち家
2．民間の賃貸住宅
3．有料老人ホーム
4．サービス高齢者住宅
5．住宅・官舎・寮など
6．その他（　　）

Q33. あなたが最後に在籍した（又は現在、在席している）学校はどこですか。(あてはまるものに１つ○)

1．小・中学校
2．高等学校
3．短大・高専（高等専門学校)
4．大学・大学院
5．専門学校・専修学校
6．その他 (具体的に:　　)

Q34. 全体的にみて、現在あなたは幸せだと感じていますか。(あてはまるもの１つに○)

1．とても幸せ　　2．ある程度幸せ　　3．あまり幸せでない　　4．全く幸せでない

Q35. あなたは、ご自分の現在の経済的な暮らし向きについてどのようにお考えですか。
（あてはまるものに１つ○）

1　家計にゆとりがあり、まったく心配なく暮らしている
2　家計にあまりゆとりがないが、それほど心配なく暮らしている
3　家計にゆとりがなく、多少心配である
4　家計が苦しく、非常に心配である
5　わからない

Q36. 全体的にみて、あなたの現在の健康状態は、いかがですか。（あてはまるもの１つ○）

1　良い
2　まあ良い
3　普通
4　あまり良くない
5　良くない

Q37. あなたは現在、健康上の問題で日常生活に何か影響がありますか。

1　ある　　2　ない

Q38. あなたは現在働いていますか。（あてはまるものに１つ○）

1．週労働時間 30 時間以上の従業員
2．週労働時間 30 時間未満のパートタイマー・非常勤・アルバイト・嘱託で就業
3．自営業主
4．家族従業（家業などの手伝い）・内職
5．無職（専業主婦・主夫、定年退職者、求職中など）
6．その他（具体的に：　　）

以上でアンケートは終わりです。

長い時間のご協力、まことにありがとうございました。
同封の封筒に入れ、**１１月１９日（火）まで**にご投函ください（切手不要）。

回答にあたって何かお気づきの点がございましたら、下の欄にお書きいただけますようお願いいたします。